

すみ よし い せき  
住 吉 B 遺 跡

あか いし い せき  
赤 石 遺 跡

国営尾鈴農業水利事業大内ファームボンド敷地造成工事及び調整水槽工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

宮崎県埋蔵文化財センター



遺跡遠景（南東上空から）



遺跡全景（南東上空から）



縄文時代中期の土器群

## 序 文

宮崎県教育委員会では、2007(平成19)年度に国営尾鈴農業水利事業大内ファームボンド敷地造成工事及び調整水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した住吉B遺跡では、旧石器時代～縄文時代早期における集石遺構や土坑、土器・石器遺物などが確認され、赤石遺跡では、縄文時代中期～後期の堅穴住居・土坑、土器・石器遺物や弥生時代中期の堅穴住居、土器・石器遺物などが確認されました。

これらは、当該期の地域間交流の様相を考える上で大きな成果となりました。ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で良好な資料の蓄積になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで広く活用され、埋蔵文化財保護に対する認識や理解を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係諸機関はじめ、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

2009年2月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 福永展幸

## 例　　言

1 本書は、国営尾鈴農業水利事業大内ファームボンド敷地造成工事及び調整水槽工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県児湯郡川南町所在の住吉B遺跡及び赤石遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所の委託を受け、宮崎県教育委員会を主体に宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、住吉B遺跡は2007（平成19）年11月19日から2008（平成20）年2月15日まで、赤石遺跡は2007（平成19）年11月19日から2008（平成20）年1月21日まで行った。

3 発掘調査は、住吉B遺跡を調査第二課第四担当主査二宮満夫・同課第三担当主査若松宏一が、赤石遺跡を同課第三担当主査谷口千尋・同課第四担当主査森田利枝が行った。また、現地調査における図面作成及び写真撮影については、それぞれの調査担当者が行った。なお、発掘調査についての組織は以下の通りである。

2007（平成19）年度	所長	清野 勲	調査 第二課長	石川 悅雄
	副 所長	加藤 信郎	調査 第二課主幹調査第四担当リーダー	近藤 協
	統務 調査課長	宮越 尊	調整担当（文化財調査主査）	日高 広人
	統務課主幹統務担当リーダー	高山 正信		

4 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については住吉B遺跡を二宮が、赤石遺跡を谷口が、それぞれ整理作業員の協力を得て行った。

5 住吉B遺跡の空中写真撮影業務は、有限会社スカイサーベイ九州に、基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、有限会社川南技術コンサルタントに委託した。赤石遺跡の空中写真撮影業務は、有限会社ふじたに、基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、有限会社久保田測量設計に委託した。

6 赤石遺跡の自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託し、分析結果については第V章に収録した。

7 本書の執筆は、第I・III章を二宮、第II・IV章を谷口が行い、全体の編集については、両者が協議のうえ行った。なお、整理作業・報告書作成についての組織は、以下の通りである。

2008（平成20）年度	所長	福永 幸三	調査 第二課長	石川 悅雄
	副 所長	加藤 信郎	調査 第二課主幹調査第四担当リーダー	近藤 協
	副 所長 兼 総務課長	長友 英詞	調整担当（文化財調査主査）	日高 広人
	統務課主幹統務担当リーダー	高山 正信		

8 整理作業にあたっては、当センターの職員から有益な助言を得た。また、住吉B遺跡の地層の微細観察および赤石遺跡出土の石製品の石材同定については、赤崎広志氏（宮崎県総合博物館）の御教示を得た。

9 調査で出土した遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 凡　　例

- 1 本書で使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1図（川南・石河内）、川南町役場発行の1万分の1図、農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所提供の千分の1図をもとに作成した。
- 2 本書で使用した方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については、海拔絶対高を示す。
- 3 本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編2006『新版 標準土色帖』28版に準じた。
- 4 本書における遺構名の表記は、竪穴住居をS A、土坑をS C、集石遺構をS I、不明遺構をS Zで示し、遺構番号については、道路毎に整数の通し番号を付した。
- 5 本書で取り扱う縄文土器のうち、早期については、新東見一1989、木崎康弘1998、中期については、柴畠光博1997において、それぞれに示された分類と編年に準じた。その他にも、金丸武司2004を参考にした。また、弥生土器については、石川悦雄1984、柴畠光博2000を参考にした。  
なお、本書で参考および引用した文献については、p.76に収録しているが、特に本文中において注などで示していない。

# 本文目次

## 序

## 例言

## 凡例

### 第Ⅰ章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 整理作業および報告書作成の経過	2

### 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地	3
第2節 既往の調査と歴史的環境	3

### 第Ⅲ章 住吉B遺跡の調査結果

第1節 発掘調査の経過	6
第2節 発掘調査区の層序	7
第3節 旧石器時代	9
1 石器遺物の出土状況	9
2 石器遺物	9
第4節 縄文時代早期	12
1 遺構の分布と遺物の出土状況	12
2 検出遺構と出土遺物	12
i) 土坑	ii) 集石遺構
iii) 遺構に伴わない遺物	
第5節 まとめ	27

### 第Ⅳ章 赤石遺跡の調査結果

第1節 発掘調査の経過	28
第2節 発掘調査区の層序	29
第3節 縄文時代中期～後期	32
1 検出遺構と出土遺物	32
i) 壁穴住居	ii) 土坑
2 遺物包含層出土の遺物	40
i) 土器	ii) 石器遺物
第4節 弥生時代中期	54
1 検出遺構と出土遺物	54

i) 塗穴住居	ii) 不明遺構
iii) 弥生土器集中部	
2 遺物包含層出土の遺物	68
i) 土器	
第5節 その他の時代の遺物	72
第6節 まとめ	73
1 縄文時代	73
2 弥生時代	75
第V章 赤石遺跡における自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定	86
1 はじめに	86
2 試料と方法	86
3 測定結果	86
i) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値	
ii) $^{14}\text{C}$ 年代測定値	
iii) 曆年代 (Calendar Age)	
4 所見	87
第2節 樹種同定	88
1 はじめに	88
2 試料	88
3 方法	88
4 結果	88
5 考察	90
第3節 炭化種実同定	90
1 はじめに	90
2 試料	90
3 方法	90
4 結果	90
i) 分類群	
ii) 種実群集の特徴	
5 考察	91
第4節 植物珪酸体分析	91
1 はじめに	91
2 試料	92
3 分析法	92
4 分析結果	93
i) 分類群	
ii) 植物珪酸体の検出状況	
5 植物珪酸体分析から推定される植生と環境	93
第5節 花粉分析	95

1はじめに	96
2試料	96
3方法	96
4結果	95
i) 分類群	
ii) 花粉群集の特徴	
5花粉分析から推定される植生と環境	96

## 卷頭図版目次

卷頭図版 赤石遺跡

上 遺跡遠景 中 遺跡全景 下 縄文時代中期の土器群

## 図版目次

1 住吉B遺跡 調査地遠景	10 赤石遺跡 遺物包含層および縄文時代の遺構（一）
上 遺跡東側上空から住吉B遺跡および上面木山方面を望む	上 III層（B 2 区）出土遺物No426
下 遺跡上空から東側日向瀬方面を望む	中 S A 1 遺物出土状況
2 住吉B遺跡 南壁地層断面	下 S A 1 出土遺物No106
および縄文時代早期の遺構（一）	11 赤石遺跡 縄文時代の遺構（二）
上 南壁地層断面	上 S C 1 検出状況
下 縄文時代早期遺構面全景	中 S C 1 土層観察ベルト断面
3 住吉B遺跡 縄文時代早期の遺構（二）	下 S C 2 土層観察ベルト断面
上 南西部遺集中部	12 赤石遺跡 縄文時代の遺構（三）
中 S C 2 検出状況	上 S C 3 検出状況
下 S C 2 縄文土器出土状況	中 S C 3 遺物出土状況
4 住吉B遺跡 縄文時代早期の遺構（三）	下 S C 4 検出状況
上 S I 1 検出状況	13 赤石遺跡 縄文時代の遺構（四）
下 S I 1 検出状況	上 S C 10 墓土土層断面
5 住吉B遺跡 旧石器時代の遺物	中 S C 11 遺物出土状況
6 住吉B遺跡 S C 2・S I 1 出土	下 S C 11 墓土土層断面
および縄文時代早期の遺物（一）	14 赤石遺跡 弥生時代の遺構（一）
7 住吉B遺跡 縄文時代早期の遺物（二）	上 S A 2 遺物出土状況
8 住吉B遺跡 縄文時代早期の遺物（三）	中 S A 2 床面検出状況
9 赤石遺跡 調査区	下 S A 2 完掘状況
上 調査地遠景	15 赤石遺跡 弥生時代の遺構（二）ほか
中 調査区全景	上 調査区南東側部の遺構検出状況
下 調査区西壁土層断面	中 S Z 1 床面検出状況

- 下 S Z 1 完掘状況
- 16 赤石遺跡 縄文時代の遺物（一）
- 上 S A 1 出土遺物①：縄文土器・石器
- 中 S A 1 出土遺物②：縄文土器
- 下 S C 1 ~ S C 4 出土縄文土器
- 17 赤石遺跡 縄文時代の遺物（二）
- 上 S C 9 ~ S C 11 出土縄文土器
- 中 S C 5 ~ 7 · 9 · 10 · 11 出土石器
- 下 S C 11 出土石器
- 18 赤石遺跡 縄文時代の遺物（三）
- 上 遺物包含層出土縄文土器①
- 中 遺物包含層出土縄文土器②
- 下 遺物包含層出土縄文土器③
- 19 赤石遺跡 縄文時代の遺物（四）
- 上 遺物包含層出土縄文土器④
- 中 遺物包含層出土縄文土器⑤
- 下 遺物包含層出土縄文土器⑥
- 20 赤石遺跡 縄文時代の遺物（五）
- 上 遺物包含層出土縄文土器⑦
- 中 遺物包含層出土縄文土器⑧
- 下 遺物包含層出土石器①
- 21 赤石遺跡 縄文時代の遺物（六）
- 上 遺物包含層出土石器②
- 中 遺物包含層出土石器③
- 下 遺物包含層出土石器④
- 22 赤石遺跡 縄文時代の遺物（六）・弥生時代の遺構出土の遺物（一）
- 上 S A 2 出土縄文土器
- 中 S A 2 出土弥生土器①
- 下 S A 2 出土弥生土器②
- 23 赤石遺跡 弥生時代の遺構出土の遺物（二）
- S A 2 出土弥生土器③
- 24 赤石遺跡 弥生時代の遺構出土の遺物（三）
- 上 S A 2 出土弥生土器④
- 中 S A 2 出土石器①
- 下 S A 2 出土石器②
- 25 赤石遺跡 弥生時代の遺構出土の遺物（四）
- 上 S A 2 出土石器③
- 中 S Z 1 出土縄文土器
- 下 S Z 1 出土弥生土器
- 26 赤石遺跡 弥生時代の遺構出土の遺物（五）ほか
- 上 S Z 1 出土石器①
- 中 S Z 1 出土石器②
- 下 弥生土器集中部出土遺物：弥生土器・石器
- 27 赤石遺跡 弥生時代の遺物（一）
- 上 遺物包含層出土弥生土器①
- 中 遺物包含層出土弥生土器②
- 下 遺物包含層出土弥生土器③
- 28 赤石遺跡 弥生時代の遺物（二）
- 遺物包含層出土弥生土器④
- 29 赤石遺跡 その他の遺物
- 上 S A 1 · S C 2 · S C 4 · S A 2 · S Z 1
- 下 その他の時代の遺物：石器・土師器

## 挿 図 目 次

- |                         |                                    |                        |
|-------------------------|------------------------------------|------------------------|
| 図 1 住吉 B 道路・赤石遺跡の調査地位置図 | 図 6 各層位出土の旧石器時代石器遺物（1）             | 図 9 縄文土器早期の遺構平面図       |
| 図 2 周辺の道路分布             | 図 7 各層位出土の旧石器時代石器遺物（2）             | および出土遺物位置図             |
| 図 3 調査地位置図              | 図 8 S C 1 平断面図および S C 1 · 2 出土縄文土器 | 図 10 S I 1 平断面図        |
| 図 4 調査地配置図              |                                    | 図 11 S I 1 出土の打製石斧     |
| 図 5 西壁地盤断面図             |                                    | 図 12 各層位出土の縄文時代早期土器（1） |

図13 各層位出土の縄文時代早期 土器（2）	図27 S A 1出土状況図	図47 S A 2出土遺物実測図（1）
図14 各層位出土の縄文時代早期 打製石器	図28 S C 1平断面図	図48 S A 2出土遺物実測図（2）
図15 各層位出土の縄文時代早期削器	図29 S C 2・3平断面図	図49 S A 2出土遺物実測図（3）
図16 各層位出土の縄文時代早期搔器	図30 S C 1～4出土遺物実測図	図50 S A 2出土遺物実測図（4）
図17 各層位出土の縄文時代早期 細部調整剥片	図31 S C 9・10平断面図	図51 S A 2出土遺物実測図（5）
図18 各層位出土の縄文時代早期敲石	図32 S C 11平断面図	図52 S Z 1実測図
図19 各層位出土の縄文時代早期 磨石・砥石	図33 S C 9～11出土縄文土器実測図	図53 S Z 1出土遺物実測図（1）
図20 各層位出土の縄文時代早期 局部磨製石斧	図34 S C 5～11出土石器実測図	図54 S Z 1出土遺物実測図（2）
図21 各層位出土の縄文時代早期 打製石斧・接合資料・石核	図35 遺物包含層出土遺物実測図（1）	図55 S Z 1出土遺物実測図（3）
図22 調査地配置図	図36 遺物包含層出土遺物実測図（2）	図56 弥生土器集中部出土遺物実測図
図23 地層断面模式図	図37 遺物包含層出土遺物実測図（3）	図57 遺物包含層出土遺物実測図（12）
図24 道構分布図	図38 遺物包含層出土遺物実測図（4）	図58 遺物包含層出土遺物実測図（13）
図25 土層観察ベルト断面図	図39 遺物包含層出土遺物実測図（5）	図59 その他の時代の出土遺物
図26 S A 1出土遺物実測図	図40 遺物包含層出土遺物実測図（6）	実測図（1）
	図41 遺物包含層出土遺物実測図（7）	図60 その他の時代の出土遺物
	図42 遺物包含層出土遺物実測図（8）	実測図（2）
	図43 遺物包含層出土遺物実測図（9）	図61 石器類器種別出土点数
	図44 遺物包含層出土遺物実測図（10）	図62 石器類器石材別出土点数
	図45 遺物包含層出土遺物実測図（11）	図63 暦年較正結果
	図46 S A 2実測図	図64 植物珪酸体分析結果

## 本文写真目次

写真1 調査以前の状況	写真4 桑ノ木津留産黒曜石の小剥片	写真7 植物珪酸体
写真2 西壁北部の地層断面	写真5 炭化材	写真8 花粉・孢子
写真3 打製石器65の出土状況	写真6 種実	

## 表 目 次

表1 旧石器時代石器遺物の属性 および計測値	表6 縄文土器観察表（2）	表13 石器観察表（1）
表2 縄文時代早期石器遺物の属性 および計測値	表7 縄文土器観察表（3）	表14 石器観察表（2）
表3 基本層序	表8 弥生土器観察表（1）	表15 樹種同定結果
表4 土坑計測一覧表	表9 弥生土器観察表（2）	表16 種実同定結果
表5 縄文土器観察表（1）	表10 弥生土器観察表（3）	表17 植物珪酸体分析結果
	表11 弥生土器観察表（4）	表18 花粉分析結果
	表12 土師器観察表	

## 第Ⅰ章 はじめに

### 第1節 発掘調査に至る経緯

農林水産省九州農政局宮崎農業水利事務所尾鈴農業水利事業建設所（現農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所）では、尾鈴地区の農業生産性の向上と農業経営の安定を目的とする台地上の畑地への水源確保のために、既存の青鹿ダムと新設予定の切原ダムの計画的な利用と併せて、県営畑地帯総合整備事業による末端の灌漑施設の整備を行う「国営尾鈴土地改良事業」を1996（平成8）年度から実施している。

県文化課（現文化財課）では、この事業計画を受けて灌漑施設の建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、平成7年度より同事業所と協議を開始し、1999（平成11年）度には尾鈴銀座2号ファームボンド建設工事に伴う藏庄村遺跡、2006（平成18）年度には銀座第1ファームボンド工事に伴う明野遺跡の発掘調査を実施した。

2007（平成19）年度における同事業所の事業として、川南町大字川南字住吉25953-2外の大内ファームボンド、同町大字川南字鰐戸ノ本2984-3の赤石・鰐戸ノ本調整水槽、同町大字川南字丸尾2783-3の大内調圧水槽の3施設についての建設工事計画があがり、同事業所より埋蔵文化財の有無についての照会があった。いずれの建設予定地も周知の埋蔵文化財抱蔵地であったが、県文化財課では確認調査による判断を必要とし、同年8月に同課によって確認調査を実施した。この結果、大内調圧水槽建設予定地（大内遺跡）については、遺構・遺物とともに確認されなかったが、大内ファームボンド建設予定地（住吉B遺跡）で縄文時代早期の遺物包含層などを、赤石・鰐戸ノ本調整水槽建設予定地（赤石遺跡）で縄文時代後晩期及び弥生時代中期の遺構・遺物などを確認した。

遺跡の存在を改めて確認した住吉B遺跡と赤石遺跡の取り扱いについて、両者間で工事計画変更等の埋蔵文化財保護の方法についての協議を行ったが、尾鈴地区における水利事業の遂行上、工事予定地の全区域において現状保存は困難であるという結論に達したため、発掘調査による記録保存の措置をとることになり、同年11月1日付で「埋蔵文化財発掘調査負担契約書」を締結した。

なお、発掘調査の実施については、宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、住吉B遺跡・赤石遺跡ともに同年11月19日に着手した。

参考 尾鈴農業水利事業所 「地域の概要」(<http://www.maff-kyushu-nn.go.jp/new/11/area.htm>) (2008/4/15 アクセス)

## 第2節 整理作業および報告書作成の経過

両遺跡とともに、現地調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センター本館へ持ち帰り、記録物の整理作業と出土品の一部洗浄作業を行った。本格的な整理作業については、住吉B遺跡は分館、赤石遺跡は本館にて2008（平成20）年5月1日より開始し、出土品の洗浄・注記作業が終了した後、実測作業に入った。出土品は、住吉B遺跡で約100点、赤石遺跡で約400点を図化し、写真撮影を行った。加えて、赤石遺跡については、自然科学分析の実施のために、2号竪穴住居の床面付近一部で抽出した埋土のフローテーション作業を行い、炭化物などを選別した。そして、報告書刊行に係る製図及び執筆編集作業のすべてを同年11月までに完了させ、12月から翌年2月にかけて印刷・製本作業を行った。

なお、出土品の一部と成果については、同年8月19日～9月5日の間、宮崎県立図書館特別展示室を会場とした「ミニ巡回展」にて展示を行い、また、同年8月23日には、遺跡発掘速報会「ひむかの歴史2008」において、一般市民向けの成果報告会を行った。

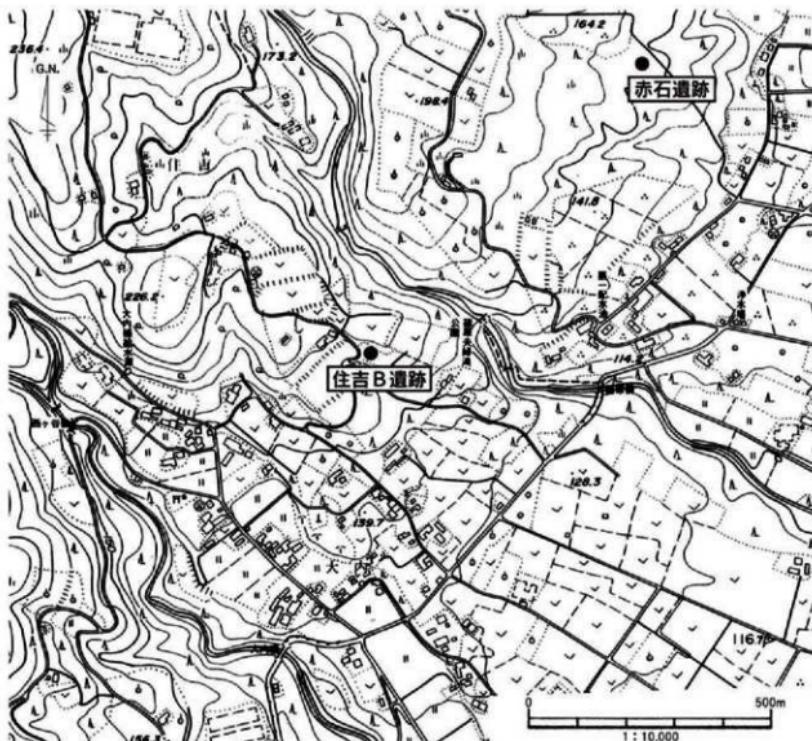


図1 住吉B遺跡・赤石遺跡の調査地位置図

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

住吉B遺跡は、児湯郡川南町大字川南字住吉に、赤石遺跡は、同字端戸ノ本に所在する。2つの遺跡が立地する川南町は、宮崎県の中央部にあり、東に黒瀬が北進する日向灘を望み、尾鈴山（標高1405m）の南東に位置する。西は上面木山（標高1040m）の稜線によって木城町、南は高鍋町、北は名貫川を境に都農町と接している。また、尾鈴山系から東流する名貫川の南岸域にあたることで、「川南」の由来ともなっている。

川南町の大部分は洪積台地であり、上面木山を中心とした尾鈴酸性岩からなる山地が西部に広がり、中央部から東側には緩やかに傾斜する段丘が扇状地帯に展開している。段丘は名貫川や平田川による浸食崖や谷によって14の段丘面に区分される。代表的な段丘面として、町の中央部に川南原、平田川以北の唐瀬原と中須原以南の国光原、その間に位置する野田原などがある。段丘面には、「原」が付される地名が示すように広い平坦面が広がり、古くから人間の生産活動の場となっている。現代では、果樹や茶の栽培、酪農、野菜作りなどの農業が盛んである。

今回報告する2つの遺跡の立地条件は以下のとおりである。

住吉B遺跡は、川南町の西部、上面木山から派生する丘陵の南東斜面に立地し、丘陵の北側には平田川の支流篠原川が、南側には小丸川の支流切原川が東流する。調査対象地の現状は、戦後に丘陵の緩斜面を大きく階段状に切り開いた畑地となっており、現況標高は、178～182mを測る。

赤石遺跡は、上面木山から派生した丘陵の尾根部縁辺にあたり、標高約155mの南東に向けて下る緩斜面に立地している。遺跡の北側には平田川、南側には篠原川が流れている。

住吉B遺跡と赤石遺跡の位置関係については、篠原川が形成した谷地形を挟んで、直線で約0.8kmの距離にある。近接する遺跡には、平田川を挟んで北に市納上第1～5遺跡や藏庄村遺跡、南に虚空蔵免遺跡や赤石・天神木遺跡が位置する。

### 第2節 既往の調査と歴史的環境

近年、川南町では東九州自動車の建設や国営尾鈴農業水利事業などに伴う埋蔵文化財発掘調査によって、調査される遺跡が増えてきている。ここでは、おおまかに、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代に分けて述べていきたい。

旧石器時代は、多くは大野寅男氏の精力的な踏査による部分が大きく、白鷺遺跡〔ナイフ形石器・細石核〕、旭ヶ丘遺跡〔尖頭器〕などが知られている。また、その後には川南町教育委員会によって住吉B遺跡〔細石核〕などが調査されている。そして、後期の遺跡では、後牟田遺跡〔鋸齒様石器・環群〕

が代表例として挙げられるが、発掘調査 자체は少ない。

近年の東九州自動車道関連発掘調査では、始良T n火山灰（A T）下位～上位にわたり多くの成果が出ている。その中には、A T下位で、中ノ迫第1遺跡〔疊群〕、A T上位で、虚空蔵免遺跡〔疊群・ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核等〕、赤石・天神本遺跡〔疊群・ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃等〕などがある。

縄文時代については、草創期から晩期までの良好な遺跡は確認されていなかったが、近年になって山地及び山麓における発掘調査が増えてきている。具体的には、赤石・天神本遺跡や前ノ田村上第2遺跡〔草創期の隆帯文土器〕、尾花坂上遺跡〔早期の集石造構〕、中ノ迫第3遺跡〔早期前半の集石造構・炉穴・局部磨製石斧〕、霧島遺跡・藏庄村遺跡〔早期の集石造構・貝殻文・円筒形貝殻条痕文・押型文・条痕文等の土器〕、上ノ原遺跡〔集石造構・早期の押型文土器・貝殻条痕文土器〕、虚空蔵免遺跡〔集石造構・炉穴・隆帯文・押型文・貝殻条痕文土器〕などが挙げられる。また、赤石・天神本遺跡では縄文時代後期～晩期の竪穴住居と集石造構が検出されている。

弥生時代の遺跡は、旧石器時代や縄文時代と比べ格段に多く充実した成果をもたらしている。前期の遺跡は確認されていないが、中期・後期から終末期の集落遺跡の調査は多い。中期の遺跡としては、藏庄村遺跡・大内原遺跡・前原B遺跡・湯牟田遺跡が挙げられる。藏庄村遺跡〔「中溝式土器」・竪穴住居〕、大内原遺跡〔「下城式土器」・逆L字口縁の甕口縁部〕などの調査例が示すように、中期の集落は山麓（丘陵地）の縁辺部に立地していたと考えられる。後期になると数多くの遺跡が確認されており、把言田遺跡や中ノ迫A遺跡では竪穴住居が検出されている。円形周溝墓については、県内でも検出例が少なく、しかも低地であったことから、赤坂遺跡において丘陵頂部の平場で造営されていたことは特徴的な立地として特筆される。

古墳時代の遺跡としては、古墳時代前期から後期まで営まれた国指定史跡の川南古墳群が代表される。横穴墓や地下式横穴墓が墓制として採用されていない地域である。

古代においては、下垂門の奈良時代後半の蔵骨器を伴う火葬墓が挙げられる。韓家郷の一部にも比定されており、渡来人との関連が伺える。去飛（都農町）の駅と児湯（木城町高城）の駅を結ぶ古代幹線道路の存在も推測される。

中世においては、1578年の高城・耳川の戦いの大友・島津両軍の戦死者を弔うために島津方の武将山田新助が建立した宗麟原供養塔が著名である。また、東九州自動車道関連発掘調査において銀座第1遺跡や前ノ田村上第1遺跡で中世～近世の居館及び集村が検出されている。大内原遺跡では配石土坑墓1基が検出され、埋土中から墨書き3点と土師器小皿5点が出土している。さらに、市納上第1遺跡から溝状造構1条が検出されている。

近世から現代にかけては大規模な開拓事業が進められた。特に第二次世界大戦前後には、川南町が“川南合衆国”と呼ばれるよう多く入植者が移住を始めた。また、戦争遺跡として陸軍落下傘部隊の給水塔の存在がある。



1 住吉B遺跡	2 赤石遺跡	3 銀座第1遺跡	4 銀座第2遺跡	5 虚空藏免遺跡
6 赤石・天神本遺跡	7 天神本第2遺跡	8 大内原遺跡	9 中ノ追第1遺跡	
10 中ノ追第2遺跡	11 中ノ追第3遺跡	12 前ノ田村上第1遺跡	13 前ノ田村上第2遺跡	
14 赤坂遺跡	15 湯牟田遺跡	16 蔵庄村遺跡	17 後牟田遺跡	18 霧島遺跡
20 旭ヶ丘遺跡	21 番野地C遺跡	22 椿原遺跡	23 大久保遺跡	24 谷ノ口遺跡
25 上ノ原遺跡	26 丸山西原遺跡	27 松ヶ追遺跡	28 東平下遺跡	29 把言田遺跡
30 中ノ追A遺跡	31 野稲尾遺跡	32 市納上遺跡	33 住吉A遺跡	34 大内遺跡
35 白鬚原遺跡	36 萱根遺跡			

図2 周辺の遺跡分布

### 第Ⅲ章 住吉B遺跡の調査結果

#### 第1節 発掘調査の経過

大内ファームボンド建設予定地の現状は、丘陵を大きく改変した階段状の畑地であることから、確認調査では対象地区全域において遺物包含層が確認されることはなかった。そこで、建設予定地における調査対象面積7,490m<sup>2</sup>のうち、確認調査の結果にもとづいて、遺物包含層が顕著に残る階段状の畑地の上位2段分2,250m<sup>2</sup>を発掘調査対象地としたが、安全面を考慮した作業空間を確保するため、周囲に十分な控えを設けたことから、最終的に約1,250m<sup>2</sup>を発掘調査区域とした。

発掘調査は、2007（平成19）年11月19日より開始し、表土の重機掘削から行った。確認調査においてアカホヤ火山灰降下以後の遺構・遺物が確認されなかつたことから、アカホヤ火山灰の二次堆積層を若干残して、上位の造成土やクロボクなど0.2~1.6mを重機によって掘り下げた。以後は、人力によって調査を進め、適宜に図面・写真による記録作業を行い、2008（平成20）年1月9日には、縄文時代早期の遺構・遺物を検出したIV層上面の空中写真撮影を実施した。なお、平面的な発掘調査は、Ⅶ層直上までとし、以下については、地層堆積状況の観察に努め、同年2月15日に現地調査に係るすべての作業を終了した。

また、図面作成や遺物の取上げなどの記録作業に供するため、世界測地系の正方位に準じた10m四方の地区割を、調査区域すべてを包括するように設定した。地区名については、東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付して、図4のように組み合わせて示した。



写真1 調査以前の状況（北から）

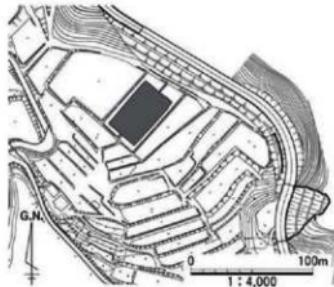


図3 調査地位置図

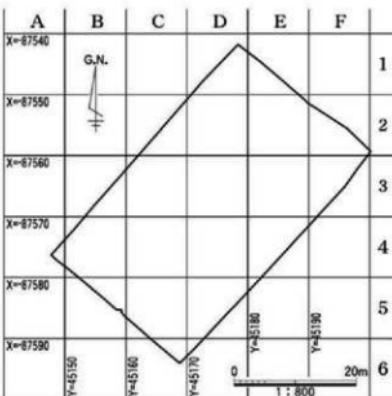


図4 調査地配置図

## 第2節 発掘調査区の層序

調査対象地の現状は、丘陵の緩斜面を階段状に大きく切り開いた畠地で、発掘調査は、比高差が約2mある上下段の畠地2面について行った。現況の標高は、上段が180.3~180.7m、下段が177.8~178.3mを測る。

上下段の調査区において、平坦面造成のために、旧地形上に造成土を厚く盛り上げた箇所（平坦面の階下側1/3~1/2程度）は、クロボク土（I層）以下の地層の堆積を確認できたが、著しく削平された階上側については、地ならしのために薄く盛られた造成土の直下に始良Tn火山灰の風化層あるいはそれ以下の地層が露出する状況で、旧地形が残ることはなかった。

地層堆積状況の観察と記録は、削平が及んでいない調査区の西側壁で行い、Ⅴ層以下については、D5区に存在した確認調査トレチの東側壁で補い、図上で合成した。

現地表下20~90cmは、2回に分けて盛土された近代~現代の造成土（0・0'層）で、以下については、降下火山堆積物由来の土壤と周辺域の基盤層である尾鈴山酸性岩類の風化表層土壤を確認した。

0・0'層は厚さ20~90cmの造成土で、重機による転圧を受けたためか非常に硬くしまる。

I層は厚さ20~45cmのクロボク土である。層相は黒色細粒砂質シルトで、わずかに橙色粒が混入する。II層は黒色細粒砂が混在する明褐色シルト混極細粒砂で、層厚は10~25cmである。土壤化したアカホヤ火山灰の2次堆積層であると考えられる。最下部には橙色粒のみが堆積する所もある。

III層は黒色細粒砂混シルトのローム層で、光沢があり硬くしまる。層厚は10~20cmである。縄文時代早期の遺物を包含しており、MB0に相当する。

IV層は黒褐色シルトで、非常に硬くしまるローム層である。層厚は約15cmで、ML1に相当する。本層上面及び本層内で縄文時代早期の遺構を確認した。

V層は厚さ15~25cmの暗褐色弱粘土質シルトのローム層である。調査区南側では極細粒砂が混入し、色調はさらに暗くなる。

VI層は白色粒を含む黒褐色極細砂質粘土質シルトのローム層で、径2cm以下の褐色粘土質シルトのブロックが混入する。層厚は約25cmである。

なお、地層観察の結果、V・VI層は本来同一層であり、V層は土壤化が進行した状態と考えることができる。微細観察を行ったところ、V層内では石英粒と輝石粒が卓越し、VI層ではわずかに橙色のスコリアが検出できた。このことから、V・VI層はKr-Kb相当層と考えられる。

VII層は始良Tn火山灰の2次堆積層で風化が著しい。粘性的強度で上部と下部に細分した。上部は粘性が強い灰暗褐色シルト~細粒砂で、白色粒の混入が多い。層厚は10~25cmである。



写真2 西壁北部の地層断面

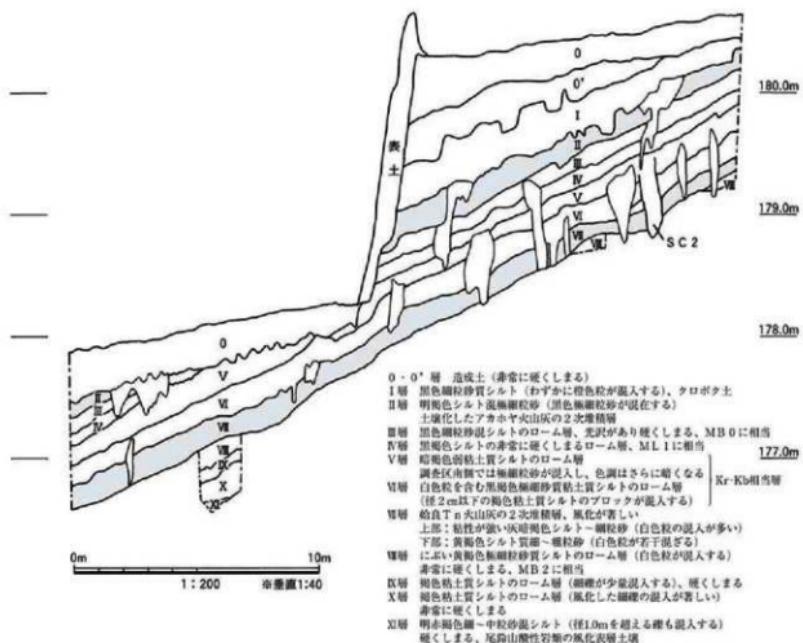


図5 西懸壁断面図

下部は黄褐色シルト質細～粗粒砂で、白色粒は若干混ざる程度であった。

VII層はにじみ黄褐色極細粒砂質シルトで、白色粒が混入する。MB 2 に相当する非常に硬くしまるローム層である。層厚は約20cmである。

VIII層は細粒が少量混入する褐色粘土質シルトのローム層で、硬くしまる。層厚は約15cmである。

X層は風化した細粒の混入が著しい褐色粘土質シルトのローム層で、非常に硬くしまる。層厚は15～25cmである。

XI層は基盤である尾鈴山酸性岩類の風化表層土壌である。径1.0mを超える礫も混入する明赤褐色細～中粒砂混シルトで硬くしまる。層厚は10cm以上である。

※ MB 0・ML 1・MB 2 の表記については、宮崎県埋蔵文化財センター 2003『平成14年度 東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第76集に準じる。

### 第3節 旧石器時代

#### 1 石器遺物の出土状況

旧石器時代の調査は、K r - K b 相当層であるV・VI層において、遺構・遺物の検出を主としたが、残念ながら当該期に属する疊群などの遺構は認められず、かつ、V・VI層中に包含される石器遺物の出土についても顕著ではなかった。しかし、旧石器時代に属する石器遺物は、多くはないが上位層中にも包含されおり、V・VI層中の石器遺物の出土と合わせて考えると、当該地区における旧石器人の活動を想定できたが、当該期の旧地形は最大で約35°に達し、日々の生活には適さないほどの傾斜地であったことから、疊群などの生活痕跡は構築されなかったと思われる。このことから、旧石器人の活動の場は、さらに高位の平場にあったと考えられ、出土の石器遺物も、そこからの混入であったと推察する。以下には、旧石器時代に属すると判断した包含層出土の石器遺物を列举し、観察所見を記載した。なお、出土石器遺物の属性および計測値は表1に掲載する。

#### 2 石器遺物 (図6・7、図版5)

1・2は、ともに縦長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。1は裏面下半部に筋理面を残す小型のナイフ形石器で、表面左側縁に整形剥離を施している。2は表面左側縁に荒い整形剥離を施すが、刃部が整っていないため、未完成の可能性も残る。

3～6は縦長剥片を素材とする削器である。3は表面右側縁と裏面右側縁に微細な剥離を施し刃部とする。4は表面左側縁に連続する細部調整を、裏面右側縁の中央に微細な剥離を施し二側縁に刃部を作る。5は表面右側縁に丁寧な細部調整を施す。6は風化による磨耗が著しいが、表面左側縁に連続する細部調整を確認できる。

7・8は縦長剥片を素材とする細部調整剥片である。7は表裏面末端と裏面左側縁に、8は裏面末端に微細な剥離痕が認められる。

9・10は細石刃である。9は上下端を、10は下端を欠損する。

11は扁平な円錐の一端に刃部を形成する疊器である。左側面側からの打撃によって大きく山なりの形を作った後に、中央の剥離を表面側から行う。しかし、疊全体が受ける磨耗を左右側の剥離面が受けているのに対し、中央の剥離面は比較的新しいことから、刃部形成の再加工が行われたと考える。また、左側面にはわずかながら敲打痕が見られる。

12・13は石核である。12は横長剥片を素材とする。剥片剥離の作業面を表面に設定し、打点を石核周縁に沿って移動させながら剥片剥離を行う。13は主剥離面を厚みのある剥片を素材とし、縦長剥片か石刃の剥離を目的とする。打面を上端に設定し、剥片剥離作業を左側面で行う。左側面と主剥離面以外には、石核整形のための剥離が認められる。

14・15は横長剥片、16～18は縦長剥片である。なお、17は表面末端を打点にして剥片下部が剥ぎ取られている。



図6 各層位出土の旧石器時代石器遺物（1）

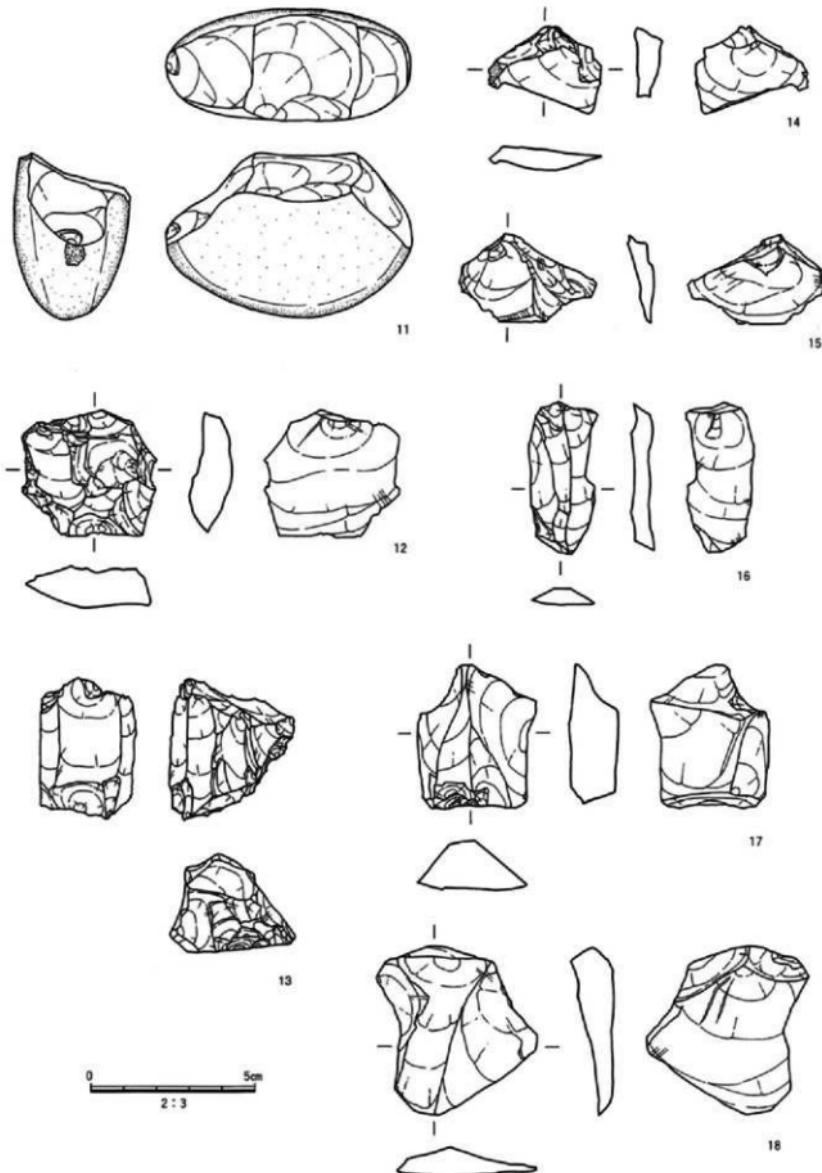


図7 各層位出土の旧石器時代石器遺物（2）

## 第4節 繩文時代早期

### 1 造構の分布と遺物の出土状況

基本層序IV層上面及びIV層内において、縄文時代早期に属する土坑2基と集石造構1基を検出した。調査地区的旧地形は、旧石器時代と同様に東から南東方向へかけて傾斜する地形を追うことができるが、地形の傾斜はかなり軽減されている。造構の構築については、調査区西側と南側において比較的傾斜の緩やかな場所が選定されており、こぶし大ほどの尾鈴山酸性岩類などの角礫が、調査区南半分を中心で散在する状況も見て取れる。遺物については、Ⅲ・Ⅳ層中から縄文土器と石器遺物が出土し、散在する疊と同様に、調査区南半分に集中する傾向がある。土器は破片が目立ち、完形またはそれに近い形に復元できるものはなかった。

### 2 検出遺構と出土遺物

#### i) 土坑

**S C 1** (図8、図版3・6) 調査区西側でやや南よりのC 3区内で検出した不整形な三角形を呈する土坑である。本来は基本層序IV層上面が遺構構築面であったと考えられるが、遺構の上位と東側の一部が樹木根の擾乱を受けていたため、IV層中における検出となった。検出面での規模は、東西幅1.5m、南北

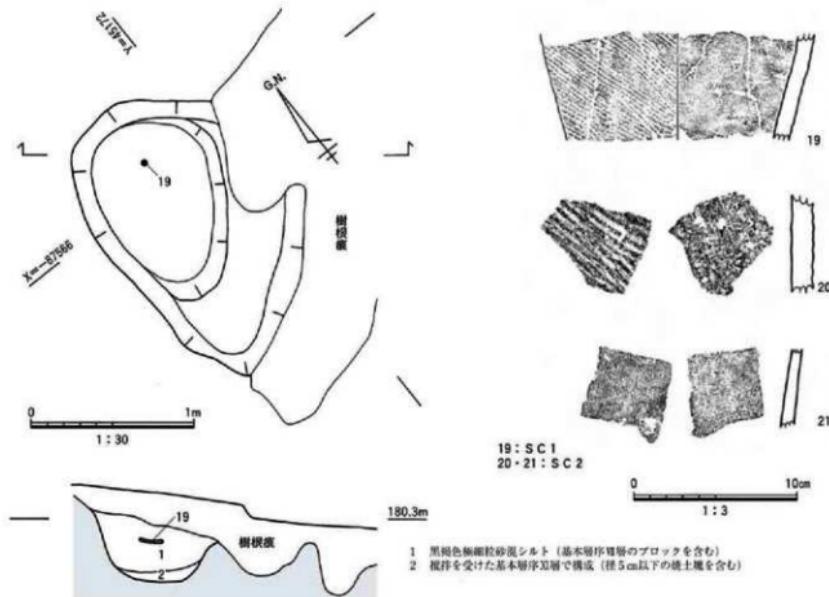


図8 S C 1 平断面図およびS C 1・2 出土縄文土器

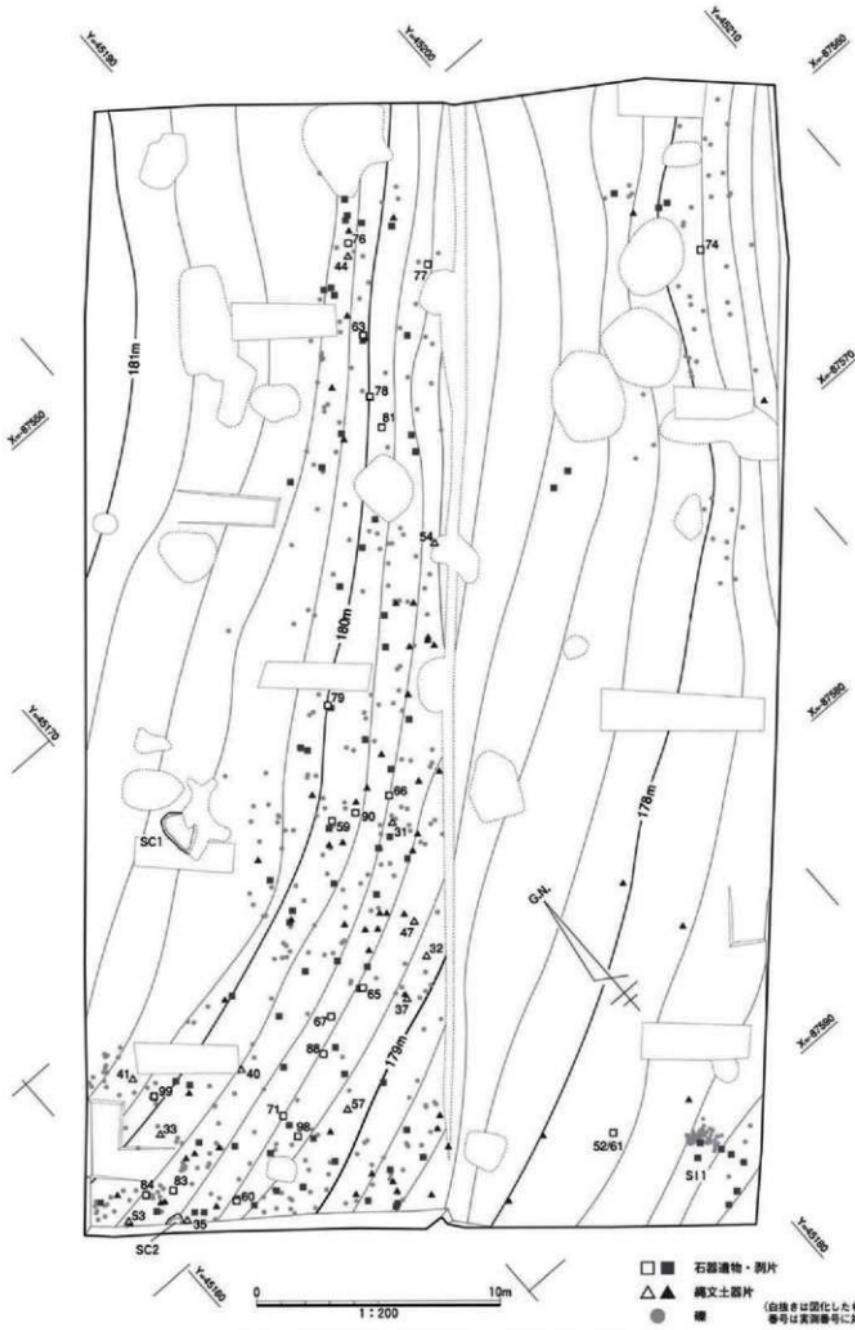


図9 純文時代早期の造構平面図および出土遺物位置図

幅1.75m、深さ0.45mを測る。埋土は上下層に分けられ、上層が基本層序Ⅳ層のブロックが混ざる黒褐色細粒砂混シルトで、下層は攪拌を受けた基本層序XⅠ層に径5cm以下の焼土が混じる。遺物は上層の中位以上から縄文土器19が出土した。

19は前平式土器の胴部で、外面に左上がりの深い条痕文が施されている。

S C 2 (図8) 調査区南西端B4区で検出した不整形な円形を呈する土坑である。南側は調査区外に至る。基本層序Ⅳ層内での検出で、規模は東西幅0.75m、南北幅0.45m以上を測り、深さは0.65mであった。埋土は黒褐色粘土質シルトの單一層で、埋土の下位付近で縄文土器20・21が出土した。

20は前平式土器の胴部で、外面に左上がりの深く幅の広い条痕文を施す。21は無文土器の胴部である。

## ii) 集石遺構

S I 1 (図10・11、図版4・6) 調査区南東端のC5・6、D5・6地区にまたがって検出した集石遺構である。基本層序Ⅲ層内において、東西幅1.5m、南北幅1.1mの楕円形をなす範囲の中で、尾鉸山酸性岩類や砂岩の角礫のまとまりを検出した。縄文土器の細片と打製石斧22・23が出土した。

22は厚みのある砂岩製の礫を素材とする。表面両側縁と裏面左側縁の加工を行い、敲打によって側面を整える。刃部を大きく欠損する。23は扁平な長方形の礫を素材とする。主として一個縁の加工を表裏両面から行い、敲打によって側面を整える。刃部と基部を欠損し、中央部分だけが残る。



図10 S I 1 平断面図

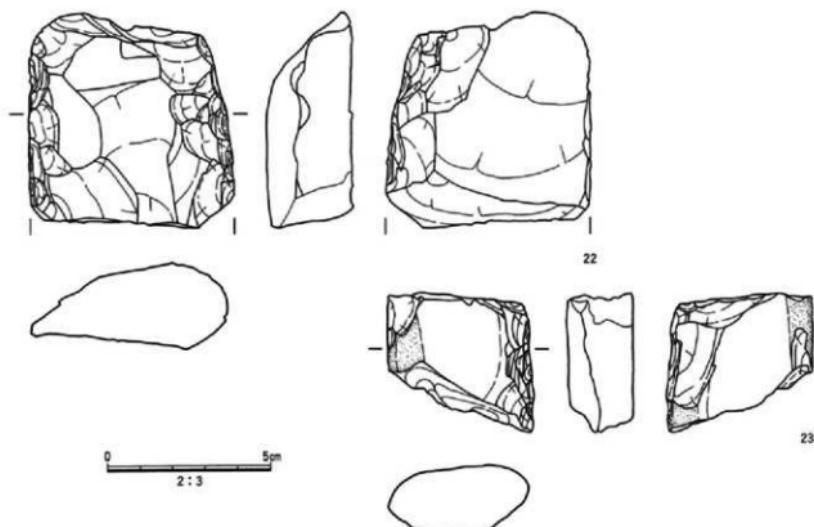


図11 S I 1 出土の打製石斧

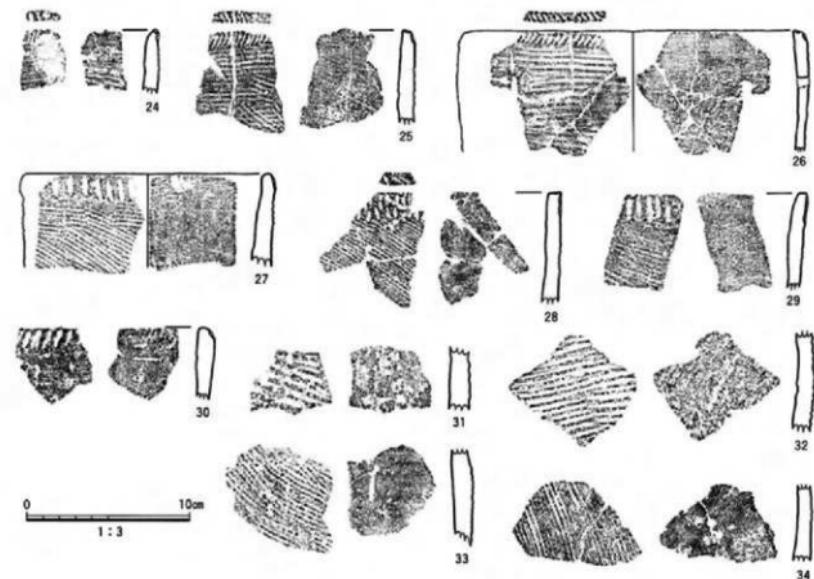


図12 各層位出土の縄文時代早期土器（1）

iii) 造構に伴わない遺物

当該地区は、縄文時代早期以後、近代に畑地として造成が行われるまで人間の手が入ることはなく、森林化していたと考えられる。このため、調査区内には比較的古い樹木根が縱横に認められ、これら樹木根は当該期の遺物を巻き込みながら下位層にまで達するものも多い。これらに関しては、IV層以下を掘削中に包含層出土として取り上げたため、層位的な混乱が生じているが、縄文時代の遺物と判断したものを以下に報告する。

**縄文土器** (図12・13、図版6・7)

24~34は前平式土器に属する。24は口縁端部外面に近接するやや斜位の爪状のキザミが施され、口縁形状は口縁端部上面に施されたキザミにより細かい波状をなす。胴部外面は右上がり、内面は左上がりの貝殻条痕文を施す。25と26の内傾する口縁端部外面には、端部上面から連続した近接する斜位の爪状のキザミが施され、口縁形状は細かい波状をなす。胴部外面はともに横方向の貝殻条痕文であるが、26

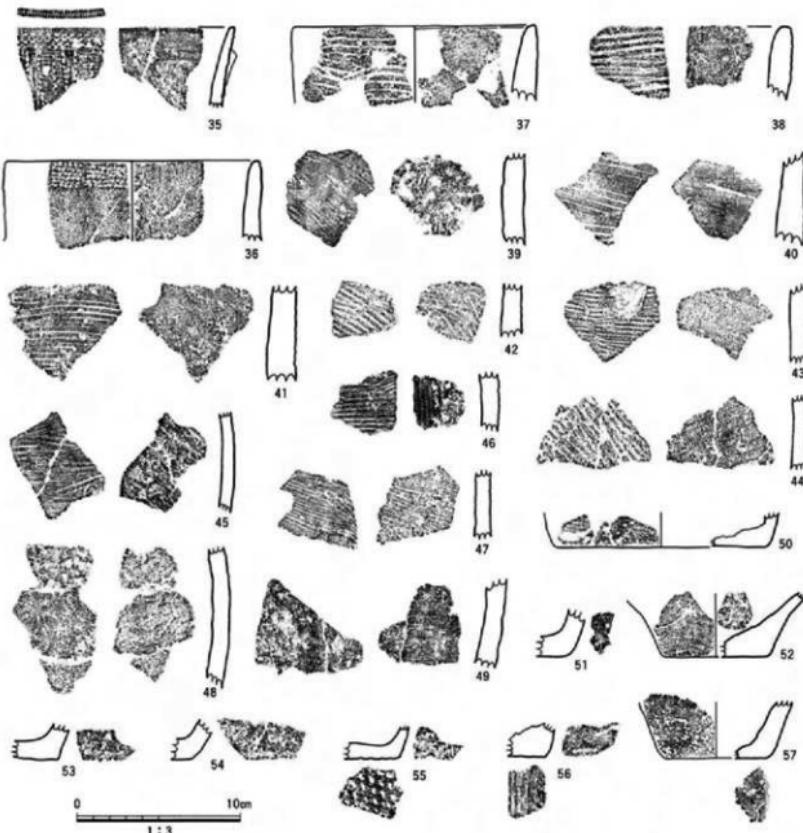


図13 各層位出土の縄文時代早期土器（2）

の条痕文はやや広い。なお、26の口縁部は強い横方向のナデによって尖り気味であり、横ナデの影響で内面にゆるい段が生じており、胴部内面は横方向のケズリで調整され、器壁を薄く仕上げている。また、米粒大ほどの穿孔を焼成前に施している。27は口縁端部外面に深く大きい縱位のキザミを有し、口縁部は外面側に膨らみをもつ。胴部外面には強い貝殻条痕文を、口縁部のキザミ直下は横方向に、それ以下は左上がりに施す。28・29は口縁端部外面に縱位のキザミを重ねるように2段に施す。ともに口縁端部上面は面をなし、28のみキザミを有する。胴部外面の施文は、28は左上がり、29はやや左上がりの貝殻条痕文である。30は口縁端部外面に深いキザミをもつ。31～34は胴部である。31・32には太めの、33・34には細かい貝殻条痕文が施されている。

35は知覧式土器である。面をなす口縁端部上面から外面直下にかけては細かいキザミを有し、口縁部外面には横位の貝殻腹縁刺突文を3条施す。胴部外面は目の細かい貝殻条痕文を横方向に施した後、2～2.5cmの間隔で貝殻腹縁刺突文を縱位に施す。縱位の刺突文の間には、クサビ形の貼付突帯が現状で2段確認できる。

36は中原I式土器に相当する。ほぼ直立する口縁部の外面に、5～6条の貝殻腹縁刺突文を横位に施す。刺突文以下は無文である。

37～47は貝殻条痕文系土器である。37・38は口縁部で、外面の施文は、口縁端部から横方向に浅く幅の広い貝殻条痕文を施す。39～47は胴部である。39～44は厚い器壁の外面に浅く断面が方形となる貝殻条痕文を施すが、39～41は外面の施文後、ナデ消すようにする。また、45～47の外面施文も同様の貝殻条痕文をなすが、施文後に器面を磨いて仕上げる。器壁は薄い。なお、42と49には内面にも条痕文が認められる。

48・49は無文土器である。いずれも内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

50～57は平底になる底部を一括した。なお、55～57の底部には縦物痕が残る。

#### 石器遺物（図14～21、写真3、図版7～10）

58～68は打製石器で、58～60は平基式、61～68は凹基式となる。58は切先部を細かい調整で丁寧に仕上げている。59の平面形はほぼ正三角形状をなすが、基部と比べ切先部をやや鋭く仕上げている。60は両面ともに荒い調整であり、大きな剥離を残すことから、未完成であるとも考えられる。61は基部の抉りは深く、逆刺は先鋒をなす。他の凹基式石器と比べ小振りである。62は基部の抉りは深く、逆刺は先鋒をなす。裏面側に細部調整を施す。63は基部の抉りは深く、逆刺はやや丸い。側縁は直線的で平滑に成形され、切先は非常に鋭く仕上げている。64は細部の調整により、側縁部をやや鋸歯状に仕上げている。65の側縁部は緩やかに内湾し、大きく鋸歯状をなす。

66は帖地型の石器である。側縁部が緩やかに外湾し、木の葉状の平面形をなす。基部の抉りは浅く、逆刺はやや先鋒に仕上げている。67は基部の抉りは浅く、逆刺は先鋒をなす。側縁部を細かい鋸歯状に成形する。68は基部の抉りは深く、大きく丸みのある逆刺を有する。細部の調整によって、切先を鋭く仕上げている。69は打製石器の未完成である。両面の側縁を粗い調整によって、先端部を鋭角に仕上



写真3 打製石器65の出土状況

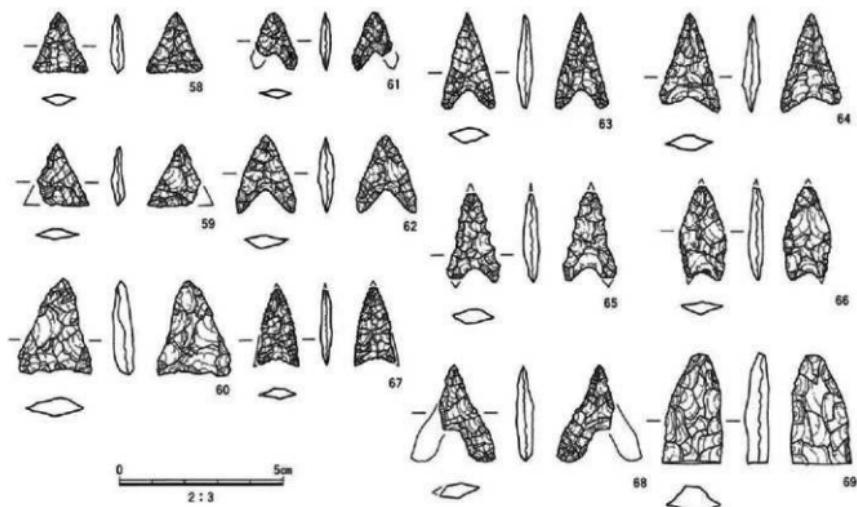


図14 各層位出土の縄文時代早期打製石器

げた素材を、表面側からの作用によって細長い二等辺三角形状の素材を取る。70～75は削器である。70～72は剥片素材の側縁部の薄く鋭角をなす部分を、平面形が三角形または半円形となるように剥離した剥片を利用する。いずれも、表面は疊面を残している。70は表面上部と裏面下部に細部調整を施し、やや鋸歯状の刃部を作るが、71は接合資料98に属する。表面右側縁に刃部形成のための剥離を認めるが、未完成である可能性が高い。72は特に目立った加工が認められなかった。73～75は縱長剥片を素材とする。73は裏面左側縁に連続する剥離が認められる。74は裏面右側縁の中央に微細な剥離を施す。75は表面の左半分に疊面を残し、表面の右側縁を調整して刃部を作るが、上半部のみが鋭角をなす。

76～79は搔器である。76は横長剥片を素材とする。表面両側縁と末端に連続する大きな剥離を施して刃部とする。77～79は縱長剥片を素材とする。77は表面末端の大きな剥離と裏面末端の調整剥離により刃部を作る。78は裏面末端に荒い剥離を施す。また、左側縁は調整により大きく鋸歯状をなす。79は表面に大きく疊面を残し、細かく連続する剥離を裏面末端と両側縁下部に施している。

80～83細部調整剥片である。80～82は縱長剥片を素材とする。80は裏面末端に微細な剥離痕が認められる。81は表面末端に若干の剥離痕が認められる。82は表面左側縁に細部調整を施す。83は横長剥片を素材とする。表面左側縁と裏面左側縁に細部調整が施される。

84～87は敲石で、いずれも扁平な梢円蝶を利用する。84は下端に敲打痕が認められる。また、比熱によるものか一部に赤化が見られ、表面は著しく剥離する。85は上端と右側面に敲打による潰れが見られ、表面中央にわずかな窪みが認められる。86は左側面以外の三側縁面に著しい敲打痕が確認できた。87は下端に敲打痕が認められ、上半部を欠損する。

88・89は磨石である。88は扁平な不整形な梢円蝶を利用する。磨面は表面にのみ認められ、下端には

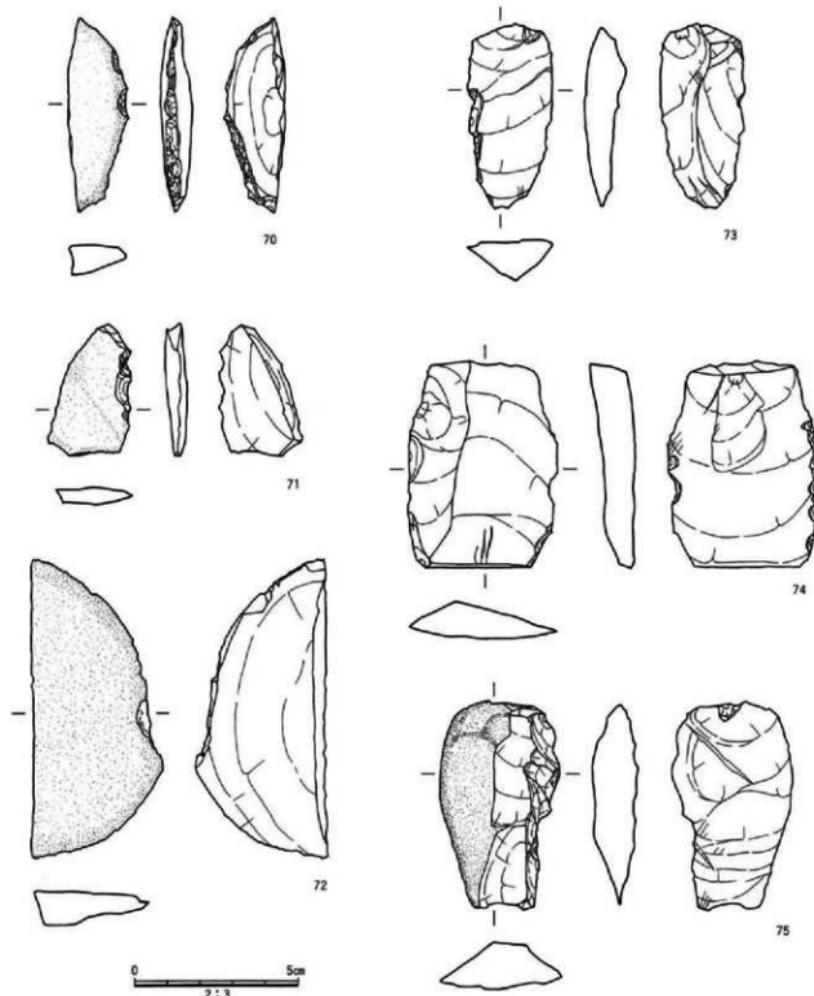


図15 各層位出土の縦文時代早期削器

敲打による潰れが見られる。89は非常に扁平な不整形な円礫を利用する。表裏面に顕著な磨面が認められる。

90~92は砾石である。90は扁平な隅丸長方形の剥片を利用する。礫面である表面側にくぼみを有した底面が認められる。上面と右側面を欠損する。91は扁平でやや厚手に取られた剥片を利用する。表面の礫面を底面とする。四方は欠損する。92は扁平に取った剥片の礫面を利用する。若干のくぼみを有した

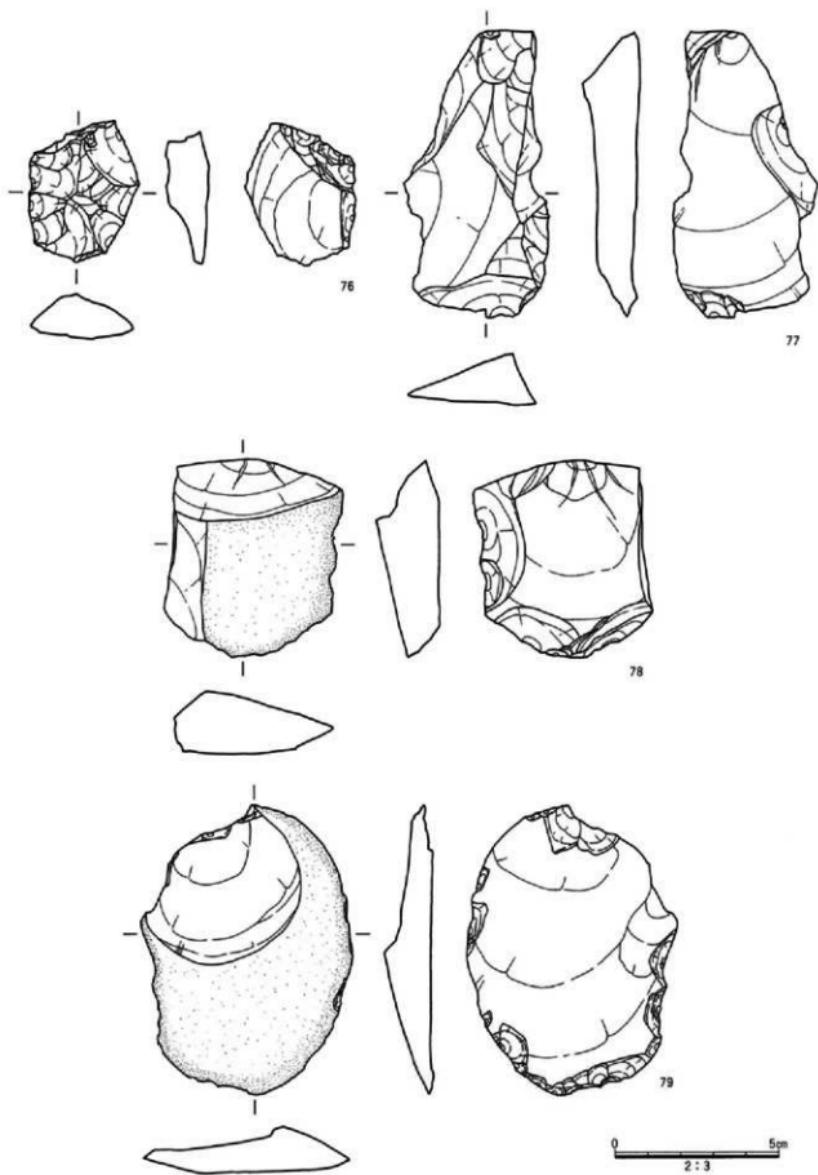


図16 各層位出土の縄文時代早期石器

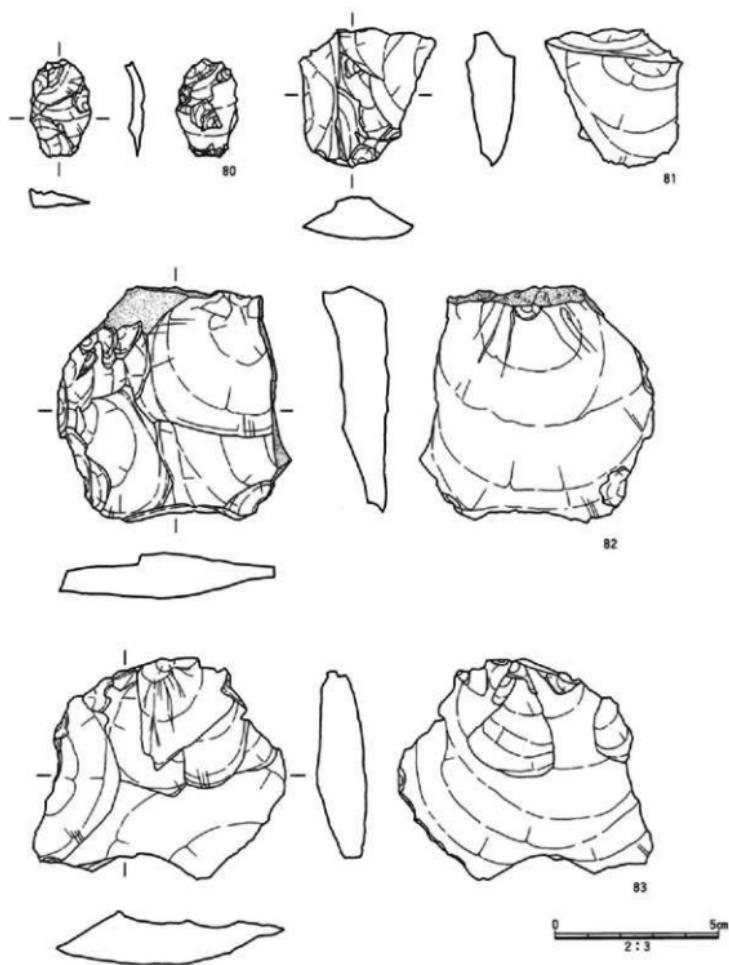
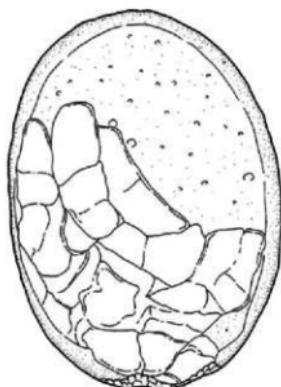


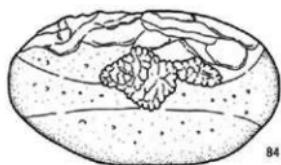
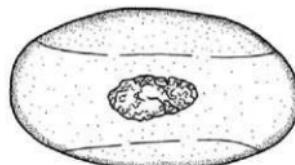
図17 各層位出土の縄文時代早期細部調整剥片

砥面が表面側に認められる。

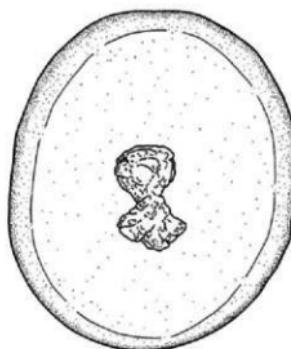
93～95は局部磨製石斧である。93は扁平な長方形の礫を素材とする。使用時によるものか刃部の一部を欠損する。両側縁の加工を丁寧に行い、敲打によって側面を整える。刃部の両面側に研磨を施す。94は扁平な楕円形の礫を素材とする。両側縁の加工を表裏両面から丁寧に行う。刃部の大半と基部は欠損するが、一部に研磨が認められる。95はやや扁平な長方形の礫を素材とする。両側縁の加工を表裏両面から行い、敲打によって側面を整える。刃部の片面側に研磨を施す。全体的に磨耗が著しい。



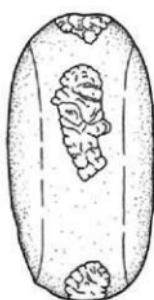
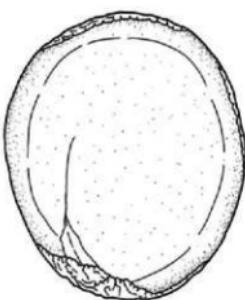
84



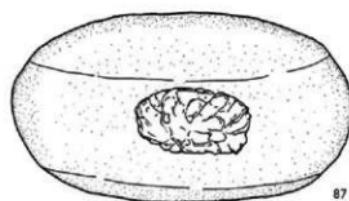
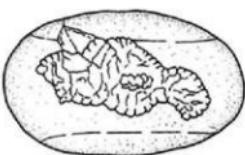
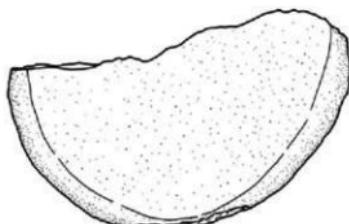
85



85



86



87

0  
2:3  
5cm

図18 各層位出土の縄文時代早期敲石

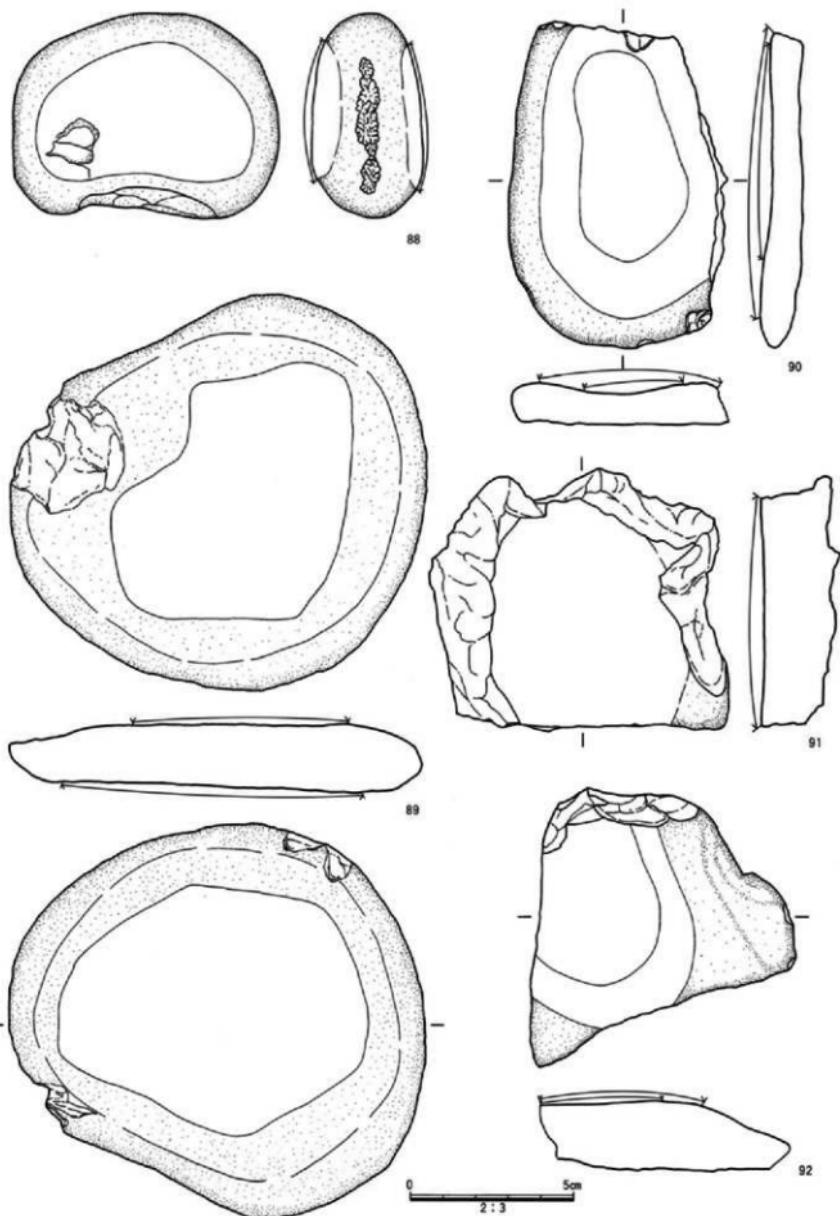


図19 各層位出土の縄文時代早期磨石・砥石

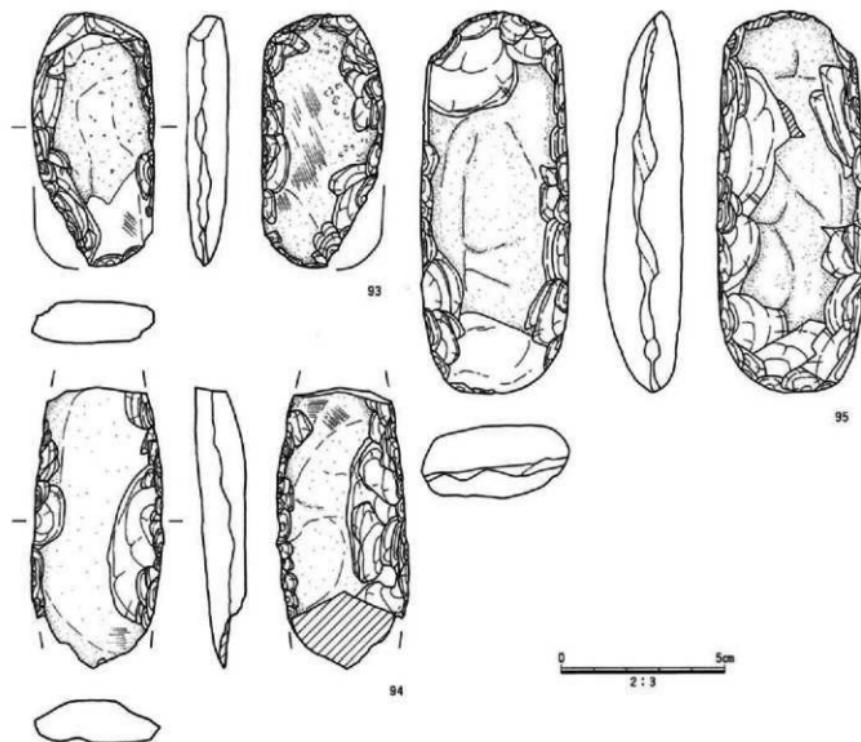


図20 各層位出土の縄文時代早期局部磨製石斧

96・97は打製石斧である。いずれも表面に蝶面を残す厚みのある横長剥片を素材とする。96は表面からみた右側縁側の加工を表裏両面から丁寧に行い、側面を敲打によって整える。使用時のものか、刃部の一部を欠損する。97は主として表面右側縁と裏面右側縁に粗い剥離を施す。

98は接合資料である。表面に蝶面を残した横長剥片と削器71で構成される。削器形成の素材を剥離するために、横長剥片の薄く鋭角をなす側縁部分を利用する。また、横長剥片には、71と同様の削器をあと2箇所剥ぎ取った痕跡が見受けられる。

99は石核で、剥片剥離の作業面を主剥離面に設定し、打点を石核周縁に沿って移動させながら剥片剥離を行う。表面と上面には蝶面が、左側面には剥片剥離とは無縁の古い割れが残る。

その他にI層中からチャート、IV層中から桑ノ木津留産黒曜石の小剥片が、それぞれ1点ずつ出土した。参考資料として、黒曜石製小剥片の写真を掲載した。

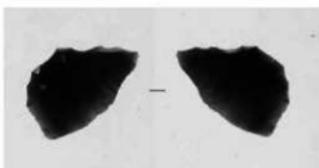


写真4 桑ノ木津留産黒曜石の小剥片

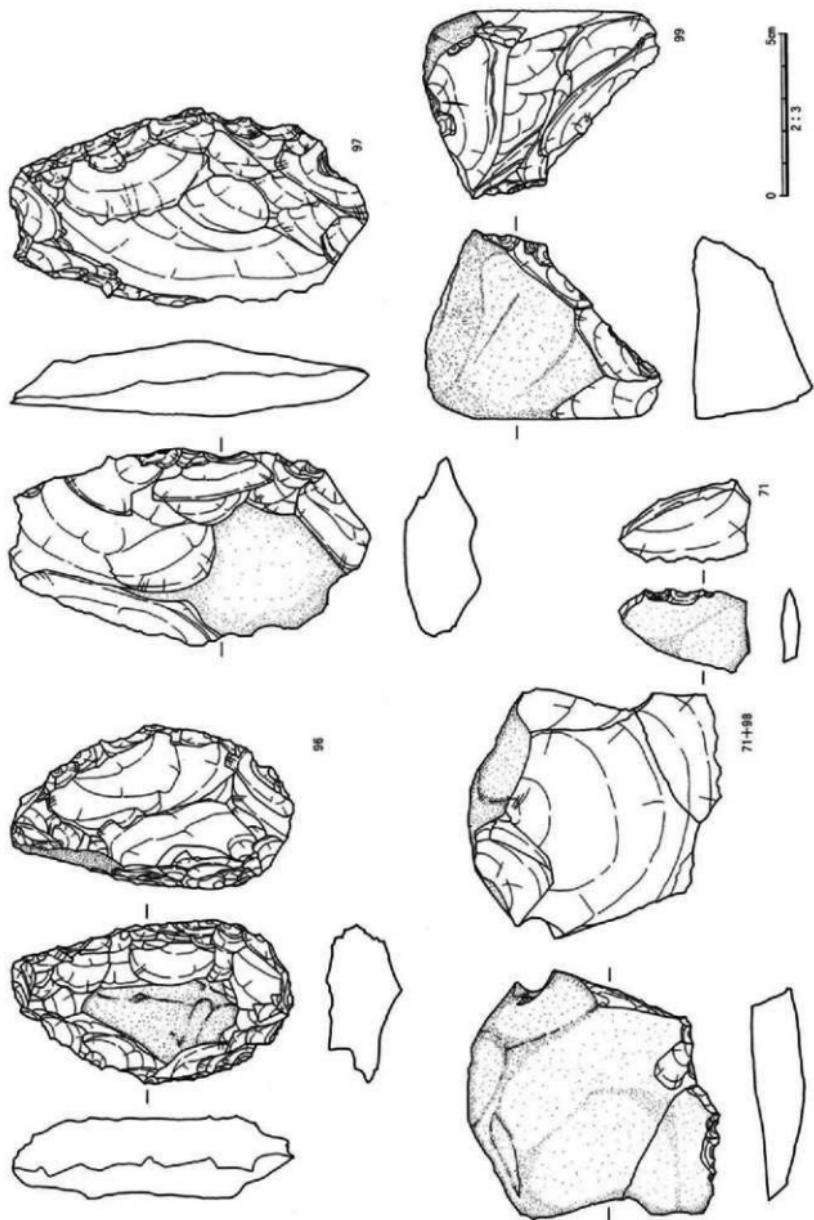


図21 各層位出土の縄文時代早期打製石斧・接合資料・石核

表1 旧石器時代石器遺物の属性および計測値

番号	出土層位	器種	剥片形態	石材			最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
				名稱	色調	特徴						
1	IV層	ナイフ形石器	ホルンフェルス	暗灰	緑あり、ややざらつく	4.15	2.50	1.20	8.2			
2	III層	ナイフ形石器	ホルンフェルス	暗灰	緑あり	8.10	3.70	1.10	36.9			
3	III層	削器	紙長剥片	ガラス質安山岩	オリーブ黒	ざらつく	3.70	3.60	0.90	11.9		
4	IV層	削器	紙長剥片	流紋岩	オリーブ黒	オリーブ黒色の雲状斑	6.55	4.50	1.60	41.5		
5	V層	削器	紙長剥片	珪質頁岩	灰オリーブ	滑らか	4.90	2.30	0.55	6.5		
6	III層	削器	紙長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	緑あり、粉感あり	8.10	4.05	1.65	66.6		
7	0~I層	細部調整剥片	紙長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	やや滑らか	6.05	4.10	1.10	23.9		
8	IV層	細部調整剥片	紙長剥片	チャート	断面オリーブ	滑らか	4.10	1.55	0.45	2.6		
9	V層	細石刃		流紋岩	黄褐	滑らか	1.30	0.50	0.15	0.1		
10	0~I層	細石刃		流紋岩	オリーブ黒	オリーブ黒色の雲状斑	2.35	0.85	0.3	0.6		
11	試験17	螺旋		ホルンフェルス	黄褐	表面風化	5.10	8.50	3.50	157.5		
12	V層	石核		流紋岩	灰黄	ややざらづく、鉗なし	3.80	4.10	1.25	22.5		
13	IV層	石核		流紋岩	黄褐	緑あり、ややざらづく	4.30	3.70	2.90	50.3		
14	III層	剥片	横長剥片	流紋岩	淡黄	黒色の緑あり	2.65	3.45	0.85	5.9		
15	VI層	剥片	紙長剥片	流紋岩	灰黄	鉗なし、ややざらづく	2.70	4.15	0.80	6.1		
16	IV層	剥片	紙長剥片	珪質頁岩	焦	やや滑らか	4.70	2.10	0.5	7.1		
17	VI層	剥片	紙長剥片	ホルンフェルス	浅黄	粉感あり	4.35	3.60	1.50	23.6		
18	擾乱	剥片	紙長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	やや滑らか	5.15	5.05	0.90	25.0		

表2 繩文時代早期石器遺物の属性および計測値

番号	出土層位	器種	剥片形態	石材			最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
				名稱	色調	特徴						
22	S 11	打製石斧	ホルンフェルス	暗灰	黒色紋、ざらつく	(6.60)	6.35	2.60	138.0			
23	S 11	打製石斧	流紋岩	灰オリーブ	緑あり、滑らか	(4.30)	4.45	2.05	49.3			
58	0~I層	打製石鎌	チャート	オリーブ	黒色の緑あり	1.85	1.70	0.40	0.6			
59	III層	打製石鎌	チャート	灰	黒色斑	1.85	(1.65)	0.40	0.7			
60	III層	打製石鎌	流紋岩	オリーブ黒	オリーブ黒色の雲状斑	2.95	2.25	0.60	3.0		未製品?	
61	0~I層	打製石鎌	チャート	黒	やや光沢あり、滑らか	1.75	(1.25)	0.30	0.4			
62	0~I層	打製石鎌	姫島産黒曜石	灰		2.35	1.80	0.50	1.0			
63	III層	打製石鎌	チャート	黒	滑らか	2.90	1.60	0.45	1.2			
64	VI層	打製石鎌	流紋岩	黒		3.05	2.85	0.50	1.5			
65	III層	打製石鎌	姫島産黒曜石	灰		(2.70)	1.65	0.50	1.2			
66	III層	打製石鎌	チャート	オリーブ灰	白色の緑あり	2.85	1.45	0.45	1.6			
67	III層	打製石鎌	チャート	断面オリーブ灰	光沢あり	2.35	(1.25)	0.35	0.7			
68	0~I層	打製石鎌	チャート	断面オリーブ灰	黒色斑、緑あり	2.95	(1.75)	0.50	1.4			
69	0~I層	打製石鎌	ガラス質安山岩	オリーブ黒	ざらつく	3.35	1.80	0.80	4.2		未製品	
70	0~I層	削器	砂岩	灰		5.95	1.90	0.90	10.7			
71	III層	削器	流紋岩	灰オリーブ	緑あり、裏面滑らか	3.90	2.40	0.60	7.1	96と複合		
72	擾乱	削器	砂岩	灰		9.20	3.90	1.00	37.4			
73	擾乱	削器	紙長剥片	ホルンフェルス	暗灰	ざらつく	5.50	2.60	1.20	16.7		
74	III層	削器	紙長剥片	ホルンフェルス	灰	緑あり	6.30	4.50	1.15	42.7		
75	IV層	削器	紙長剥片	ホルンフェルス	灰オリーブ	ざらつく、粉感あり	6.35	3.60	1.40	31.1		
76	III層	孫器	横長剥片	チャート	綠	黒色斑	3.30	4.10	1.30	17.8		
77	III層	孫器	紙長剥片	ホルンフェルス	灰オリーブ	ざらつく、粉感あり	8.95	4.40	1.75	64.2		
78	III層	孫器	紙長剥片	ホルンフェルス	オリーブ	粉感あり	6.05	5.25	1.90	72.7		
79	III層	孫器	紙長剥片	ホルンフェルス	オリーブ	ざらつく、粉感あり	8.85	6.45	1.40	80.8		
80	III層	細部調整剥片	紙長剥片	チャート	暗赤褐色	滑らか	2.90	1.80	0.55	2.9		
81	III層	細部調整剥片	紙長剥片	ホルンフェルス	唐灰	緑あり、ややざらづく	4.10	3.80	1.30	20.7		
82	IV層	細部調整剥片	紙長剥片	ホルンフェルス	黄褐	オリーブ黒色の雲状斑	7.20	6.60	1.70	87.6		
83	III層	細部調整剥片	横長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	ざらつく、粉感あり	6.80	7.10	1.50	71.0		
84	III層	敲石		尾鈴山酸性岩類	にぶい黄		11.50	8.30	4.70	647.8		
85	0~I層	敲石		尾鈴山酸性岩類	浅黄		10.40	8.70	4.90	670.0		
86	IV層	敲石		砂岩	にぶい黄		8.80	7.40	4.45	398.6		
87	擾乱	敲石		尾鈴山酸性岩類	灰白		5.90	10.30	5.80	429.1		
88	III層	磨石		尾鈴山酸性岩類	にぶい黄		8.20	6.30	3.40	242.5		
89	III層	磨石		砂岩	黄褐		12.70	12.20	2.10	405.8		
90	III層	砥石		砂岩	黄褐		(10.0)	(6.70)	1.30	119.9		
91	III層	砥石		砂岩	にぶい黄		(8.05)	9.20	2.45	237.6		
92	III層	砥石		流紋岩	灰	白色の緑あり	(7.60)	(7.15)	2.15	167.8		
93	III層	局部削製斧		緑色珪質(砾岩)	断面オリーブ灰	白色斑	7.80	3.70	1.30	53.0		
94	0~I層	局部削製斧		流紋岩	灰オリーブ	黒い筋	(8.60)	4.00	1.50	66.5		
95	0~I層	局部削製斧		ホルンフェルス	オリーブ	ざらつく	11.70	4.55	2.40	193.9	青面青灰色	
96	IV層	打製石斧	紙長剥片	流紋岩	暗灰	緑あり	8.40	4.80	2.20	117.1		
97	IV層	打製石斧	横長剥片	砂岩	灰		11.05	6.10	2.30	155.9		
98	III層	石核	紙長剥片	流紋岩	灰オリーブ	緑あり、裏面滑らか	7.10	7.60	2.60	134.7	71と複合	
99	III層	石核	ホルンフェルス	灰	ややざらつく		7.20	5.80	3.60	145.3		

## 第5節　まとめ

今回の調査では、旧石器時代に属する遺物および縄文時代早期前半期に属する遺構・遺物を検出したことで、当該地域の歴史を構築するための重要な手がかりを得ることができた。また、上記の時代以外の遺物がほとんど出土しなかったことから、縄文時代早期以後、近代から現代に畠地として造成されるまで、人間の手が入ることがなかった場所であったことも判明した。以下では、周辺域の調査成果を踏まえつつ、住吉B遺跡と当該地域の歴史的様相を概観しまとめとする。

当遺跡の旧石器時代の様相としては、始良Tn火山灰降下以後の状況を確認することができた。しかし、遺物包含層から出土したナイフ形石器や細石刃などの石器遺物については、数量的に極僅かで、なおかつ、周辺域で顕著に見られるような接合資料も見出すことはできなかった。さらに、礫群などの生活痕跡についても皆無であった。このことは、当該期の旧地形が日々の生活に適さないほど傾斜地であったことに起因すると思われ、出土の石器遺物については、さらに高位にあった活動の場からの流れ込みであったと考える。

周辺域での旧石器時代については、本調査地からも眺望ができ、当遺跡が立地する丘陵から延びる舌状台地上に展開する中ノ迫第1～3遺跡において大きな成果が得られている。中ノ迫遺跡では、始良Tn火山灰降下以前の様相も判明しており、舌状台地の中程に位置する第1遺跡（2次）において8基の礫群が検出されている。降下以後については、台地の中程から山麓にかけてが活動の中心地であったようで、第1遺跡の1・2次調査併せて36基もの礫群が検出されている。また、2次調査地の南東側に位置する第2遺跡では、礫群の他に石器ブロックも検出されている。ただし、第1遺跡と第2遺跡では石器組成に違いが見られ、前者はナイフ形石器、後者は角錐状石器および細石刃を中心に出土しており、第2遺跡の報告で報告者が指摘するように、時期差を示すものであろう。

以上をみると、旧石器時代の当該地においては、中ノ迫第1・2遺跡が立地する舌状台地の中程から山麓付近が中心的な活動の場であったことがわかる。そこから円弧を描くように活動範囲が広がっていたと考えられ、本調査地では生活痕跡こそ検出されなかつたが、約1km圏内にある当遺跡の位置する丘陵地も眼下の台地上に住む旧石器時代人の活動範囲内にあったと考えておきたい。

続く縄文時代の生活痕跡として、早期に属する土坑と集石遺構を検出したが、調査面積に対する遺構の密度は低い。遺物については、貝殻文系と無文の縄文土器および石器遺物の出土をみた。石器遺物については、周辺遺跡で見られる組成と大差ないが、縄文土器のうち貝殻文系に関しては、前平式を筆頭に知覧式・中原I式と、現在のところ周辺遺跡で出土しない土器形式が見つかっており注目される。

周辺地域において、当遺跡に並行する時期の遺跡ではなく、近い時期のものとして、篠原川を挟んだ東1kmほどに立地する草創期に属する隆帶文土器が出土した赤石・天神本遺跡、早期半ばを中心に後半までの遺構・遺物を検出した中ノ迫第2・3遺跡がある。当遺跡の成果は、当該地における縄文時代草創期から早期にかけての時間的空白を埋めるものとして評価できる一方で、当遺跡に集落としての成熟さがないことから、中心となる活動の場は、さらに高位の平場にあったと考えておきたい。そして、これら遺跡の状況が示すとおり、当該地域の縄文時代草創期から早期における縄文時代人は、そう広くはない空間の中で、生活圏の中心を変えながら活動を継続させていたのであろう。

## 第Ⅳ章 赤石遺跡の調査結果

### 第1節 発掘調査の経過

調査対象区の調査前の状況は雑木林であり、表層には腐植土が堆積し、狹小の調査区内には大きく成長した後に伐採された樹根が十数本残っており、至るところで深い土層の攪乱が見られた。また、調査区の北西部の一部には、高位置でのミカン畑や茶畠等の造成に伴う盛り土が堆積していた。

発掘調査は、2007（平成19）年11月19日に開始した。まず、表土を重機によって除去した。表土の掘削後には、遺物包含層となる黒褐色土層（II層）、暗褐色土層（III層）が順に現れ、遺物の取り上げを行なうながら人力による掘削作業を進めた。主に出土した遺物は、縄文時代中期～後晩期及び弥生時代中期土器片、石器などであった。ほとんどの土器片は一個体としてまとまって出土する状況でなかったが、摩耗をあまり受けていない状態で散在していた。また、旧石器時代の剥片や古墳時代の土師器・須恵器片もわずかに出土した。遺物包含層の掘削段階で、遺構プランは確認できなかった。次段階では、調査区のほぼ中央を縦走するよう土層観察ベルトを設定した上で、さらに遺物包含層の掘削作業を進めた。そのうちに、遺物包含層の下に褐色土層（IV層）が現れ、その段階で“にじみ”状の遺構プランと遺物が局所的に集中する範囲を把握することができた。恐らく、遺物包含層（II・III層）中のレベルから各遺構は掘り込まれていたものと考えられるが、調査区北西部（グリッドB1・C1・B2の一部）に広がる盛り土層や土壤の進行などによって、褐色土層（IV層）より上位層中での遺構検出は困難であった。そのため、最終的には褐色土層（IV層）上面を遺構検出面として遺構プランの確定を行った。

本調査区内において、最終的に検出できた遺構は、縄文時代後期の竪穴住居1軒、土坑11基（うち4基は自然凹みの可能性もあり得る）、弥生時代中期の竪穴住居1軒及び不明遺構1基であった。検出された各遺構では土層観察ベルトを設定して精査を進め、遺構実測図は1/20を基本として記録した。各遺構埋土中の遺物は床面付近等のものを遺構実測図中に図化した。その他の埋土中の遺物は点上げ及び一括上げをし、写真記録を適宜行った。2008（平成20）年1月10日に遺構を検出したIV層上面の空中撮影を業務委託で実施し、同年1月17日までに掘り下げ（一部）・遺物取り上げ・遺構実測等のすべての現地における発掘作業を終え、同年1月21日に調査区の埋め戻し及び整地を終了した。

なお、図面作成や遺物の取り上げなどの記録作業に供するために、国土座標に基づき5m四方で調査区すべてを包括するように地区割してグリッド設置を行った。各グリッド名は西よりA～D区、北より1～5区として、その組み合わせで図22のように表記するようにした。

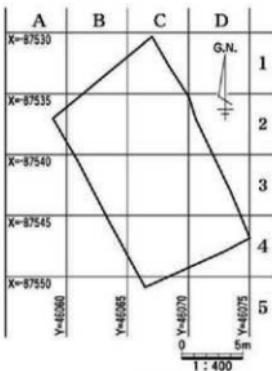


図22 調査地配置図

## 第2節 発掘調査区の層序

本調査対象地の標高は153.7~155.0mを測る。現状は比高差が約1.3mであり、概ね南東側に下る丘陵の緩斜面にある雑木林であった。調査区内には大きく成長した後に伐採された十数本の樹根（直径50~80cm）が残っていたので、その除去作業を可能な限り人力で行いながら発掘調査作業を進めた。土層確認ベルトや調査区壁によって調査区内での土層の広がりが確認できた。

本調査区における基本的な層序は、以下に述べるI~VI層（表3）のとおりである。

表土層直下のII~III層が遺物包含層で、IV層上面を構造検出面とした。IV層以下は、トレントを拡張して掘削をしたが遺物は認められなかった。また、調査区の北西部（グリッドB1・C1・B2の一部）でのみ盛り土層の堆積が表土層（I層）直下で確認できた。その盛り土層については、調査区より高位置における人为的な造成の際に生じたものであると考えた。VI層（明褐色土の疊層）以下の掘削は行わなかった。なお、本調査区内では緩傾斜地という立地条件のためか、アカホヤ火山灰層（K-Ah）や始良Tn火山灰（AT）層は確認されなかった。また、場所によっては樹根の影響（攪乱）がIII層の深さあたりまで及んでいるところがあり、構造や遺物の検出に影響を及ぼしていた。調査区内地層堆積状況の観察及び記録は、各トレント・調査区の壁及び調査区中央にほぼ北西から南東に設定した土層観察ベルトを行った。

表3 基本層序

I 層	表土層で、厚さ15~20cmである。腐葉土を多量に含み、樹根の影響を多く受ける。
II 層	黒褐色土（Hue10YR2/3）厚さ10~15cmである。粘性もしまりもややある。遺物包含層（主に縄文時代中期～後期及び弥生時代中期）である。その一部は樹根の影響を受ける。
III 層	暗褐色土（Hue10YR3/4）厚さ10~20cmである。粘性・しまりもややある。遺物包含層（主に縄文時代中期～後期及び弥生時代中期）である。その一部は樹根の影響を受ける。
IV 層	褐色土（Hue7.5R4/6）厚さ15~20cmである。粘性があり、しまりもややある。直径1mm程の白色粒（ATのブロック）をわずかに含む。構造検出層である。
V 層	黒褐色土（10YR3/1）厚さ10~15cmである。粘性・しまりある。調査区内の全域での広がりは確認できなかった。この層以下は無遺物層である。
VI 層	明褐色土（Hue7.5R5/8）基盤層となる尾鈴山酸性岩類の風化表層土壤を含む疊層と考えられる。粘性があり、直径0.2~1.0mを超える礫も混入して硬くしまっている。

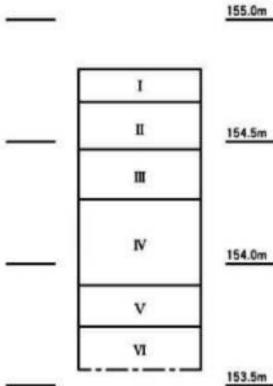


図23 地層断面模式図 (1:20)

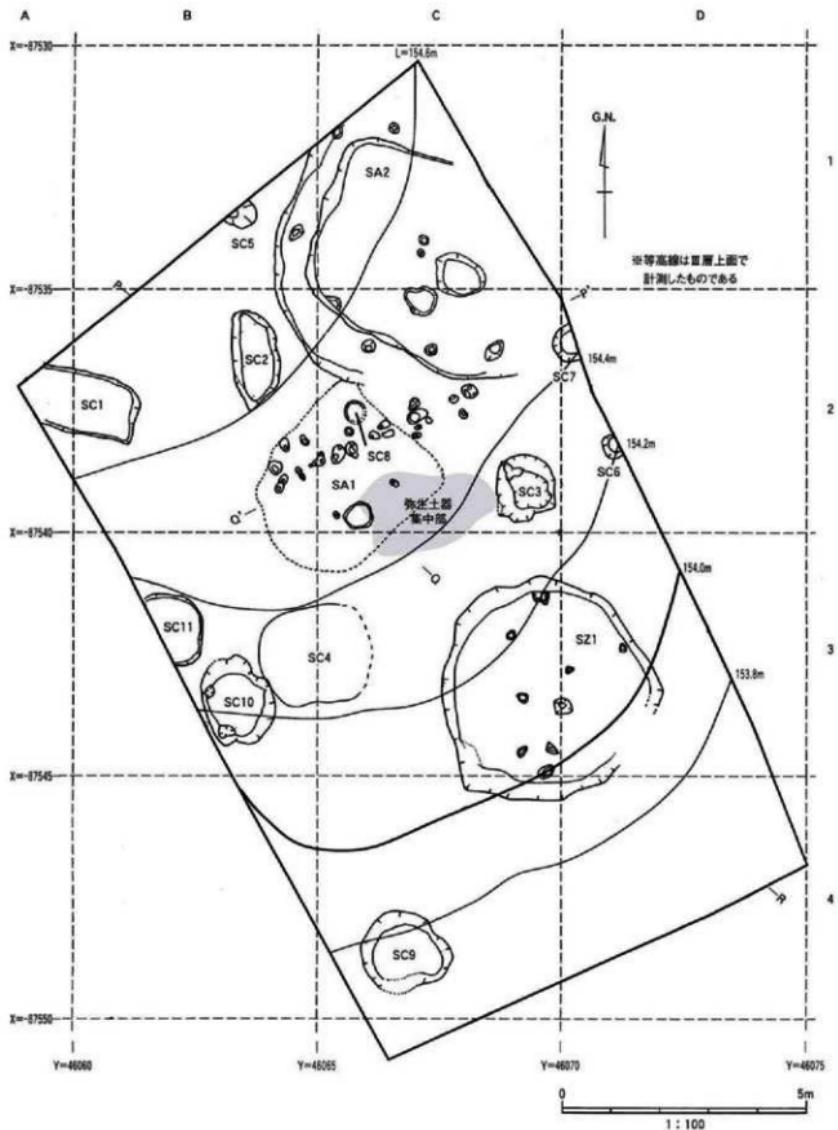


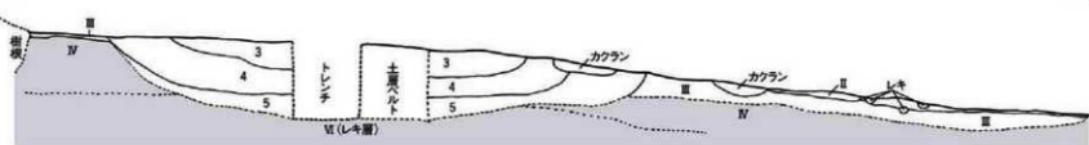
図24 造構分布図

p154.8m



154.8m Q

Q154.0m



154.0m R

#### 土層観察ベルト 土層注記

- 1 暗褐色 (Hue10YR3/3) 土…しまりあり。極小の褐色 (Hue10YR4/4) 土粒をわずかに含む。SA1 の埋土である。
- 2 黒褐色 (Hue10YR2/3) 土…ややしまりあり。炭化物 ( $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ ) や 布褐色 (Hue2.5YR4/6) の細粒をわずかに 含む。「発生土器集中部」の埋土である。
- 3 黒褐色 (Hue10YR2/3) 土…ややしまりあり。やや粘性あり。
- 4 暗褐色 (Hue10YR3/4) 土…ややしまりあり。やや粘性あり。
- 5 黑褐色 (Hue10YR2/3) 土…ややしまりあり。あまり粘性なし。 炭化物や多量の白色・黄褐色のバミス ( $\phi 5\sim 30\text{ mm}$ ) を含む。

II 黒褐色土 (Hue10YR2/3)…粘性もしまりもややあり。  
遺物包含層である。

III 暗褐色土 (Hue10YR3/4)…粘性・しまりもややあり。  
遺物包含層である。

IV 褐色土 (Hue7.5R4/6)…粘性があり、しまりもややある。  
遺物包含層である。

0  
2m  
1:40

p154.7m



154.7m Q

#### SA1 土層注記

- 1 暗褐色 (Hue10YR3/3) 土…しまりあり。古留由来と褐色の微小粒をわずかに含む。
- 2 褐色 (Hue7.5YR4/4) 土…ややしまりあり。褐色 (Hue7.5R4/4) 土をブロック状に含む。

II～IVは上注記と同じ

0  
2m  
1:40

図25 土層観察ベルト断面図

### 第3節 繩文時代中期～後期

本調査区では、縄文時代後期の竪穴住居1基、土坑11基（うち4基は自然凹みの可能性もあり得る）を検出した。縄文土器については、主に中期から後期にかけての土器片を多く出土した。遺構埋土から出土した土器を概観すると、竪穴住居では縄文時代後期に帰属するもの、土坑では縄文時代中期から後期に帰属するもの多かった。ただし、土器は小片であるものがほとんどで、完形近くまで復元できるまでに至るもののはほとんどなかった。また、石器については、石斧・石錐・磨石・敲石・台石・砥石など当時の生活の様相を推測させるものが数多く出土した。ただし、各遺構埋土及び遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）から出土した遺物については、本調査区が緩斜面であるという立地条件と出土状況から調査区より高位置からの流れ込み等で原位置からの出土ではない可能性が高いと考える。ここでは、縄文時代の遺構と遺物について説明を行う。なお、土坑については、いずれもその用途については不明である。以下では、ある程度の規模があり、当該時期の遺物を多く出土した自然凹みの可能性が低い土坑についてのみを説明することにする。すべての遺構位置については、遺構分布図（図24）を参照してもらいたい。

#### 1 検出遺構と出土遺物

##### i) 竪穴住居

**S A 1**（図27、図版10）グリッドC 3杭付近に位置する遺構である。遺構検出は暗褐色土層（Ⅲ層）中で精査しながら行ったが、遺構埋土が同系色であったために、いわゆる“にじみ状”でしか平面プランを捉えられずに明確な遺構プランを確定できなかった。しかし、遺物包含層中とはその出土状況が異なり、ある程度土器がまとまって出土したことと北東隅で後述する弥生時代中期の竪穴住居S A 2に切られた遺構としての壁の立ち上がりが確認できたことにより、「竪穴住居」と積極的に判断した。ただし、精査を行ったが、主柱穴等を確認することはできなかった。推定される遺構の規模は、長軸約3.5m、短軸約3.0m、検出面からの深さは約0.25mで、ほぼ円形を呈すると考える。遺構内の遺物の取り上げについては、四分法に基づきほぼ北西部から時計回りにS A 1a→S A 1b→S A 1c→S A 1dとセクション設定をして行った。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、縄文土器10点、石器4点を図化した。

100～105は深鉢の口縁部である。100・101はキャリバー状口縁で、100の内面には斜・横位のナデ、外面上には撚糸文の上に凹線による短直線文や沈線文が施されている。また、口唇部には押圧文も施されている。101の外面にはU字状の沈線文が施されている。内面の調整としてはナデが認められる。どちらとも胎土中に2mm程の灰白色粒を含んでいることが特徴的である。103～105の口縁部は外傾しており、105の口縁部内面には横位の沈線文が施されている。106は膨らんだ胴部をもち、頭部がややくびれており、さらに外反する波状口縁をもつ深鉢である。口縁部内面に1条の横位沈線文が施されている。107・108は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する平口口縁をもつ深鉢である。どちらも内面はナデ、外面上には斜・横位のナデ調整が認められる。107の胴部はやや膨らんでおり、外面には煤が付着し黒色に変化している。

109は浅鉢の口縁部である。内・外面上ともに横位のミガキ調整が認められ、さらに外面にはその上に平行する3条の沈線が施されている。

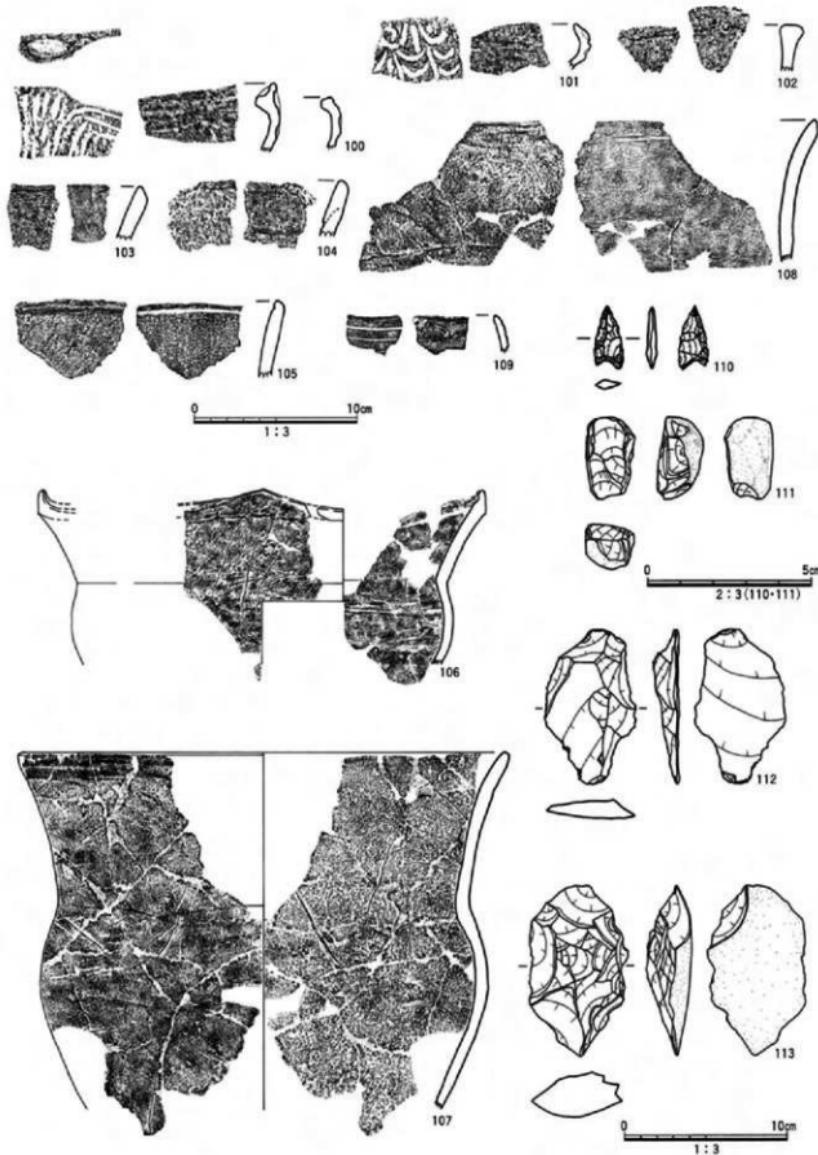


图26 SA 1 出土遗物实测图

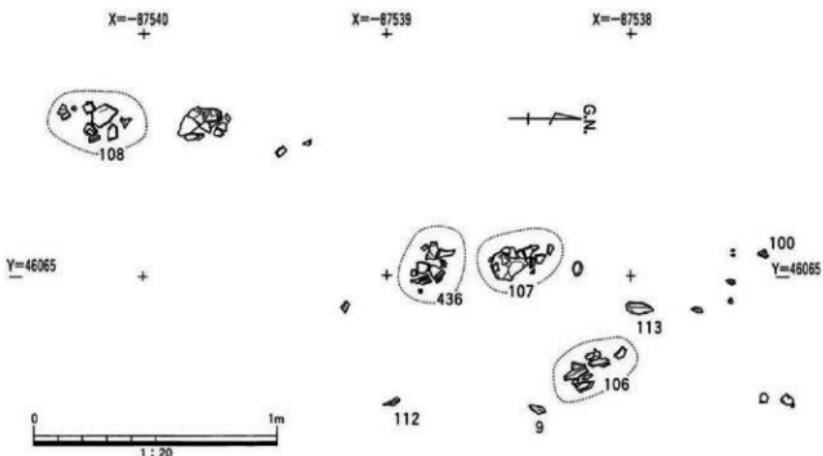


図27 S A 1 出土状況図

110~113は造構埋土から出土した石器である。

110は姫島産の黒曜石製で、全体の形状が二等辯三角形を呈する凹基式の石錐である。凹基の抉りはアーチ状で、抉り自体はあまり深くない。両側辯はやや外湾し、脚部はやや内側に向かっている。

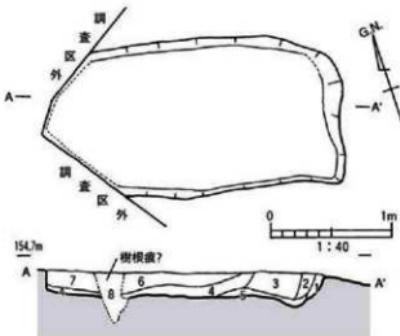
111は針尾産と考える黒曜石の小型石核である。自然面を残し剥離作業が行われているようである。

112・113はホルンフェル製の縦長洞片である。側辯部に細かな剝離痕は認められない。

## ii) 土坑

**S C 1** (図28、図版11) グリッドA 2とB 2との境界線付近で検出した造構である。造構の一部が調査区外まで広がっていたためにすべてを検出できなかった。平面プランは長軸約2.70m、短軸約1.24mの隅丸長方形と推定される。形状比(長軸/短軸)は2.18である。検出面からの深さは約1.90mで底面はほぼ平坦であり、断面形は長方形を呈する。埋土は褐色・黒褐色・黄褐色土などで、埋土中には炭化材を多く含み、黒いシミが広がる部分も認められる。造構から出土した遺物はほとんどなかった。ここでは土器1点を図化した。

114の内面には斜・横位、外面には横位の丁寧なナデ調整が認められ、ほぼ直立する深鉢の口縁部である。口縁部内面には1条の沈線文が施されている。



## SC 1 土層注記

- 1 褐色 (Hue10YR5/6) 土……………黄褐色 (Hue10YR5/6) のブロック状の粒を含む。黒いシミあり。
- 2 黑褐色 (Hue10YR3/1) 土……………微小の褐色 (Hue10YR4/4) 土粒を10%程度含む。ややしまりあり、やや粘性あり。
- 3 黒色 (Hue2.5Y2/1) 土……………微小の褐色 (Hue10YR4/4) 土粒を50%程度含む。しまりなし。炭化材を多量に含む。
- 4 喀褐色 (Hue10YR3/3) 土……………黒いシミが全体的に広がる。ややしまりあり。
- 5 黑褐色 (Hue10YR5/6) 土……………黒いシミが部分的に広がる。
- 6 にぶい 黄褐色 (Hue10YR4/3) 土……………黒いシミがところどころにある。
- 7 黄褐色 (Hue10YR5/6) 土……………ややしまりあり。
- 8 にぶい 黄褐色 (Hue10YR4/3) 土……………ほとんどしまりなし。

図28 S C 1 平断面図

**S C 2** (図29、図版11) グリッドB 2の北西角付近に位置する遺構である。平面プランは長楕円形で、長軸約2.10m、短軸約0.96mである。

(形状比=2.19) 検出面からの深さは約0.54mで、埋土中にわずかに炭化物を含む。遺構埋土からの出土した土器は少なく、剥片などが比較的多かった。ここでは、そのうちから土器1点、石器1点を図化した。

115は深鉢の頸部と考える。内面に1条の刻目貼付突帯とその直下に工具による沈線文らしき文様が認められる。外面に縄文による施文が施されている。116は砂岩製の平砥石であると考える。片表面のみに磨痕が認められる。

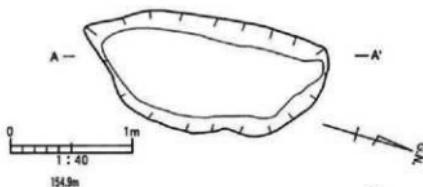
**S C 3** (図29、図版12) グリッドC 2の南東角付近に位置する遺構である。平面プランは長軸約1.39m、短軸約1.18mのはば円形である。(形状比=1.18) 検出面からの深さは約0.24mである。埋土は暗褐色と灰黄褐色の2層からなる。遺構埋土から出土したのは土器のみであった。ここでは、そのうちから7点を図化した。

117は深鉢の口縁部、118~121は深鉢の胴部である。117の内・外面に縄文による調整が認められる。さらに外面にはその上から棒状工具による横位の連続刺突文が施されている。118の外面には縄文による調整の上から斜・横位に2~3条の深い沈線文や押引文が施されている。119~121の外面には横位の数条の貼付突帯間に半裁竹管状の工具による沈線文や連続爪形文が施されている。120には1個の穿孔も認められる。

122の内面には工具痕や条痕文、外面には工具によるナデ・指压さえによる調整が施されている。

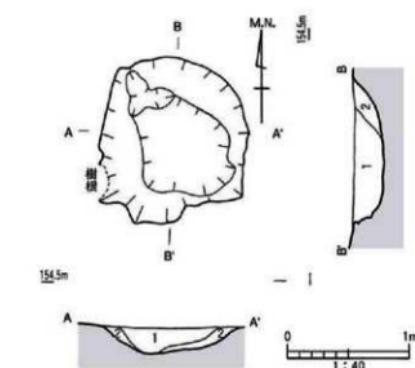
**S C 4** (図版12) グリッドB 3とC 3の境界線付近に位置する遺構である。平面プランは、遺構のはば中央にある樹根による攪乱等もあり、非常に不明瞭であった。長軸約2.20m、短軸約2.00mのはば円形(形状比=1.10)で、検出面からの深さは約0.19mと推定される。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器4点、石器2点を図化した。

123・124は深鉢の口縁部である。123の外面にはナデ調整の上から4条の細沈線文が施されている。内面には、風化のために不鮮明であるが、条痕文らしき調整が確認できる。124の内・外面には明瞭な条痕文や工具ナデが認められ、外面には並行して波状に延びる4条の貼付突帯が貼り付けられている。緩や



SC 2 土器記

- 1 黒褐色 (Hue10YR3/1) 土……しまりなし。
- 2 褐色 (Hue10YR4/4) 土……しまりあさりなし。炭化物 (厚2~3mm) をわずかに含む。
- 3 單褐色 (Hue10YR3/3) 土……炭化物 (厚2~3mm) や明褐色土粒 (Hue7.5YR5/8) をわずかに含む。ややしまりあり。
- 4 にいき黄褐色 (Hue10YR4/3) 土……ややしまりあり。



SC 3 土器記

- 1 暗褐色 (Hue10YR3/3) 土……ややしまりあり。やや粘性あり。
- 2 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 土……ややしまりあり。やや粘性あり。

図29 SC 2・3 平断面図

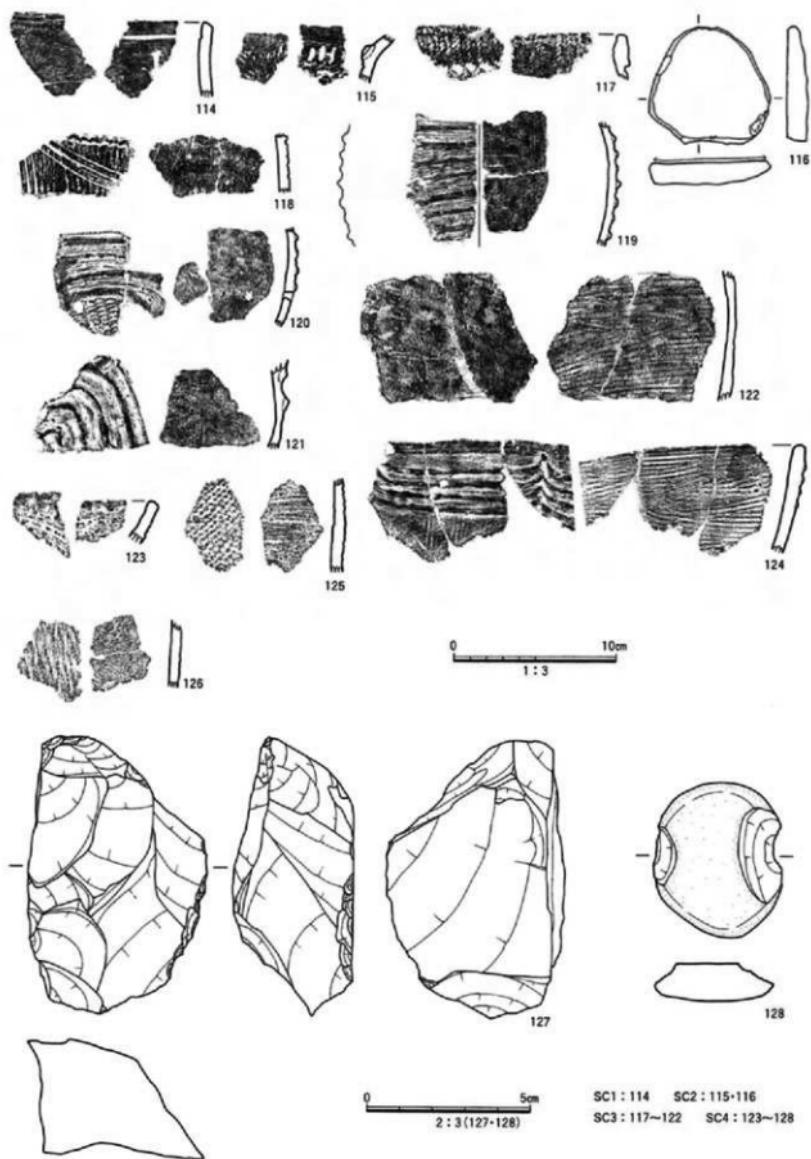


图30 S C 1~4 出土遗物实测图

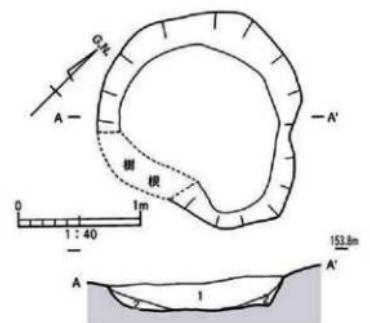
かな波状口縁のようである。125・126は小片であるが、深鉢の胴部の一部と考える。125の外面には煤が付着し、繩文による明瞭な施文が認められる。内面は横位の工具痕らしき調整が認められる。126の内面はナデ、外面には組織痕が認められる。127はホルンフェルス製の剥片である。片側縁部には細かな剥離痕が認められる。128は小型の砂岩製の石錘である。短軸方向に打ち欠きが片面方向から施されている。

**S C 9 (図31)** グリッドC 4 の南西隅附近に位置する遺構である。平面プランは、遺構の一部に樹根に擾乱の影響を受けているが、長軸約1.78m、短軸約1.66mのはば円形と推定できる。(形状比=1.07) 検出面からの深さは約0.24mで、断面形は長方形である。埋土は黒褐色と褐色の2層からなる。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器3点、石器2点を図化した。

129はキャリバー状の深鉢の口縁部である。口唇部と口縁部直下に沈線文が施されている。130は深鉢の波状口縁部である。外面には棒状工具によって施された波状文様、口唇部には不明瞭な刻目が認められる。131は外湾する深鉢の頭部で、外面には繩文が施されている。147は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。表裏面に磨痕が認められる。144はホルンフェルス製で小型の石錘である。短軸方向の打ち欠きが片端のみに施されている。

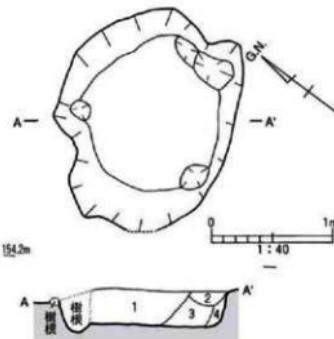
**S C 10 (図31、図版13)** グリッドB 3 の南東の調査区壁近くに位置する遺構である。平面プランは長軸約1.84m、短軸約1.50mのはば円形である。(形状比=1.07) 検出面からの深さは約0.30mで、断面形は長方形である。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器5点、石器1点を図化した。

132・133は深鉢の口縁部である。132は口唇部外面に微突帯文が認められ、煤が付着する。内面は工具によるナデ、外面は指ナデによるやや粗い調整である。133の内・外面の調整は132と同様で、口縁外面に突帯文を有する。134は繩文、135は組織痕が外面に認められる深鉢の胴部小片である。また、134には貫通した1個の穿孔が施されている。136は深鉢の底部であり、表面は激しく摩耗を受けている。145はホルンフェルス製の打製石斧である。欠損部が大きいが、全体の形状が二等辺三角形に近い「バチ形」である打製石斧の基部と推定できる。表面には細かい敲打による整形痕が認められる。



**S C 9 土層注記**

- 1 黒褐色 (Hue10YR3/1) 土……………明赤褐色土 (Hue5YR5/6) の微細粒をわずかに含む。あまりしまりなし。
- 2 褐色 (Hue7.5R4/6) 土……………明赤褐色土 (Hue5YR5/6) のブロックをわずかに含む。



**S C 10 土層注記**

- 1 黒褐色 (Hue10YR3/4) 土……………泥質物や褐色粒をわずかに含む。ややしまりあり。やや粘性あり。
- 2 灰褐色 (Hue7.5R4/6) 土……………ややしまりあり。やや粘性あり。
- 3 にじ黒褐色 (Hue7.5R4/3) 土……………ややしまりあり。やや粘性あり。
- 4 褐色 (Hue10R4/4) 土……………ややしまりあり。やや粘性あり。

図31 S C 9・10平面断面図

**S C 11** (図32、図版13) グリッドB 3 内で、**S C 10**の北西側に位置する遺構である。遺構の約1/3が調査区西壁にかかりすべてを検出できなかったが、平面プランは長軸約1.58m、短軸約1.50の円形(形状比=1.05)と推定される。検出面からの深さは約0.34mである。埋土は3層からなる。埋土中から大型の石器類を出土した。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器3点、石器6点を図化した。

137~139は深鉢の胴部である。137は縦・横位の突帯に囲まれた部分に工具による連続した爪形刺突文、

横位に並行する突帯間に細沈線文も認められる。S C 3 から出土した119~121と同類系の土器と考える。138・139の外面には撚糸文が施されている。138の内面には横位のナデ、128の内面には板状工具によるナデと指頭痕による調整が認められる。139の器厚は約5mmである。140は針尾産と考える黒曜石の打製石器である。平面形態は二等辺三角形で両側辺は直線的に先端まで続いている。141は頭尾産と考える黒曜石の打製石器である。平面形態は二等辺三角形で両側辺は直線的に先端まで続いている。142・143は石錘で、その石材は142・143がホルンフェルス、146は砂岩である。142・143は長軸、146は短軸方向の両端にそれぞれ打ち欠きが施されている。148は尾鈴山酸性岩類製の台石で、床面から浮いた状態で出土した。

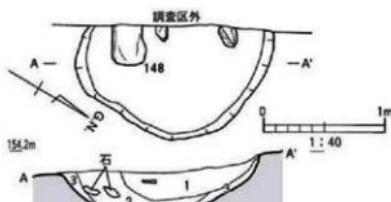


図32 S C 11平面図

**S C 11 土器注記**

- 1 黒陶色 (Hue10Y32/3) 土…あまりしまりなし。粘性なし。
- 2 白色 (Hue7.5B4/6) 土…ややしまりあり。粘性やや。
- 3 間色 (Hue10B4/4) 土…ややしまりあり。粘性やや。

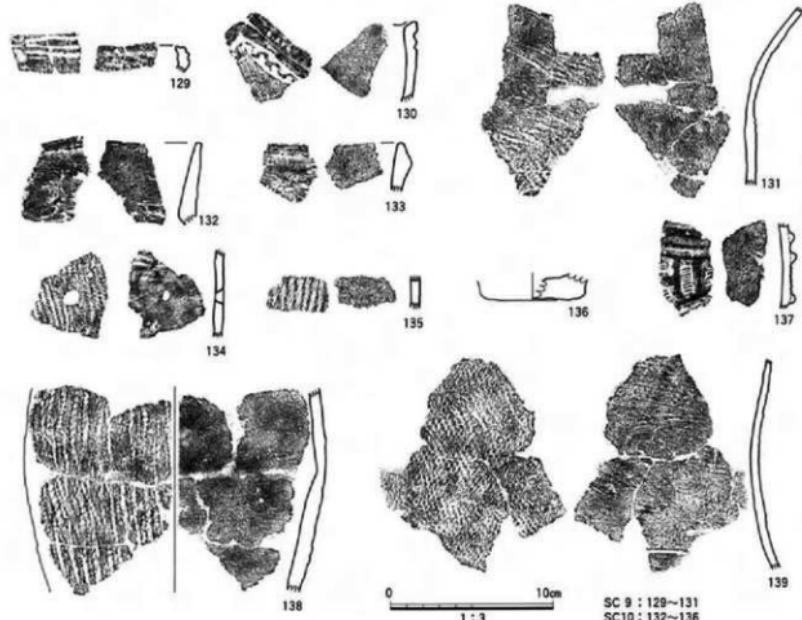


図33 S C 9~11出土縄文土器実測図

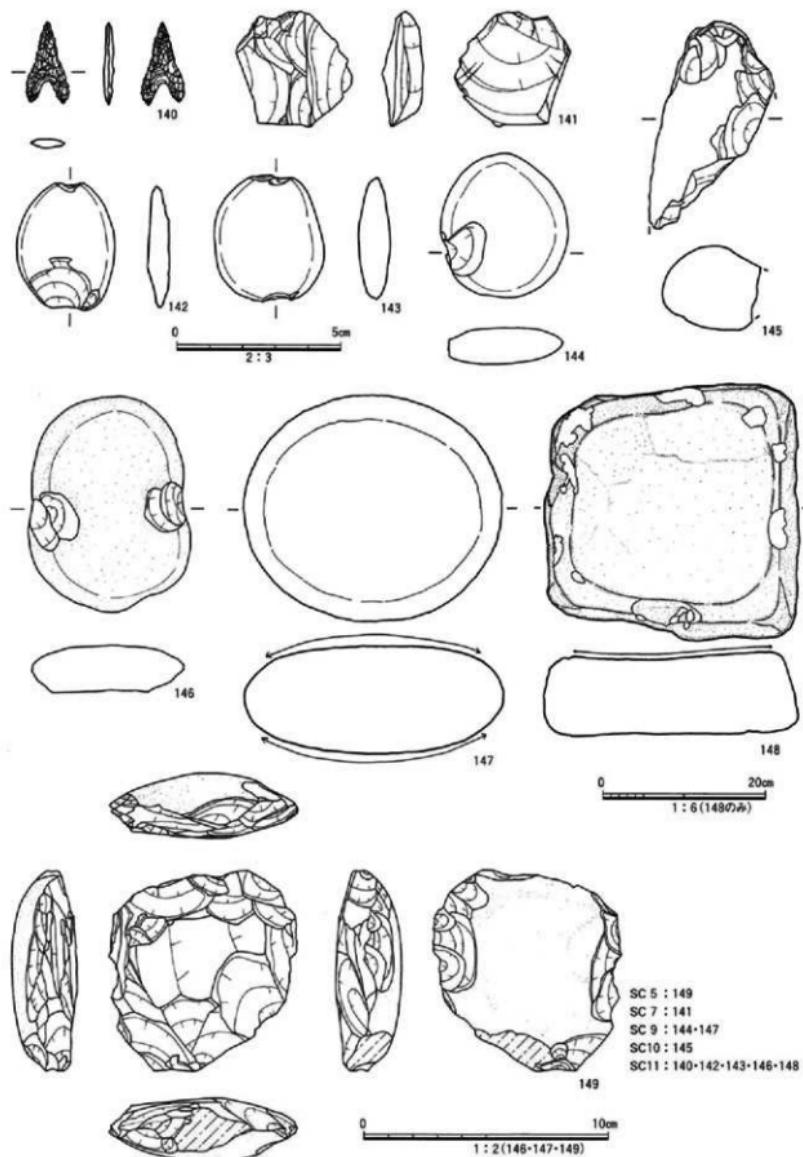


図34 S C 5~11出土石器実測図

## 2 遺物包含層出土の遺物

### i) 土器

本調査区の遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）からは、縄文土器が弥生土器や石器等と混在して出土した。それらは小片であるものが多く、全体の器形が分かる程度まで復元できたものはほとんどなかった。ただし、その形態や文様から判断すると、全体的には縄文時代中期・後期に帰属するものの割合が高く、その中にわずかではあるが、早期や晩期の土器小片が混在していた。

ここでは、遺物包含層から出土した縄文土器群をその形態や文様によって、深鉢を1～6類と類型化した。以下では、その分類の基準と根拠を示し、特徴ある遺物について若干の説明を加える。なお、個々の詳細な情報については、縄文土器観察表（表5～7）を参考にしてもらいたい。

1類：外面の地文が縄文であり、沈線文・押引文・刺突文・凹線文などの文様が施されている一群である。

（図35 150～153）

150は内湾するキャリバー状口縁で、縄文の上から横位に3条の沈線文が施されている。151はキャリバー状口縁を想定させる頭部～胴部である。縄文らしき文様の上から、口縁部にかけて縦位に連続する短直線状が認められ、その下に波状（横位）・直線土（縦位）の沈線文が施されている。152は縄文の上に太目の凹線文が施されている。153は縄文の上から太目の半裁竹管状工具による押引文が施されている。これらは船元式系土器に相当する群であると考える。

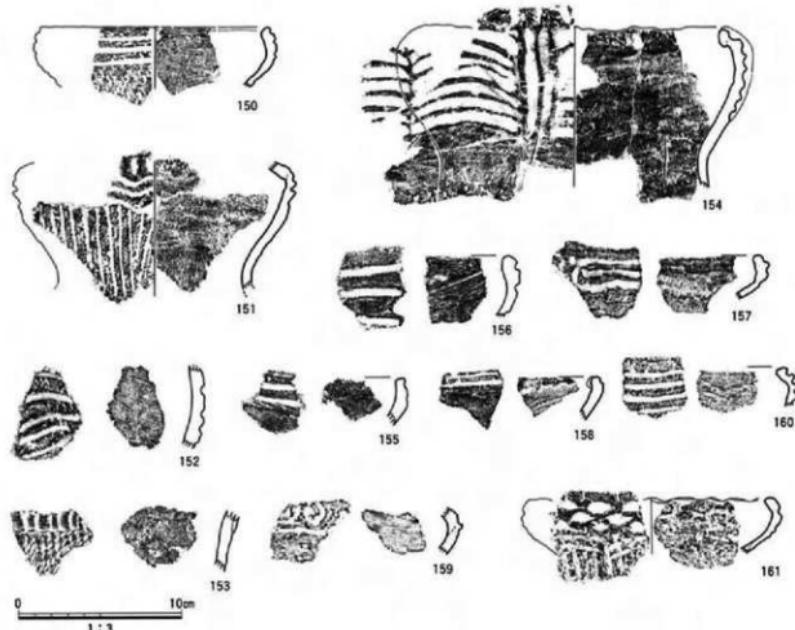


図35 遺物包含層出土遺物実測図（1）

2類：外面に沈線文や凹線文、連続刺突文、押引文などが施されている一群である。(図35・36 154～170)

さらに、口縁部の形態によってa～cに細分した。

a 大きく内湾させるキャリバー状口縁をもつもの (154～161)

154は太い凹線文による縱位の3条突帯や横位の波状突帯などが口縁から頸部にかけて施されている。155～157の外面には沈線文が施されている。155は口縁と頸部の間に横位の2条沈線文が施されている。156の外面には横位に太い3条の沈線文、157の外面には横位の3条沈線文が施されている。そのうち最下位の沈線文は波状である。また、外面には煤が付着している。158は口唇部とその直下に2条の沈線が施されている。159の頸部付近には渦巻き状の沈線文が認められ、その直下には横位に1条の沈線文が施されている。160の外面には4条の平行沈線が横位に廻っている。161の口縁直下の外面には、管状工具による連続刺突文が横位に3段組で施されている。また、口唇部には押圧文の上から爪形状の刻みが認められる。外面の一部は黒色に変化している。これらは春日式系土器に相当する群であると考える。

b やや内湾させる口縁をもつもの (162～165)

162の外面には横位に工具による押引文が認められる。163の口縁部内面には斜位に施された繩文による連続押圧文、外面にはやや風化気味であるが3条の沈線文が認められる。164の外面には3条の沈線文、165の外面には2条の浅い凹線文が施されている。

c やや外傾・外反、もしくはほぼ直立する口縁をもつもの (166～170)

166はやや外傾、167はやや外反する口縁である。166は口唇部内面が肥厚しており、口唇外面には刻目が認められる。外面には山形状に3条の沈線文が施されている。167の外面はミガキ調整後に数条の沈線文が施されている波状口縁である。168はほぼ直立する口縁である。外面には2条の浅い凹線が認められる。

胴部のみが残存して、この類に属すると考えたものは次のとおりである。

169は外面に沈線文が施されている。170の外面には、貼付突帯間に半截竹管状工具による沈線文と連続爪形文が施されている。

3類：口縁部内面に沈線文が施されている一群である。(図36 171～176)

171は丸く膨らんでいる胴部をもつ深鉢の波状口縁部である。口縁部内面に1条の沈線文が、外面にはナデ・ミガキらしき調整が認められる。172～174も波状口縁で、口縁部内面に1条の細沈線文が廻ると考える。175・176はどちらも内・外面ともにナデ調整で、さらに内面には1条の沈線文が施されている。

4類：突帯が施されている一群である。(図36 177～181)

177～180は深鉢の口縁部である。177は口縁部直下に貼付突帯があり、その断面形は鈍角三角形である。178は突帯直下に貫通した穿孔を有する。内・外面ともにミガキ調整が認められる。179の外面には低い断面三角形の突帯文が波状に施され、内・外ともに貝殻条痕文が認められる。180の外面には指ナデ調整と刺突文(未貫通)が認められる。181は深鉢の胴部で、1条の貼付突帯があり、その直下には横位に連続した竹管文らしき文様が認められる。

5類：貝殻条痕文や条痕文が施されている一群である。(図36 182～186)

182～185は深鉢の口縁部である。182の内面には貝殻条痕文、外面にはナデの上に繩文による沈線文が認められる。183の内面には貝殻条痕文、184・185の外面には条痕文が認められる。186は内・外とも

に貝殻条痕文が認められる深鉢の胴部である。

6類：工具による調整痕が施されている一群である。(図37 187~197)

187~197は深鉢の口縁部であり、187~193はやや外傾、194~197はやや外反している。187~193の内面、または外面には工具によるナデらしき調整が認められる。189の口唇部外面には凹みが認められる。191の外面の一部は黒色を呈し、1個の貫通した穿孔が施されている。192は波状口縁の一部である。194の外面は板状工具によるナデ調整が施され、口唇部には細沈線が認められる。195・196の外面はどちらもその一部が黒色に変化している。197は推定口径が約20cmである。

次は1~6類以外の土器をまとめたものである。内・外面に施された主な文様・調整等によってA~Fに細分した。(図37 198~215)

A 外面に山形押型文が施されているもの (198)

198は深鉢の胴部と考える土器小片である。調査区の北西域に広がる盛り土中から出土した。

B 外面に撫糸文が施されているもの (199~202)

いずれも深鉢の胴部で考える土器小片である。199・200はどちらも外面に明瞭な撫糸文が認められる。201・202の外面には撫糸文らしき文様が認められる。

C 内・外面ともにナデ調整が施されているもの (203~204)

203の外面には煤が付着し、204は内・外面ともに一部が黒色に変化している深鉢の口縁部である。

D 外面にミガキ調整が施されているもの (205~208)

205・206には内・外面ともにミガキ調整が認められる。207・208の外面は板状工具によるナデの上からミガキ調整が施されている。いずれも黒色磨研系の土器片と考える。

E 内面、もしくは外面に刺突文が施されているもの (209~212)

209は口縁部内面に竹管状工具による連続刺突文が施されている。210は口縁上端部と口唇部上面、211は口縁部外面、212は胴部外面にそれぞれ形態が異なる刺突文が認められる。

F 外面に組織痕が施されているもの (213~215)

213~215はいずれも小片であるが、明瞭な組織痕が認められる。

次は文様・調整等に関わらず、底部をまとめたものである。(図38 216~219)

216~219はいずれも上げ底である。216の内・外面には斜位の貝殻条痕の上からナデ消し調整が施されている。217の内面には指ナデ、外面には指ナデ・指押さえ、218の内・外面は丁寧なナデ調整が認められる。219の底部は円形でなく、緩やかに角張った部分が認めらる多角形状の底部が推定される。端部は形成時に粘土を貼り付け積み出したように少し肥厚している。220は平底である。

さらに、その他の器種については、以下のようにまとめた。(図38 221~225)

221~223は浅鉢である。221は風化を強く受け、内・外面ともにナデ調整が認められる。222は頸部で緩やか「く」の字状に屈曲する。223は頸部で強く内に屈曲し、口縁部直下で「く」の字に屈曲する。内面にはナデ、外面にはミガキ調整が施されている。224は壺の胴部である。最大径約32cmと推定される。外面には明瞭なミガキ調整が認められる。225は土器片鍤である。片表面に縄文文様が認められる。

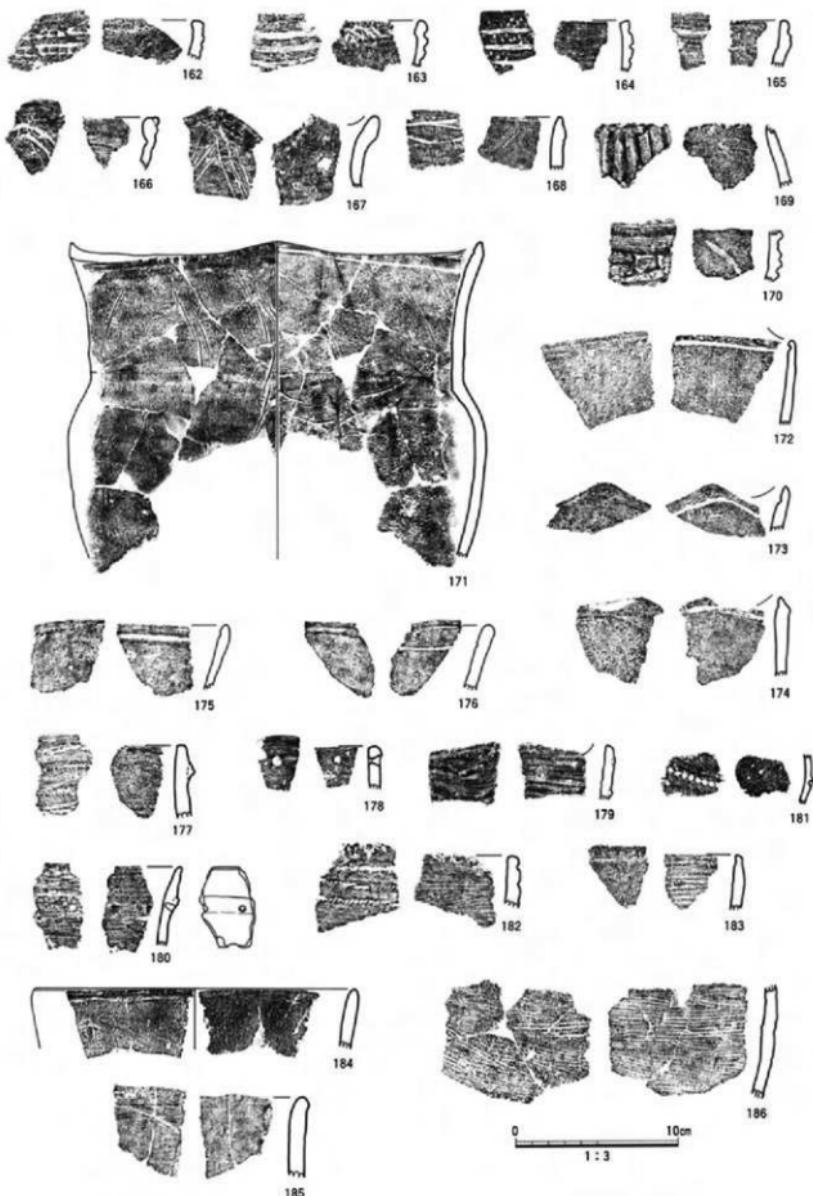


图36 遗物包含層出土遺物實測圖 (2)

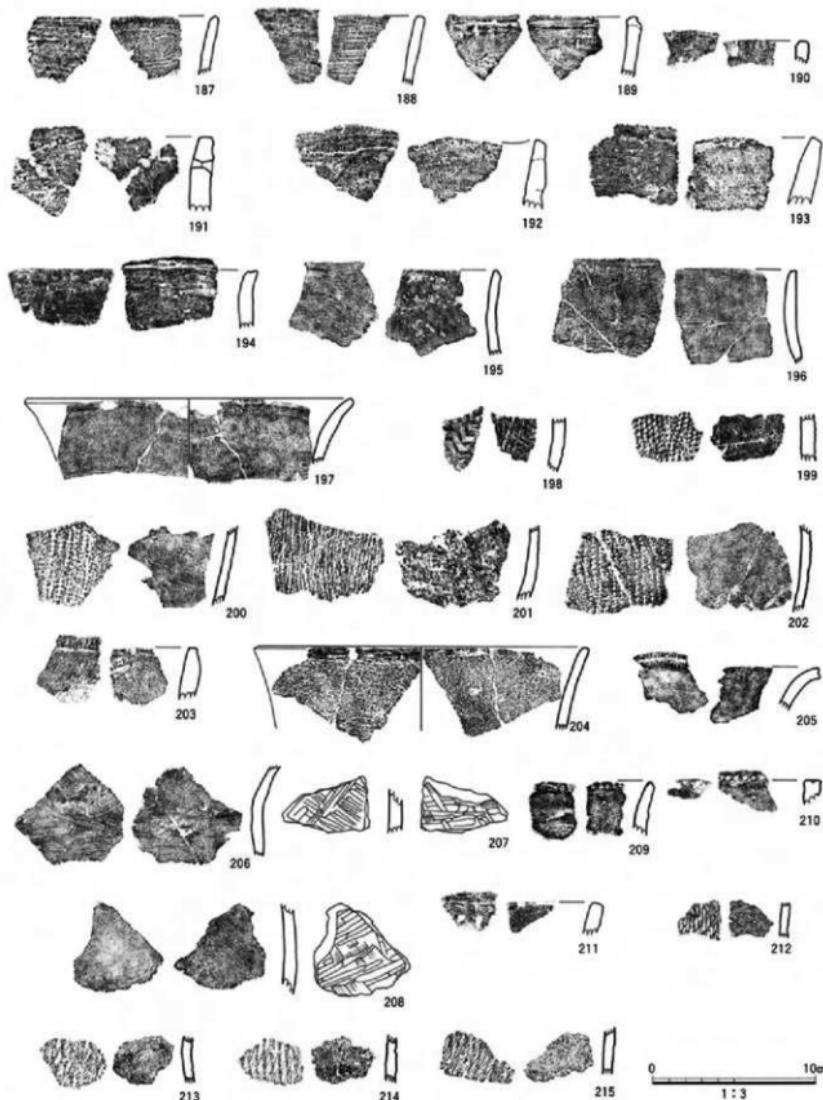


图37 遗物包含层出土遗物实测图 (3)

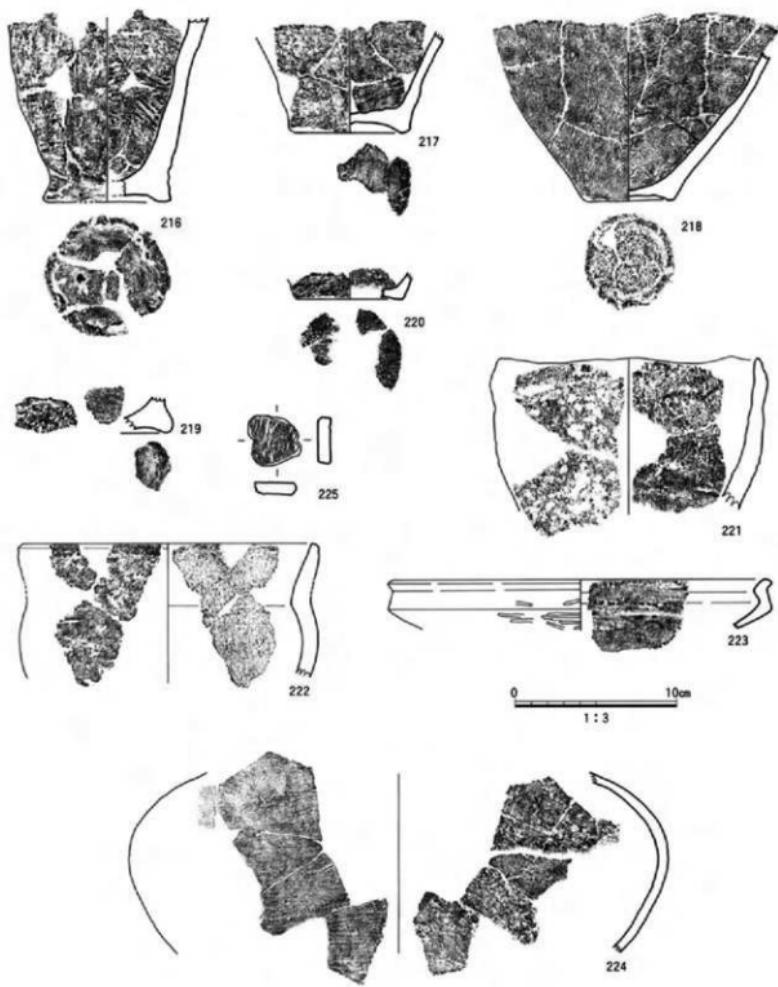


图38 遗物包含层出土遗物实测图 (4)

## ii) 石器遺物

本調査区で出土した石器遺物は総数約530点である。剥片が最も多く、次いで磨石、蔽石、石錘、打製石斧、打製石鎌などであった。(このうち116点について、実測図、写真及び石器観察表に掲載した。)出土した位置は、遺物包含層だけでなく、縄文時代や弥生時代の各遺構埋土中にもあった。これらの石器遺物も、他の遺物と同様に、高位置からの流れ込み等で原位置からの出土ではない可能性が高く、詳細な時期の確定は難しかったが、その器種や形態・石材などからが縄文時代に帰属するものが大部分を占めると考える。

ここでは、遺物包含層(Ⅱ～Ⅲ層)から出土した石器を一括して器種や石材を中心に分類し、その詳細を説明していく。なお、各遺構埋土から出土した石器については、各遺構の出土遺物で一括して説明した。また、個別の出土位置・色調・法量値などについては石器観察表(表13・14)を参照してもらいたい。

### 打製石鎌(図39 226～229)

ここでは遺物包含層から出土した打製石鎌は4点を図化した。

226・227は平面形態が二等辺三角形で、どちらもチャート製である。226の基部形態は平基式である。両側辺はわずかに膨らみながら先端まで続いている。227の基部形態は凹基式である。凹基の抉りはU字状に内湾しており、全長の約1/2まで達している。両側辺はやや外湾しながら先端に続いている。228・229の平面形態は正三角形をしており、凹基式である。228の凹基の抉りは三角形で、全長の約1/3にまで達している。両側辺はやや外湾しながら先端まで続いている。石材はチャートである。229の凹基の抉りはアーチ状であり、それ程深くない。両側辺は直線的に先端まで続いている。石材はガラス質安山岩である。この他、未図化であるが、ホルンフェルス製の打製石鎌が遺物包含層から3点出土した。

### 石匙(図39 230・231)

遺物包含層から出土した石匙は2点のみであり、ここではどちらも図化した。230はいわゆる横型で両面に丁寧な調整が施されている。刃部とつまみ部が左右非対称である。石材はガラス質安山岩である。231は破損により約1/2の残存ではあるが、同じく横型のものであり、両面に丁寧な調整が施されている。石材は白色の石英である。

### 粗製剥片石器(図39 232)

粗雑な剥片剥離が見て取られ、定型的な器種としては判断しにくい剥片の一群である。石材は砂岩が多く、遺物包含層からは6点出土した。石材はホルンフェルスと尾鈴山酸性岩類であった。その多くは、裸面から打面調整を行わず剥離されたものである。ここではそのうち1点を図化した。232はホルンフェルス製で、蛤状の幅広の横長剥片であり、断面形がレンズ形である。微細な剥離痕が認められる。正面全体に自然面を残すことから、母岩から最初に剥離されたものと推定される。

### 剥片(図40 233・234)

遺物包含層から出土した2点のみをここでは図化した。233・234はともにホルンフェルス製であり、打面形成を行った後に剥片を剥離したものであると考えられる。どちらにも側縁部に細かな剥離痕が認められる。なお、本調査区内で剥片は、315点以上出土している。利用された石材はホルンフェルスが非常に多く、チャートや黒曜石、珪質頁岩などは小片であるものが目立つ。またわずかではあるが、器種や石材などから旧石器時代に帰属すると判断できる剥片も少量であるが出土した。これらについては、

第5節を参照してもらいたい。

#### 石核 (図40・41 235~237)

遺物包含層から出土した石核は8点であった。その石材はほとんどがホルンフェルスであり、チャートや針尾産と考えられる黒曜石が各1点であった。ここでは、そのうち3点を図化した。235~237はすべてホルンフェルス製である。235・236はともに自然面を残し、打面形成を行った後に剥離作業を行っている。また、その剥離作業も打面転移をしながら複数方向から行っているようである。237は表裏両面が剥離を行なう作業面となっている。

#### 打製石斧・部分磨製石斧 (図41~42 238~253)

ここでは遺物包含層から出土した打製石斧15点、部分磨製石斧2点を図化した。石材はすべてホルンフェルスである。なお、本調査区内では出土した石斧類の多くは、風化作用を受けており、原因不明の欠損によって全体の形態が不明瞭のものが多くあった。打製石斧は残存する形態から、全体の形状は二等辺三角形に近く、最大幅が石斧の下位にくる「バチ形」(238~246)、石斧の側面に内湾する抉りが認められる「有肩形」(247・248)、全体の形状は長方形に近く、最大幅が石斧のほぼ中位にくる「短冊形」(249~251)の3群に大別できる。244は欠損がありなくほぼ全体の形態が見て取れる。欠損の原因はそれぞれ不明であるが、238・240~243・245は基部側のみ、239は刃部側のみが残存している。249・250の刃部には細かい剥離調整が認められる。247は表面の一部に自然面が残り、明瞭な抉りが上位の両側にある。他の石斧に比べると厚みが薄い。239~241・243・251の表面には細かい敲打による整形痕が認められる。252・253は刃部の表面を磨いた部分を有する部分磨製石斧である。どちらも縦面を円刃として利用しているようだが、刃部側しか残存していないので全体の形態は不明である。

#### 磨石・敲石・凹石 (図43・44 254~266)

本調査区内で磨石・敲石は、一部破損したものを含め、合計38点が出土した。石材としては、尾鈴山酸性岩類18点と砂岩16点で大部分を占める。ここでは、そのうちの遺物包含層から出土した12点を図化した。そのサイズは6~15cmで、重さは200~800gである。形態も円形(254~259)・楕円形(260・262)・長楕円形(261・263)など様々である。主な敲打痕などの様子は以下のとおりである。259は全周縁に敲打痕が認められ、他より大きく重く約845gである。261~263は、長軸方向の両端に敲打痕が認められる。254~258・260の全周縁には敲打痕による稜が認められ、いわゆる“ソロバン珠状”であり、どれも掌中に収まるサイズである。表面に擦痕もあることから磨石との併用の可能性もある。264は砂岩製の凹石である。表裏面の中央部に敲打による凹みが認められる。周縁にもわずかに敲打痕が認められることから敲石との併用も考えられる。265は表面全体に擦痕が残る磨石である。266は表面中央部にわずかな敲打痕が認められる敲石である。

#### 石錘 (図44 267~275)

本調査区内で石錘は、一部欠損したものを含め、合計33点が出土した。石材としては、砂岩(21点)・ホルンフェルス(10点)の割合が高く、尾鈴山酸性岩類・頁岩製が各1点である。いずれも自然縁の一部に加工を施した錘具に相当する「打欠石錘」と考えられる。ここでは、遺物包含層から出土した9点を図化した。267~269は短軸方向、270~275は長軸方向の打ち欠きが施されている。273は比較的に器厚が厚く、重さは約250gである。274・275は長楕円形状であり、他の円形状のものと異なる。

その他 (図45 276~280)

276はチャート製で表面が艶やかな手触りである。いわゆる、“ペットストーン”である可能性が考えられる。277・278は石器未製品である。277はチャート、278は姫島産の黒曜石製である。どちらも石器作製過程を想起させる細かな剥離痕が認められる。279・280は、どちらも石器作製過程の途中段階のものとも想定できたが、詳細な用途等が不明であるため「用途不明石器」とした。石材はどちらもホルンフェルスである。279は短軸方向の両端に抉るような打ち欠きが認められる。280は側縁部に明瞭で比較的丁寧な剥離調整痕が認められる。

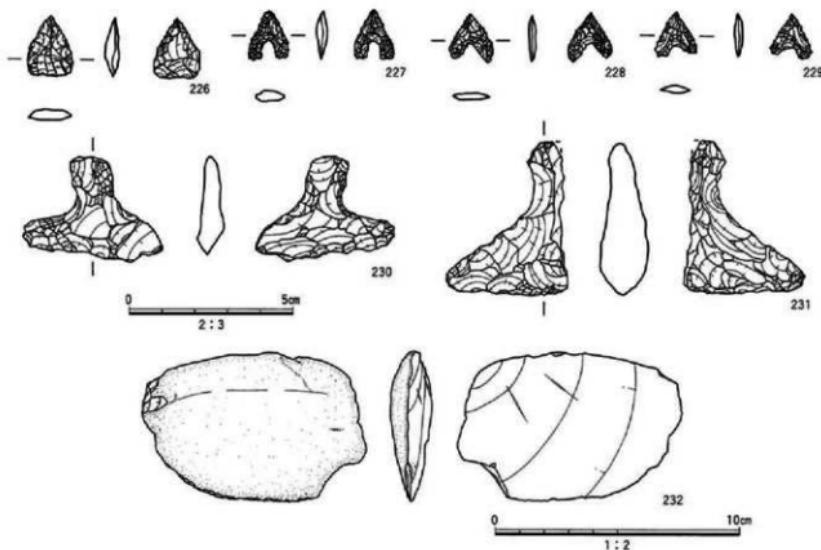


図39 遺物包含層出土遺物実測図 (5)

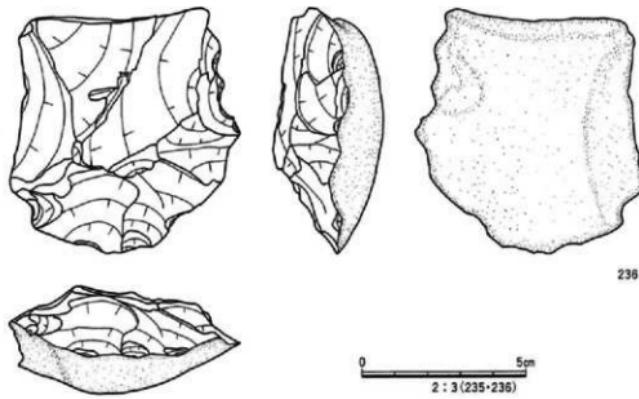
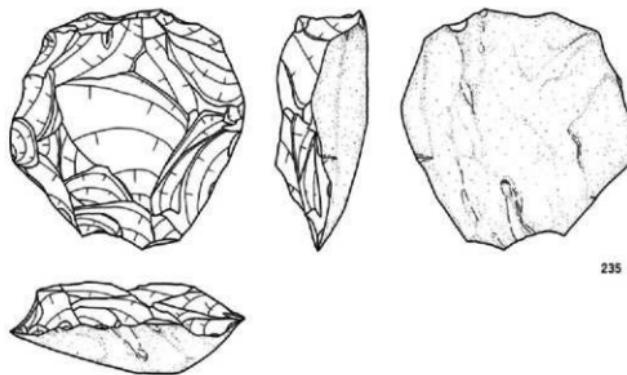
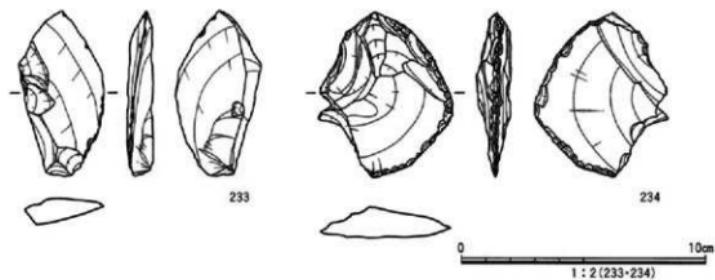


图40 遗物包含层出土遗物实测图 (6)

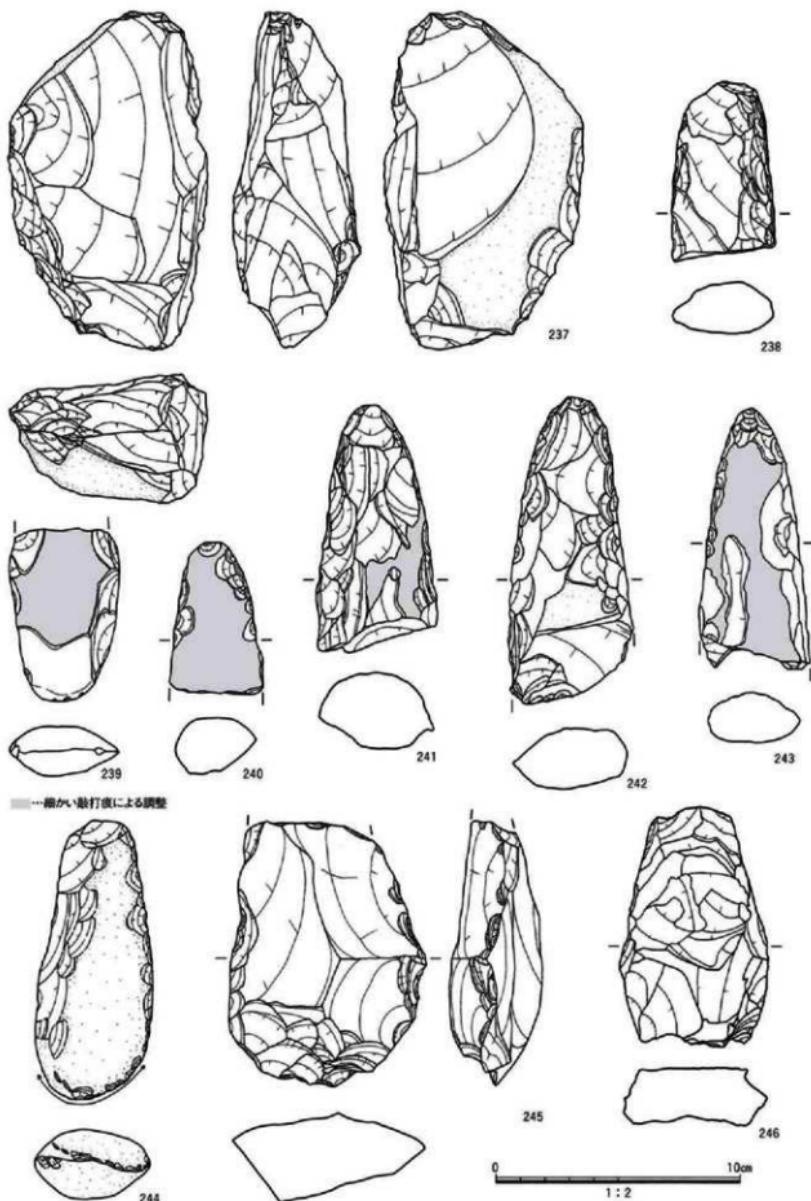


図41 遺物包含層出土遺物実測図 (7)

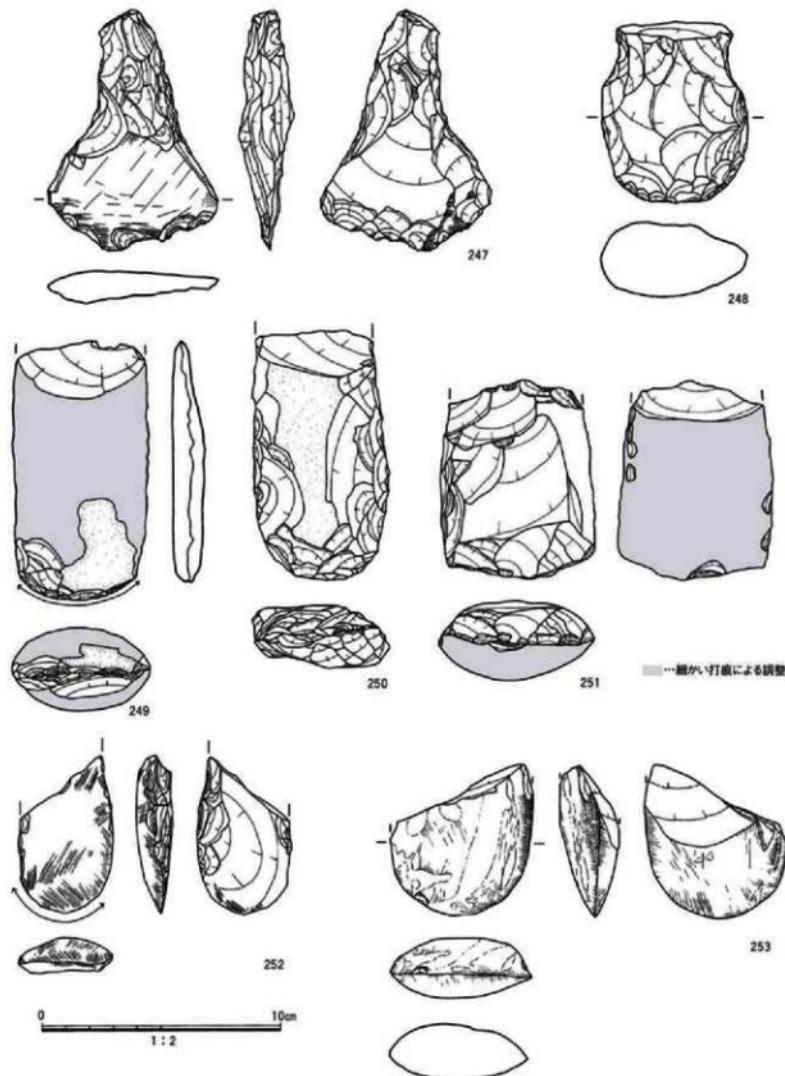


図42 遺物包含層出土遺物実測図 (8)

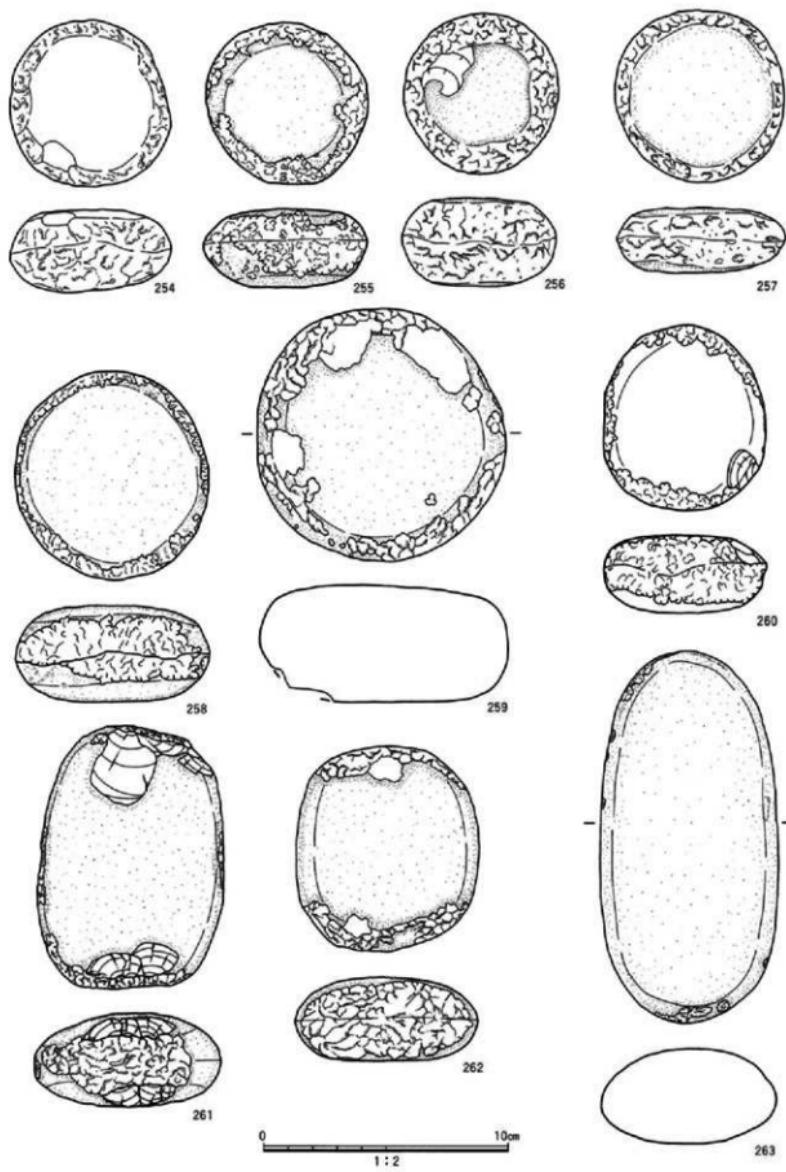


图43 遗物包含层出土遗物实测图 (9)

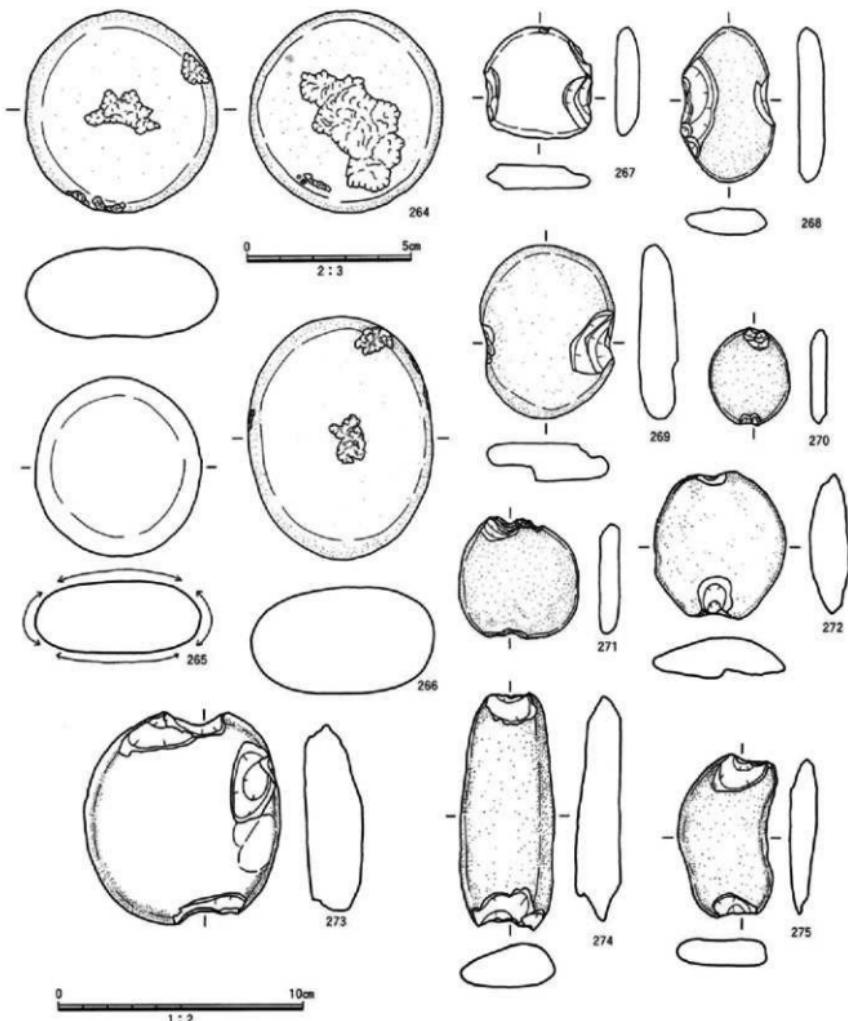


图44 遗物包含层出土遗物实测图 (10)

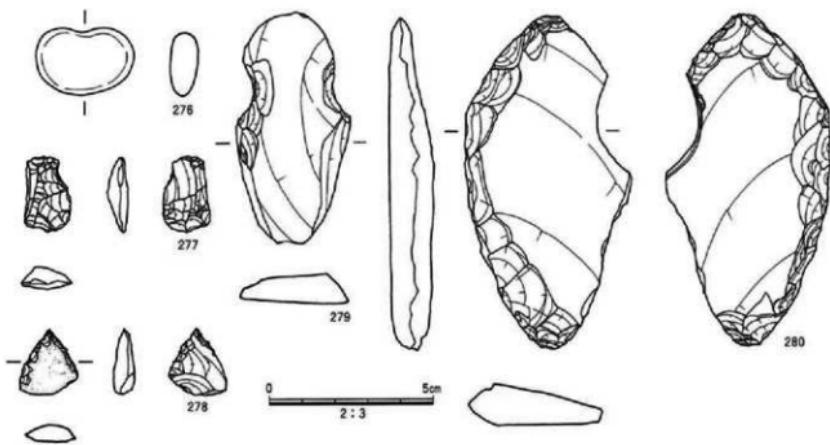


図45 遺物包含層出土石器実測図（11）

#### 第4節 弥生時代中期

本調査区では、弥生時代の遺構として、竪穴住居1軒・不明遺構1基を検出した。遺構埋土から出土した土器を概観すると、弥生時代中期に帰属するもののが多かった。ただし、遺構埋土及び遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）から出土した遺物については、縄文時代の遺物同様に、調査区より高位置の場所からの流れ込み等により原位置からの出土ではない可能性が高いと考える。以下、弥生時代の遺構と遺物について説明を行う。

##### 1 検出遺構と出土遺物

###### i) 竪穴住居

**S A 2** (図46、図版14) 調査区のほぼ北部に位置する竪穴住居である。遺構検出はIV層上面で行った。調査区壁まで遺構の一部が至っていたためにその全体を検出することはできなかったが、平面プランはほぼ長方形を呈し、その規模は6m×7mと推定される。先述した縄文時代の竪穴住居S A 1を南方向で切っている。また、トレンチ及び調査区壁によってその約半分しか確認できなかったが、おそらく床面全周にベッド状の段（幅約0.8~1.0m、床面からの高さ0.2m）を伴う遺構であると考える。明確な支柱穴、貼床や炉跡は確認できなかった。遺構埋土中からの出土遺物は、土器・石器を合わせて約170点で、そのほとんどが床面から3~50cmの間で出土している。床面直上では、住居跡中央部分からやや南東に寄った位置で、尾鉢山酸性岩類製の台石364（約27×31×5cm、約6.6kg）を検出した。遺物の取り上げの際には、四分法により掘削時に設定した土層観察ベルトをもとに、ほぼ北西部から時計回りにS A 2 a→S A 2 b→S A 2 c→S A 2 dとしてセクションを設定して取り上げた。また、ベッド状の段上から出土した遺物も同様にセクションをS A 2 ベッド a~dと設定して取り上げた。遺構埋土からは

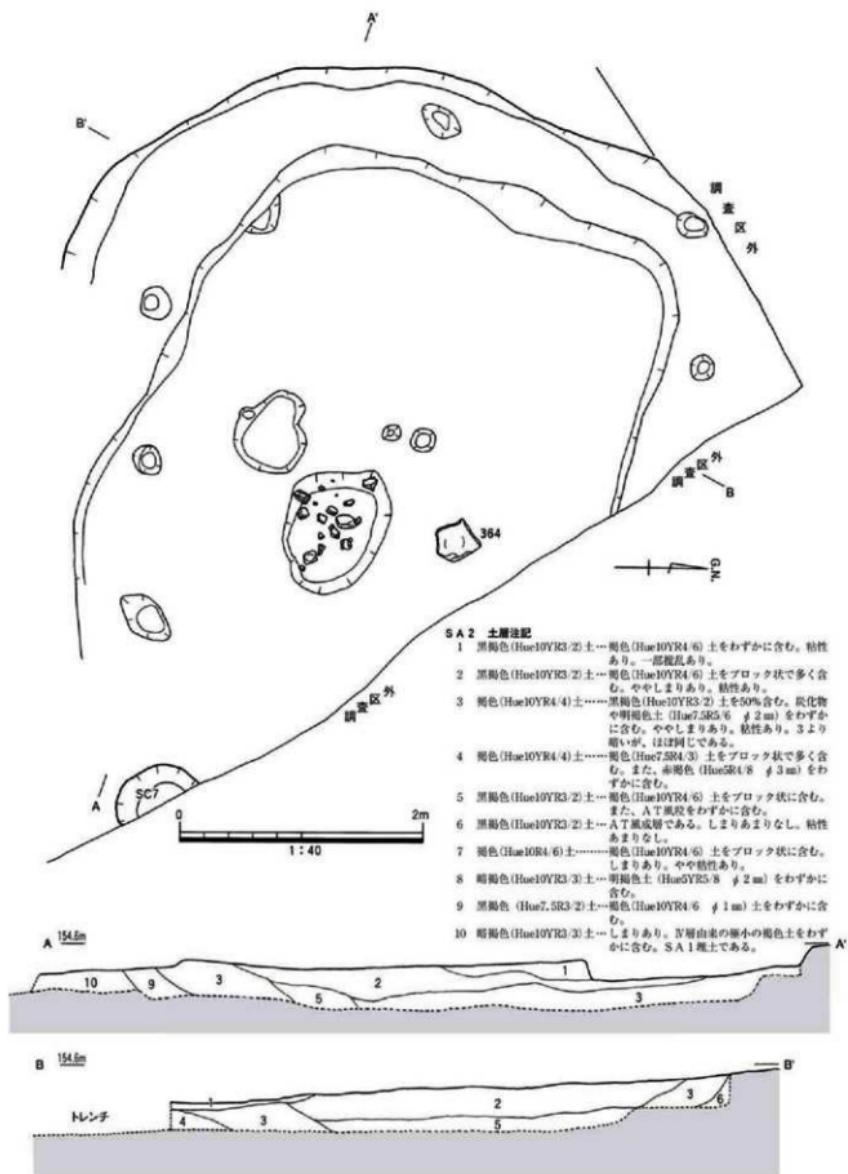


図46 SA 2 実測図

弥生時代中期に帰属する弥生土器片が多く出土したことにから、SA2は弥生時代中期の造構と判断した。出土した遺物の中に含まれていた縄文土器や石器等については、SA2がSA1を切ったり、縄文遺物包含層を掘り込んだりしたことによる混入や周囲からの流れ込み等の可能性があると考えた。ここでは、SA2埋土から出土した弥生土器（45点）だけでなく、同時に出土した縄文土器（19点）、石器31点も併せて図化して説明している。（図47～51）

#### 縄文土器（図47 281～297）

281～294は深鉢の口縁部である。281はキャリバー状の口縁である。内済する外面には横位に平行して連続した押引文の間に半裁竹管状工具による連続刺突文が施されている。282～287は内面、または外面に貝殻条痕文が認められる群である。どれも口縁はやや外傾している。282の内面は横位の貝殻条痕文の上からナデ、外面はナデ調整であり、未貫通の穿孔が施されている。283は内・外面ともに横位の貝殻条痕の上からナデ消しを施されている。284の口縁部直下には2条の細沈線が施されている。内・外面ともに貝殻条痕文の後にナデ消しが認められる。285は摘み出されたような突帯を外面に有する口縁である。内・外面ともに貝殻条痕文で調整されている。286は内・外面ともに条痕文で調整されている。残り部分は少ないが波状口縁の一部のようである。287は内・外面ともに貝殻条痕文が施されている。外面には併せて押圧文も認められる。286と同様に波状口縁状のようである。288は外傾する口縁部で、内・外面ともにナデ調整で、外面には未貫通の孔列文が施されている。289の内・外面、290の外面には沈線文が施されている。また、289の口縁上端部には刻目も併せて認められる。291・293の内・外面はいずれもナデ調整である。292は内・外面ともに斜位のナデ調整である。器壁が薄く、外面には煤の付着もあり、一

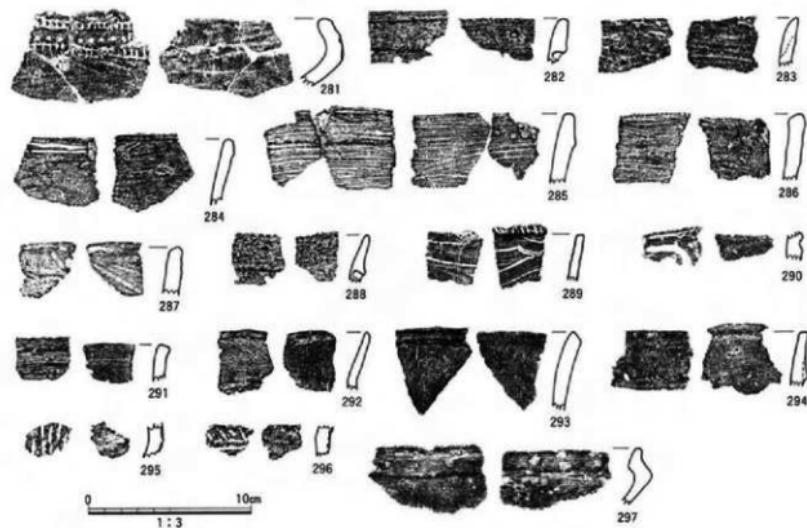


図47 SA2出土遺物実測図(1)

部が黒色に変化している。294は内・外面ともに指ナデが認められる。295・296は小片で詳細な部位は不明であるが、外面に工具による爪形の連続刺突文が施されている。また、296の内面には横位に2条の細沈線が認められる。297は浅鉢の口縁部から胴部にかかる部位であり、逆「く」の字状を呈する。

弥生土器 (図48 298~342)

【甕口縁～頸部】 (298~325)

298~317は口縁部に刻目が認められ、その直下に断面三角形の貼付刻目突帯を有するタイプである。そのうち、298~309・316は、口唇部外面を摘み出して突出させている群である。口縁部は298~304がほぼ直立、305~209・309・316はやや外傾している。299の口唇部には刻目は認められないが、その他の口唇部にはどれも刻目が施されている。また、299・305~309・316の口縁部上面は平面であるが、298・300~304の口縁部上面には凹みが認められる。さらに、298~306・308の外面には1条の貼付刻目突帯、304の外面には2条の貼付刻目突帯を有する。主な調整等については以下のとおりである。298の内・外面にはミガキ調整が認められる。300・301はどちらも内面はナデ、外面は横位のナデ・縦位のハケ目、302の外面にはミガキ、308は内・外面ともに斜位のハケ目がそれぞれ認められる。299・303・304の内・外面はどれもナデ調整である。305の外面には明瞭な斜・縦位のハケ目が認められ、煤が付着して、内面にはナデ調整・指頭痕が認められる。306の内面はナデ、外面には厚く煤が残る部分があり、縦位のハケ目調整が明瞭に認められる。309・316の外面には明瞭な斜・縦位のハケ目が認められる。

310~315・317は刻目のあるL字状の口縁部を有するタイプである。口縁部の断面形が310~312は三角形状、314~315・317は台形状である。また、310・312・317は口縁直下に1条の刻目貼付突帯を有する。主な調整等については、310・311・313・314の内・外面にはともにナデ、317・312の外面には横位のナデ・斜位のハケ目調整が認められる。

318~321は刻目のないL字状の口縁部を有するタイプである。いずれもその口縁部の断面は台形に近い形状である。318~320の口唇部には凹みが認められる。口縁部は318・319・321がほぼ直立しており、320はやや内傾している。318は推定口外径が約27cmであり、胴部には3条の貼付突帯を有する。319は推定口外径が約25cmであり、胴部には断面三角形状の1条の貼付突帯を有する。

322・323は口縁部が外反するタイプである。322は頸部から緩やかに外反している口縁部である。内面にはミガキの後、ナデ調整、外面には風化のために調整は不鮮明であるが、指頭痕が認められる。323は胴部が緩やかに膨らみ、頸部から大きく外反する口縁部を有する。内・外面ともにナデ調整であるが、土器の表面全体に凹凸が目立つ。外面には煤が付着する部分が認められる。

324・325は口縁部が「く」の字状に外に開くタイプである。324の外面にはハケ目の後にナデ調整が施され、325の外面には部分的に少量の煤が認められる。

【甕胴部】 (326~327)

326には1条の貼付刻目突帯が残存している。内面にはナデ、外面の突帯下には斜位のハケ目調整が認められる。327の内面はナデ、外面は明瞭な斜・縦位のハケ目が認められ、部分的に煤が付着している。

【甕底部】 (328~336)

326~330・332~336は平底で、331は上げ底である。328~330は底部から緩やかに外反しながら立ち上がるタイプである。328の外面には縦位のハケ目が明瞭に認められる。329・330は内・外面ともにナデ調整であり、330の底外面には指頭痕も認められる。331・332は端部が外に張り出すタイプである。331は

内・外面ともにナデ調整である。332の外面には縦位のミガキ調整が確認できる。333～336は底部から直線的に開くタイプである。333は内・外面にハケ目調整が認められる。334の内面にはハケ目の後に指ナデ、外面にはナデ調整が施されている。また、底外面には植物組織による圧痕が認められる。335の外面にはタタキの後にナデ調整が施されている。底外面には不明瞭であるが圧痕が認められる。336の外面には指頭痕、底外面には朴（モクレン科の落葉高木）と考えられる明瞭な葉脈痕が確認できる。

[壺] (338～340)

338は頭部から胴部にかかる部分である。内面には指押さえ・指ナデ・ハケ目、外面の一部は黒色に変化し、ミガキやハケ目の上からのナデ調整が認められる。339・340ともに口縁上端部に横位の凹線を有する。339は内・外面ともに風化のため調整不明である。340の内・外面ともにナデ調整で、内面には煤が付着している。

[鉢] (337・341)

337は鉢の内湾する胴部であり、口縁部に延びるほど器壁が薄くなっている。内面の一部は黒色に変化し、斜・縦位のハケ目の上を指ナデ、外面には部分的に煤が付着し、ナデ調整が認められる。341は内湾する胴部から直立する口縁部で、内面には斜・横位、外面には横位のナデ調整が認められる。

[その他] (342)

342は器種・部位は不明ではあるが、竹管文とイチイガシと考えられる種子圧痕が並んで認められる。

石器 (図49～51 343～365)

343～345は打製石器で、どれも基部形態は凹基式である。343・345は全体の形状が二等辺三角形で、凹基の抉りは浅いアーチ状である。344は側刃が角張っており、基部の抉りが鈍角二等辺三角形で、先端部は破損している。石材は343がホルンフェルス、344・345はガラス質安山岩である。SA2からはこれらを含め、打製石器が5点出土した。346は緑色凝灰岩製の磨製石器で先端部は欠損している。347は「用途不明石器」で、石材はチャートである。石器未製品とも考えられる。348～350は剥片である。SA2からは剥片が約40点出土し、約50%がホルンフェルス製である。348・349は縦長剥片、348は横長剥片である。349の側縁部には細かな剥離痕が認められる。石材は348・350がホルンフェルス、349は姫島産の黒曜石である。351は石核である。石材はホルンフェルスで自然面を残し、打面形成を行った後、剥離作業を行っている。352・353は敲石である。352の石材は青灰色のチャートで、長軸端部には剥離痕と敲打痕が認められる。353の石材は砂岩である。ほぼ全周縁に敲打痕が認められる。354～357は石錘である。354～356は長軸方向、357は短軸方向に打ち欠きが施された「打欠石錘」である。石材は354・356が砂岩、355・357がホルンフェルスである。358・359はどちらとも一部欠損により全体の形態が不明瞭であるが、ホルンフェルス製の打製石斧である。358はおそらく「バチ形」の基部であると考える。表面には細かい敲打による整形痕が残っている。359は風化を強く受けているが「短冊形」の刃部であると考える。360は部分磨製石斧である。ホルンフェルス製で、刃部が滑らかに研磨されている。361は石皿である。表裏面の側刃から中央部にかけて明瞭な研磨による凹みが認められる。三側面に研磨痕が認められることから長期間使用したと推定される。石材は砂岩である。362は表裏面の中央部に敲打痕による凹みが認められる凹石である。長軸方向両端に明瞭な敲打痕も残ってことから敲石との併用も考えられる。363は尾鈴山酸性岩類の砥石と考える。片側表面のみに磨痕が認められるが、石皿として使用も捉える。364・365はどちらも尾鈴山酸性岩類の台石である。364はSA2床面上で検出され、重量約6.6kgである。(図46参照)

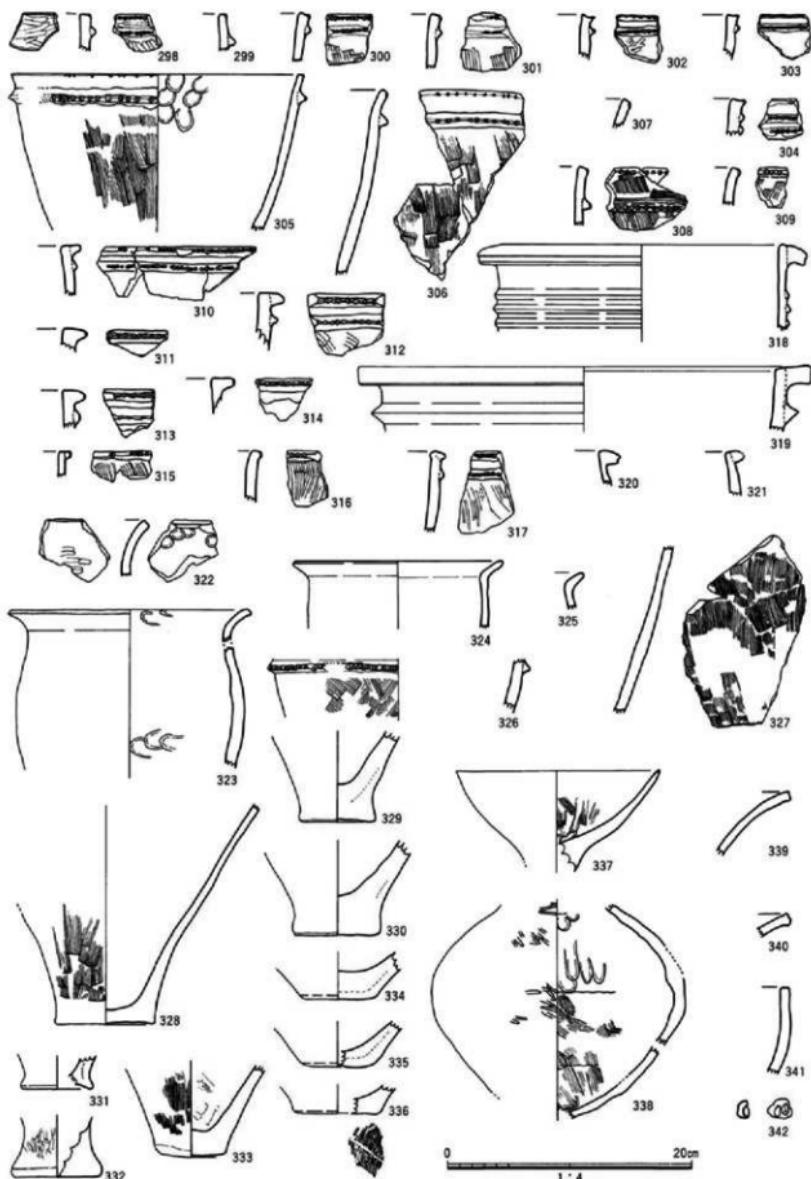


图48 SA 2 出土遗物実測図 (2)

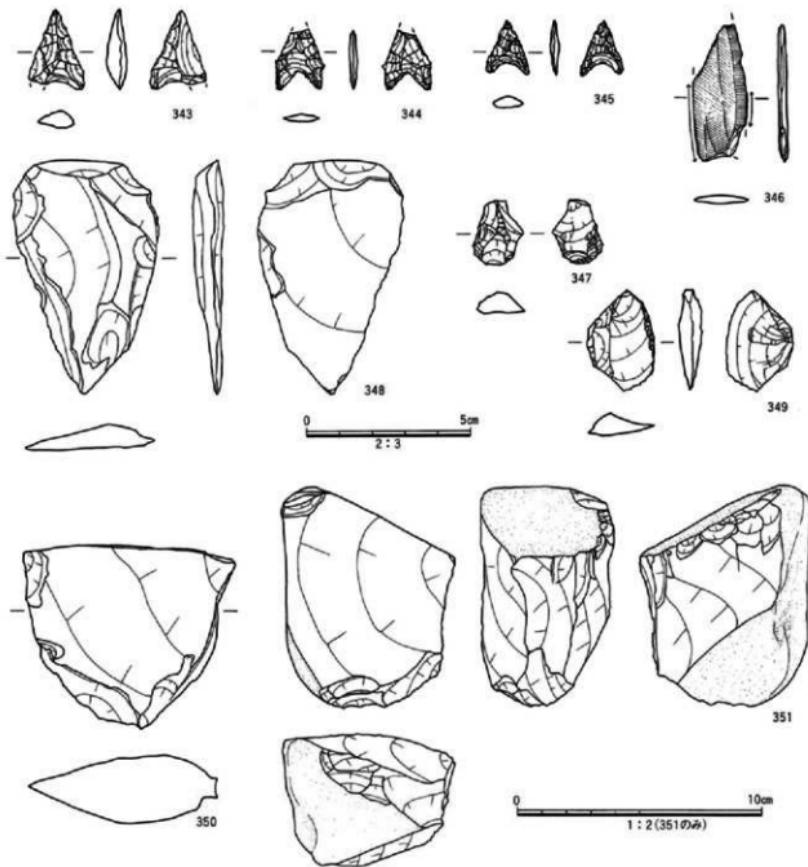


図49 SA 2 出土遺物実測図 (3)

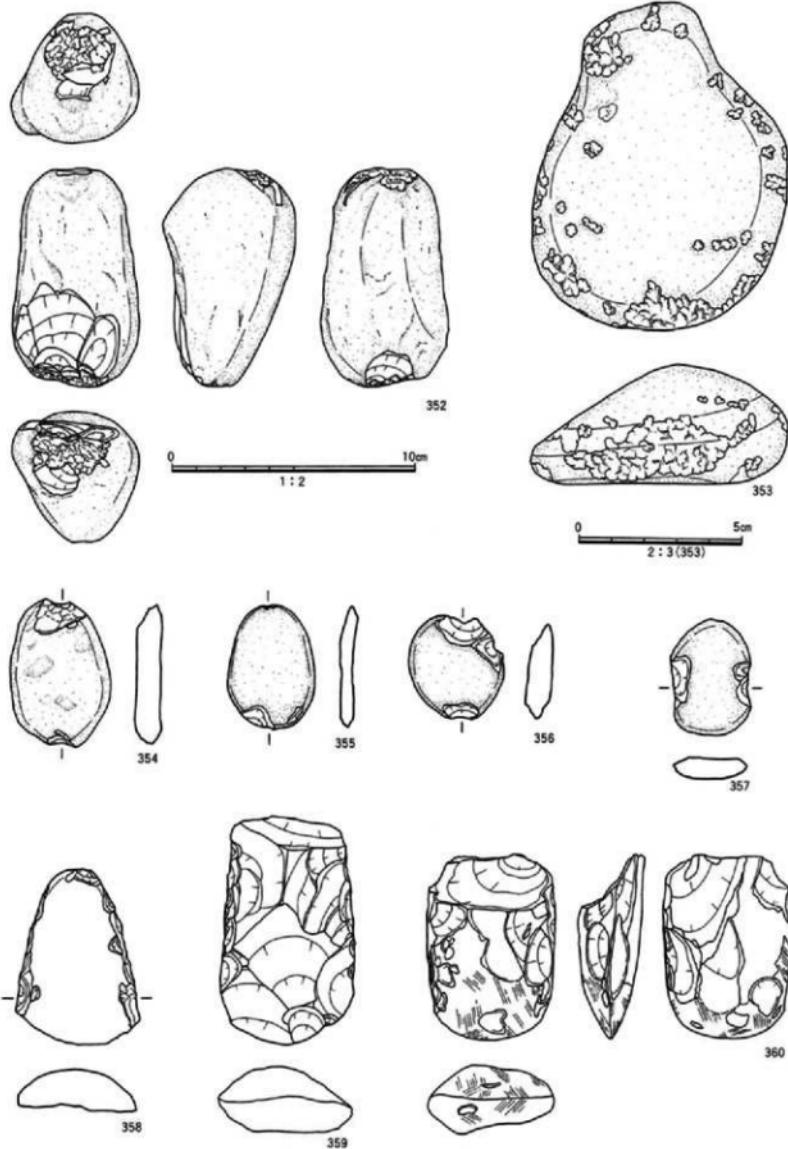


图50 SA 2 出土遗物实测图 (4)

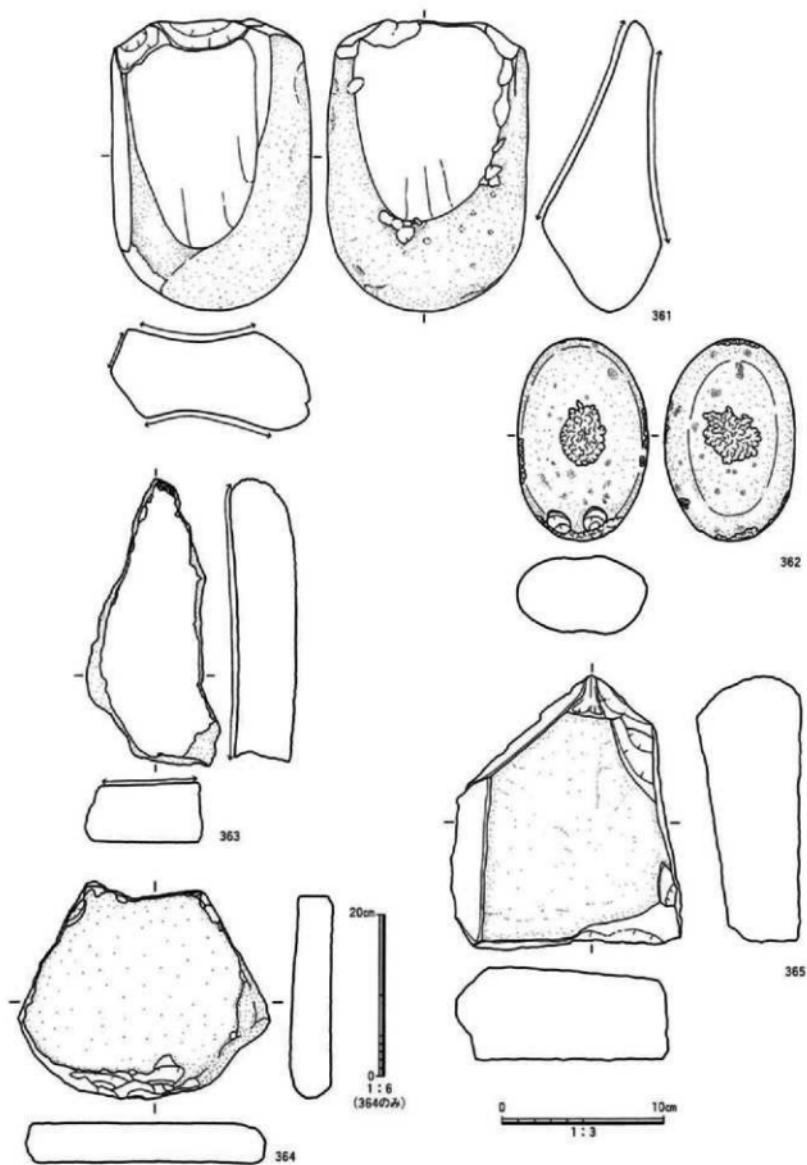
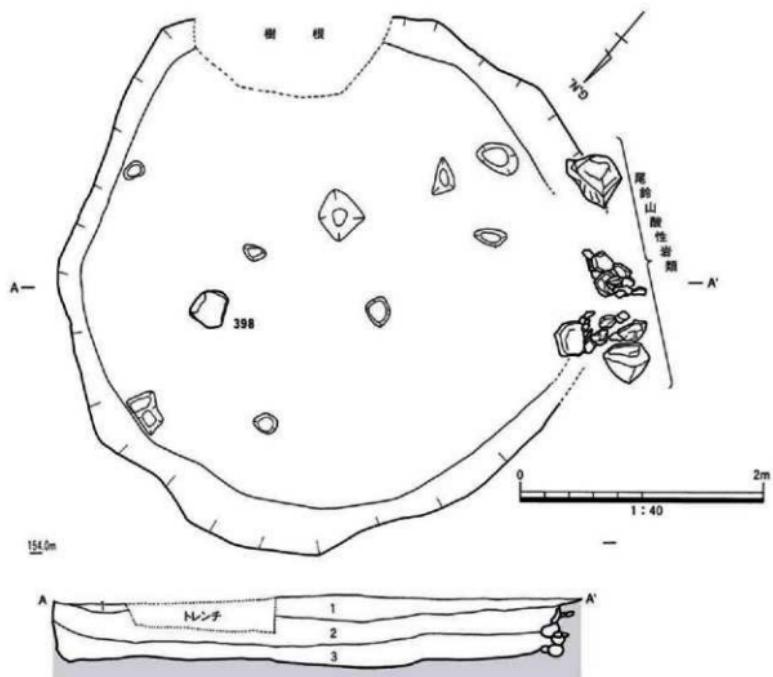


図51 SA 2 出土遺物実測図 (5)

ii) 不明遺構

**S Z 1** (図52、図版15) 調査区の南東部に位置する遺構である。検出面はIV層上面である。平面プランはほぼ円形を呈し、その規模は約4.0m×4.5mを測る。検出面からの底面までの深さは約0.6mあり、底面全体には節理がある尾鈴山酸性岩類の自然礫層による凸凹が認められる。また、そこには不規則に配置されたような小柱穴とも考えられる平面椭円形で直径0.2~0.3m、深さ0.2~0.4mの凹み8個を確認した。なお、貼床や炉跡などは確認できなかった。住居の可能性も考えられるが断定は避けおきたい。遺構の用途については不明である。遺物の取り上げの際には、四分法により掘削時に設定した土層観察ベルトをもとに、ほぼ北西部から時計回りにSZ1a→SZ1b→SZ1c→SZ1dとしてセクション設定を行って取り上げた。遺構埋土内からの出土遺物は、土器・石器を合わせて約80点で、中央部分からやや東に寄った位置の床面直上で尾鈴山酸性岩類製の台石398（約0.32m×0.29m 11.5kg）を検出した。



**S Z 1 土層注記**

- 1 黒褐色(Hue10YR2/3)土…ややしまりあり。やや粘性あり。
- 2 喰褐色(Hue10YR3/4)土…ややしまりあり。やや粘性あり。
- 3 黒褐色(Hue10YR2/2)土…ややしまりあり。あまり粘性なし。炭化物や多量の白色・黄褐色のバニス(φ 5~30mm)を含む。

図52 S Z 1 実測図

S Z 1 は遺構埋土から弥生時代中期に帰属する土器片が多く出土したことから、同時期に帰属すると判断した。ただし、出土した遺物の中には、前述した S A 2 と同様に、弥生土器と併せて縄文土器や石器遺物等が含まれていたが、S Z 1 が遺物包含層を掘りこんだことによる混入や周囲からの流れ込み等の可能性があると考えた。ここでは、S Z 1 の埋土から出土した弥生土器（18点）だけでなく、同時に出土した縄文土器 5 点、石器 16 点を併せて図化した。

#### 縄文土器（図53 366～370）

366・367 はやや外傾する深鉢の口縁部である。366 の口縁部内面には横位に 1 条の沈線文が廻ると考える。367 の外面にはわずかに突出する 1 条の突帯文が施されている。368～370 は深鉢の胴部である。368 の内面にはナデ、外面には撫糸文が認められる。369 の外面には縦位と横位に連なる「工」の字状の貼付隆起突帯があり、その間に半裁竹管状工具による 2 条の沈線文が施されている。370 の外面には横位に 3 条の貼付隆起突帯が施されており、369 と同様にその間に半裁竹管状工具による 2 条の沈線文が施されている。369・370 ともに内面はナデ調整である。

#### 弥生土器（図53 371～387）

371～373 はほぼ直口する壺の口縁部である。371 の口唇部外面はあまり突出せず、刻目は認められない。口縁直下には断面三角形の 1 条の刻目突帯を有する。内面はナデ、外面は横位のナデ・斜位のハケ目調整が認められ、煤が付着している。372 は口唇部外面を小さく摘み出し突出させて、口縁直下には 2 条の刻目貼付突帯を有する。内面は横位のナデ、外面は横位のナデ・斜位のハケ目調整が認められる。373 は口縁外面に刻目のある断面台形状の貼付突帯が施され、その直下に 1 条の貼付刻目突帯を有する。内面はナデ、外面は横位のナデ調整が認められる。374～379 は L 字状である壺の口縁部である。口縁部の断面は 374・375・377 が三角形状、376・378・379 は口唇部が凹む台形状である。374・375 の内・外面にはハケ目、また突帯直下の外面には指頭痕が認められる。376 は外傾した口縁部で、推定口径は約 19.9cm である。口縁部内面には指押さえが認められる。379 は胴部から内傾する口縁部である。

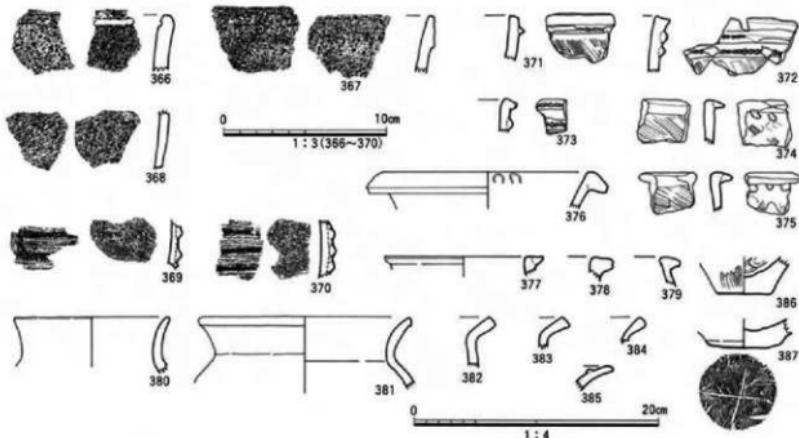


図53 S Z 1 出土遺物実測図 (1)

380は頭部から緩やかに外反する壺の口縁部で、内・外面にはナデ調整が認められる。381・382は「く」の字状、383・384はほぼ逆L字状近くまで外反している壺の口縁部である。381の内・外面は横位のナデ調整で、口唇部には横位のナデ調整による突帯部が認められる。382の内面はナデ、外面はハケ目の上からナデ消しが施され、指頭痕も認められる。383・384はどちらも内・外面ともにナデ調整が認められる。382～384の口唇部はやや肥厚している。386・387は壺の底部である。386の内面にはナデ・指押さえによる調整が認められ、煤が付着している。外面にはミガキ調整が認められる。387の底外面はその一部が黒色に変化しており、ナデ調整の上から明瞭な十字状の線刻が施してある。385は壺の口縁部である。内・外面ともにナデ調整が認められ、内面には1条の突帯が貼り付けられている。

石器 (図54・55 388～400)

388はガラス質安山岩製の石鏃である。片方の脚部を欠損しているが、平面形態は二等辺三角形で、基部形態が凹基式である。凹基の状態はわずかに内湾するタイプと考える。389はチャート製の「用途不明石器」である。石鏃のように細かい剥離調整が施されている。390は黒灰色のチャート製の石匙である。横型で両面に丁寧な調整が施されている。刃部とつまみ部が左右非対称である。391・392は剥片である。どちらとも辺縁には連続する剥離調整が施されている。石材はいずれもホルンフェルスである。393はほ

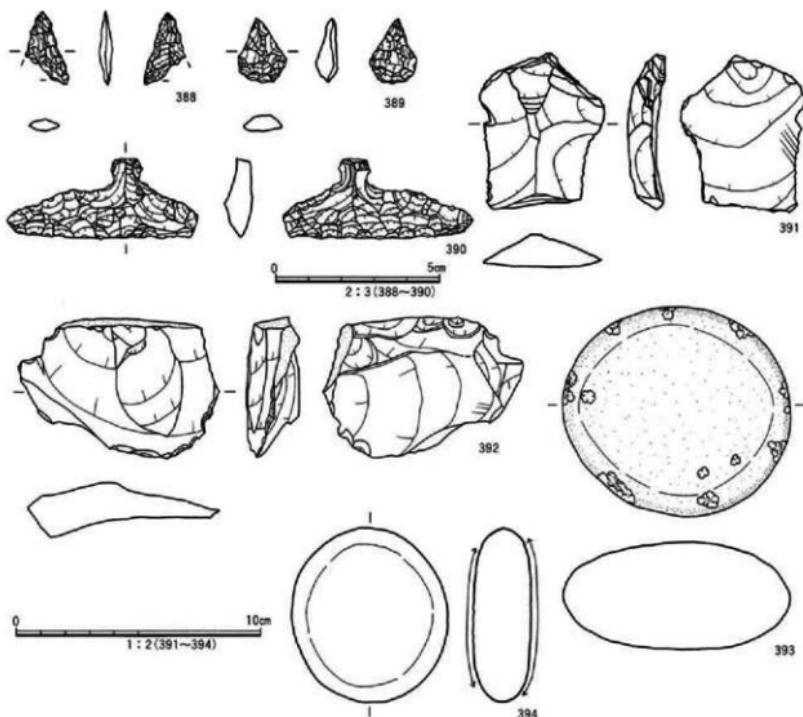


図54 S Z 1 出土遺物実測図 (2)

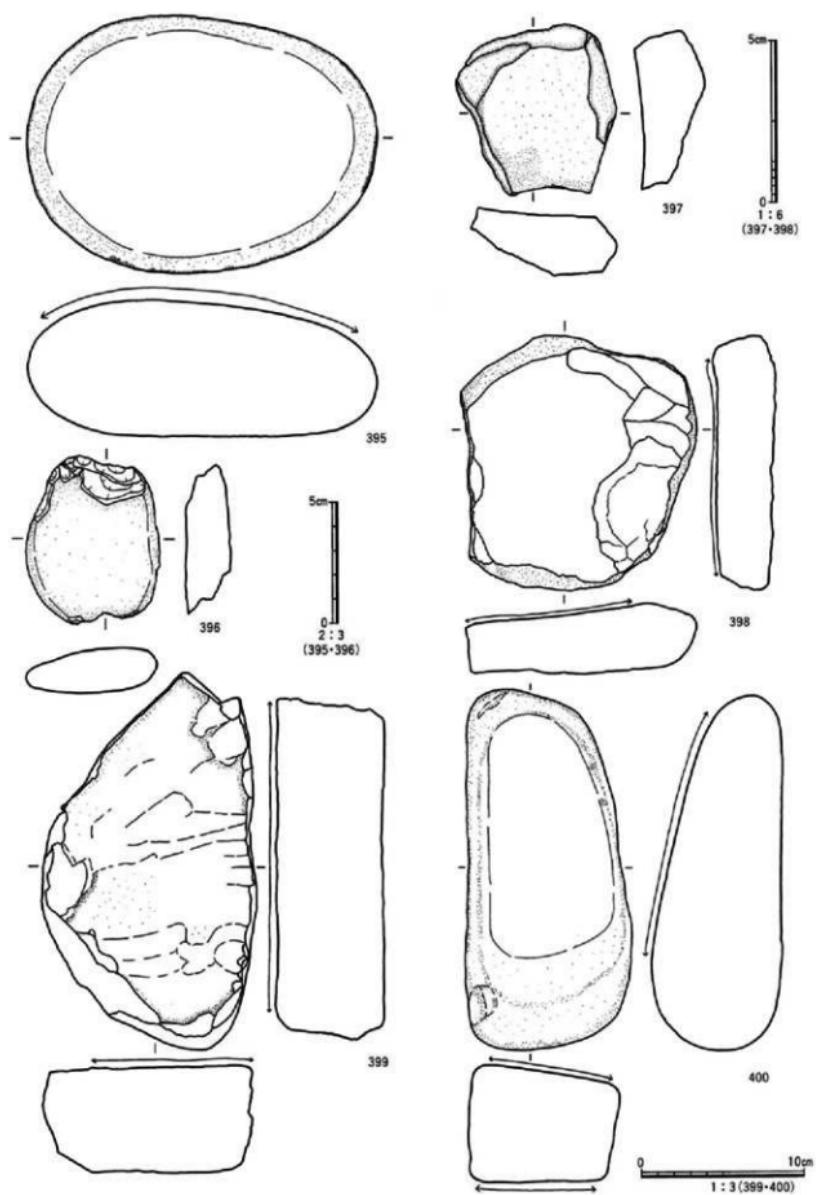


图55 S Z 1 出土遗物实测图 (3)

ほぼ全周縁に敲打痕が残る尾鈴山酸性岩類製の敲石である。394・395は磨石である。平面形態は394が円形、395が梢円形を呈し、どちらも断面形は扁平である。磨痕は394には表裏両面、395には片面のみに認められる。石材については、394は尾鈴山酸性岩類、395は砂岩である。396は砂岩製の石錘である。一部破損を受けているが、長軸方向の打ち欠きが施されている。397～399はどれも尾鈴山酸性岩類製の台石である。398はS Z 1の床面直上で検出した。表面には磨痕が認められる。(図52参照) 400は砂岩製の砥石である。表裏面ともに擦痕が認められる。

### iii) 弥生土器集中部 (図56 371～387)

グリッドC 2付近(Ⅲ層)において、弥生時代中期の土器小片が比較的集中して出土する範囲(約1.5m × 3m)を確認した。(図24参照)しかし、トレンチを掘り、土層断面等の精査を行ったが、遺構として認めるまでには至らなかった。そこで、この弥生土器小片が集中した範囲を「弥生土器集中部」として、出土遺物の取り上げを行った。ここでは、そのうち弥生土器7点、石器1点を図化した。

401～403は、口唇部に刻目が施され、口縁部の下に横位の貼付刻目突帯を有する甕の一群である。口縁部は401・402がほぼ直立、403はやや外傾している。口縁部の刻目貼付突帯の断面形は、401・402は三角形状、403は台形状である。いずれも内・外面ともにナデ調整が施されている。また、402の外面には不明瞭であるが、ハケ目調整が認められ、煤が付着している。404・405は、口唇部の端部が凹むL字状の口縁部を有する甕の一群である。口縁部の断面形はどちらもほぼ台形状である。404は欠損している1条の貼付突帯が確認できる。406・407はどちらも壺の胴部のようである。406は横位に3条の貼付突帯を有する。内面には斜位のハケ目調整が認められる。407の外面には摘み出しによる3条の突帯があり、その直下には横位の櫛描波状文が施されている。408は尾鈴山酸性岩類の剥片である。片側縁部に剥離痕が認められる。

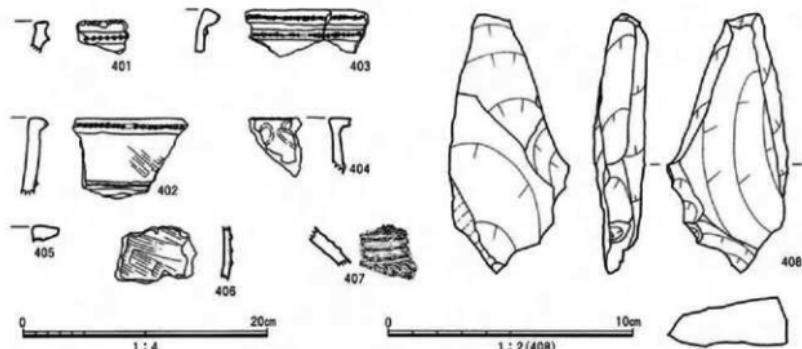


図56 弥生土器集中部出土遺物実測図

## 2 遺物包含層出土の遺物

### i) 土器

遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）からは多くの弥生土器が他の時代のものと混在して出土した。出土した弥生土器は小片のものが非常に多く、接合作業によって器形が分かれる程度までに復元できたものはあまりなかった。しかし、その形態や文様からすると、SA2やSZ1と同時期である弥生時代中期に帰属するものが多かった。ただし、先述した他の遺物同様に、調査区より高位の場所からの流れ込み等で原位置からの出土ではない可能性が高いと考える。

ここでは、出土した弥生土器片を器種と部位を主な着眼点としながらⅠ～Ⅲ類に分類を行った。以下には分類の基準と根拠を示し、特徴のある遺物についてのみ若干の説明を行う。なお、個々の詳細な情報については、弥生土器観察表（表7～10）を参照してもらいたい。

#### 堀

I類：L字状の口縁部を有さない一群である。（図57 409～428）

さらに、口縁の形状等によってA～Dに細分した。

A 口唇部外面を摘み出して突出させ、刻目を施しているもの（409～412・415・419・420・422～424）

それぞれの口縁部は、409～412・415がやや内傾ぎみ、419は外傾、420・422は外反ぎみ、423は内傾しながら立ち上がりっている。409～412・419・422の口縁部上端には凹みが認められ、409・411・412・420・423は2条、410・419・422は1条の貼付刻目突帯を有する。409には刻目突帯の直下に貫通する1個の穿孔も施されている。415の口縁部上端には凹みが認められず、1条の貼付刻目突帯を有する。420も口縁部上端には凹みが認められないが、口唇部の内・外面に刻目が認められる。口縁直下には2条の貼付刻目突帯を有する。424は口縁直下に貼付刻目突帯は認められない。外面には不定方向のハケ目調整が認められ、煤が付着している。この類は下城式系土器に相当すると考える。

B 口唇部外面をほとんど突出させず、刻目を施しているもの（413・416・421・428）

それぞれの口縁部は、413がやや内傾ぎみ、416はほぼ直立、421・428やや外反ぎみである。413の口縁部上端には凹みが認められ、2条の貼付刻目突帯を有する。416の口縁部上端には凹みは認められず、1条の貼付刻目突帯を有する。421は1条の貼付刻目突帯を有し、その直下には斜位のハケ目が認められる。428は口唇部にわずかな刻目と1条の貼付刻目突帯を有する。内面はナデ、外面はハケ目調整が認められ、煤が付着している。

C 口唇部外面をほとんど突出させず、刻目を施していないもの（414・417・418・425）

417には刻目が認められず、1条の貼付突帯を有する。414・418は口縁直下に1条、425は2条の貼付刻目突帯を有する。

D 口縁が「く」の字状に外反して、端部がやや肥厚するもの（426・427）

426は外反する口縁下に1条の貼付刻目突帯を有する。口縁部内面には指頭痕が認められ、内面全体に煤が付着している。外面にはハケ目調整が認められる。427は1条の貼付刻目突帯を有し、その直上にわずかな凹みが認められる。中溝式系土器に相当すると考える。

II類：L字状の口縁部を有する一群である。（図57・58 429～446）

さらに、その口縁部の断面形状によってA～Cに細分した。

#### A 台形状であるもの (429~437)

429~432の口唇部に刻目が認められ、いずれもその直下に1条の貼付刻目突帯を有する。429の内面はナデ、外面はナデ・工具によるナデが施されている。430は口唇部の内面にも刻目があり、内面には横位のハケ目、外面には横位のナデ・斜位のハケ目が認められる。431の内面は横位のナデ・指押さえ、外面は横位のナデ・ハケ目が施されている。432の内面はナデ、外面には横位のナデ・ハケ目が施されている。433~434の口唇部には凹みが認められる。433は他と比べると口縁突出部が小さく、内面には指押さえ痕が認められる。436の胴部には横位に3条の貼付突帯が貼り付けられている。437は436と同類系土器と考える。

#### B 長方形状であるもの (438~440)

438~440の口唇部には凹みが認められる。440の胴部には3条の貼付突帯を有する。

#### C 三角形状であるもの (441~446)

441の口唇部には刻目が施され、内面には横位のナデ・斜位のハケ目、外面には線刻や工具痕が認められ、煤も付着している。442の口縁部の断面は他より鋭く尖った三角形である。口唇部に刻目があり、その直下に1条の貼付刻目突帯を有する。内面にはミガキ・指頭痕、外面にはハケ目調整が認められる。443の内・外面にはハケ目調整が認められる。446の口径は約45cmと推定され、口縁部の直下に1条、胴部に2条の貼付刻目突帯が貼り付けられている。内面にはハケ目・指頭痕、外面には斜・縦位のハケ目が認められる。

### Ⅲ類：頸部から外反している一群である。(図58 447~448)

447の内面には横位のナデ、外面には縦位のハケ目が認められる。口縁直下には1条の刻目ない貼付突帯が貼り付けられている。448の口縁部は欠損しているが、頸部はほぼ直角に折れ曲がっている。

次に、壺などの底部をまとめ、その形態によってA~Cに細分した。(図58 449~461)

#### A 平底であるもの (449~456)

449~454・456は端部が張り出さないものである。449・451・453・454は直線的に、450はやや膨らみながら、452・455・456は直立後にやや外反しながら胴部へ立ち上がるタイプである。454の器壁は比較的厚く、底外面には形成時に付いたと考えられる線状圧痕が認められる。455は端部が少し張り出している。外面には縦位のハケ目調整が認められる。456の外面には横位の指ナデの調整が認められる。

#### B 脚台状の底部であるもの (457~458)

457は内・外面ともにハケ目の上にナデ消しが認められ、内面の一部は黒色に変化している。外面には明瞭な指頭痕が認められる。458の外面には横位の貫通した穿孔が施されている。

#### C 上げ底で端部が張り出さないもの (459~461)

459の外面には植物組織、内部には種子圧痕らしきものが認められる。460の内面にはハケ目の上からナデ、外面にはナデ調整が認められる。461の内面にはナデ、外面には板状工具によるナデ調整が認められる。

次に、壺・高壺など壺以外の土器片をまとめた。(図58 462~465)

462・463ともに壺の頸部である。462の内面にはナデ・ハケ目、外面にはナデ・ミガキ、463の内・外面はともにナデ調整が認められる。464は中空の脚部に円板状の粘土を充填して形成された際に生じた粘

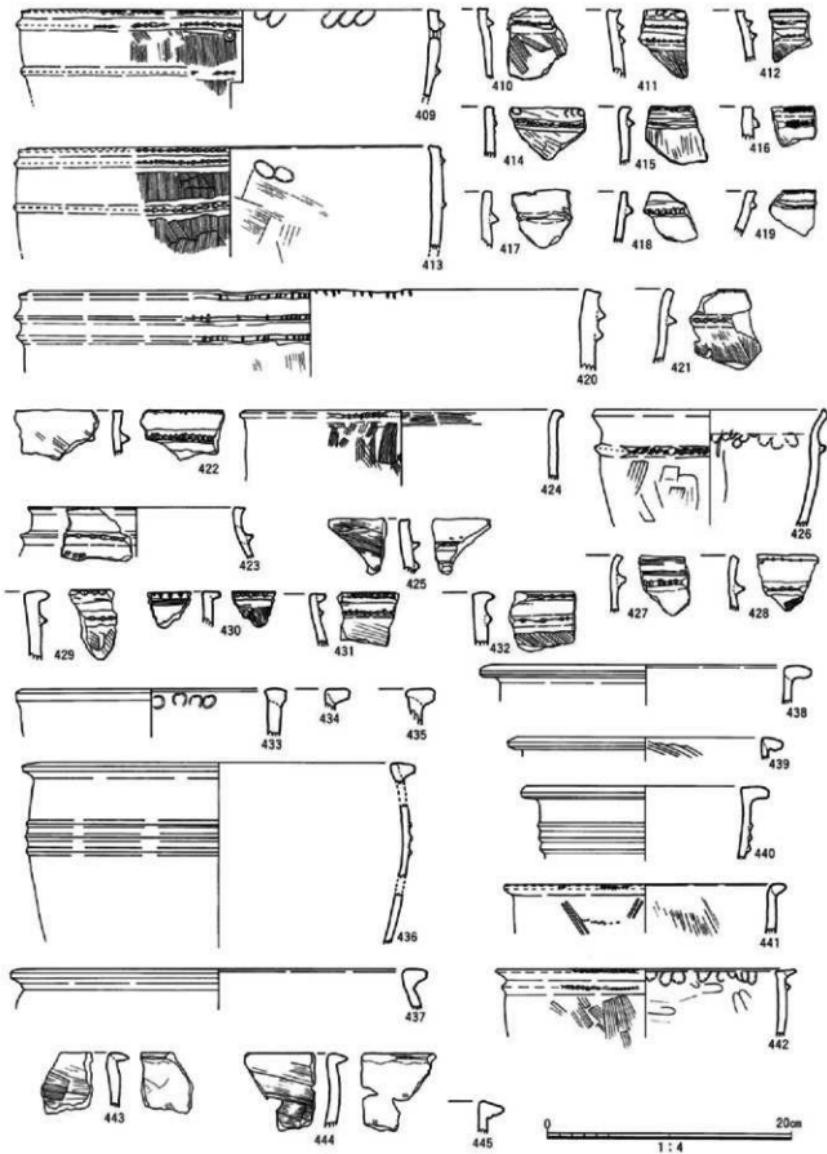


图57 遗物包含层出土遗物实测图 (12)

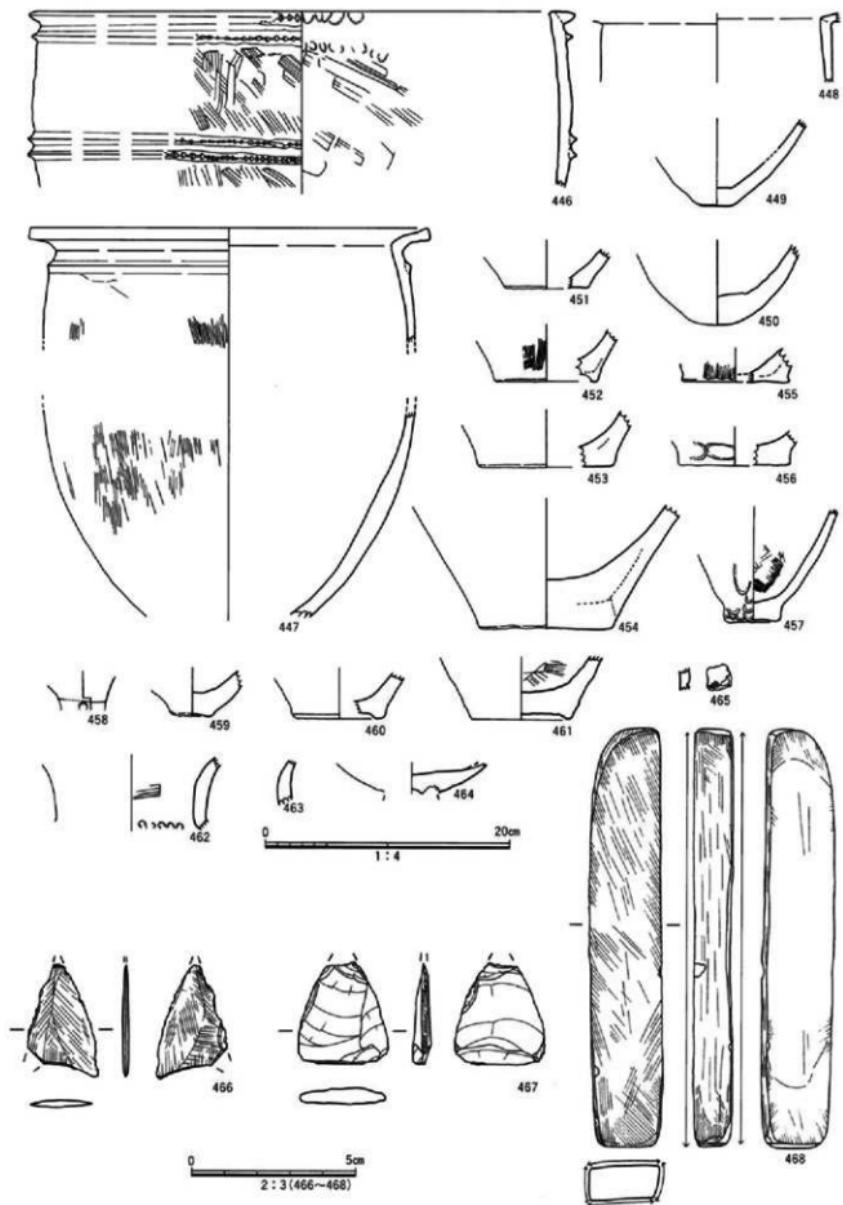


图58 遗物包含层出土遗物实测图 (13)

土の継ぎ目や凹部が残る高杯の杯部である。外面には横位のナデ調整が認められる。465の器種・部位は小片であるため不明であるが、明瞭な種子圧痕が認められる。

ii) 石器遺物 (図58 466~468)

466は緑色凝灰岩製の無茎の磨製石鎌で、基部は四基式である。467は緑色凝灰岩製の磨製石鎌の未完成品と考える。どちらも先端部は欠損している。468は砥石である。天草産の陶石製であり、その形状から大陸系磨製石斧からの転用と考える。

## 第5節 その他の時代の遺物

ここでは、調査区内の遺物包含層等から出土した縄文時代・弥生時代以外の遺物をまとめて掲載する。まず、469~472はその形状と石材の特徴から旧石器時代に帰属するものと考える。469・470はホルンフェルス、471は珪質頁岩、472は流紋岩製の測定片であり、どちらの側辺部にも剥離痕が認められる。また、473~476は古墳時代に帰属する土師皿の底部片である。4点とも内・外面に丁寧な回転ナデが認められる。またどれも未固形であるが、調査区の北西域の盛り土中から遺物包含層(Ⅱ~Ⅲ層)で出土していない須恵器の底部小片3点、遺物包含層(グリッドB 1Ⅲ層)からは近世に帰属すると考えられる石英製の火打ち石1点が出

土した。

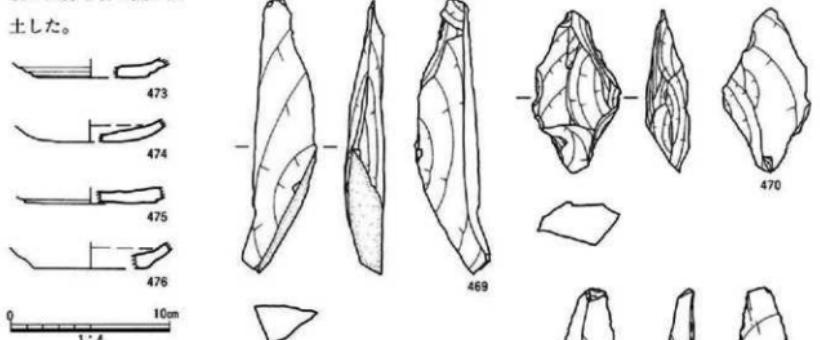


図60 その他の時代の出土遺物実測図(2)

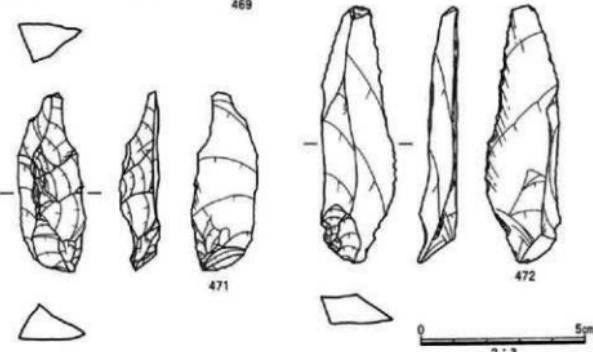


図59 その他の時代の出土遺物実測図(1)

## 第6節 まとめ

本調査では、縄文時代後期及び弥生時代中期の遺構を検出した。また、地形的要因による高位置からの調査区内への流れ込みの可能性が高いと考えられるが、狭小な調査区でありながらも各遺構や遺物包含層から多種多様の土器片や石器類が多く出土した。また、旧石器時代や古墳時代、近世に帰属すると判断できる遺物も少量ではあるが出土した。さらに、何らかの原因で混入した可能性が高いが、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、SC 1 墓土中では $750 \pm 25$ 年BP（ $2\sigma$ の暦年代でAD 1220～1285年）、SC 1 の埋土中では $755 \pm 20$ 年BP（AD 1225～1285年）というほぼ同じ年代値の炭化材が出土した。これらのこととは、当該地域の歴史を解明する上で、貴重な資料となり得ると考える。以下では、今回の赤石遺跡における調査結果を、縄文時代及び弥生時代で若干の考察を加えてながら整理することでまとめとしたい。

### 1 縄文時代

縄文時代では、後期の竪穴住居（SC 1）1軒と中期～後期の土坑（SC 1～SC 11）11基（表4参照）を検出した。また、中期～後期の土器や石器が多く出土した。また、少量であるが、早期（山形押型文など）や晩期（組織痕文など）も少量であるが出土した。以上のことから、この調査区及び周辺では縄文時代の生活が早い時期から始まり、長期にわたり継続していたであろうと推測する。

特に、縄文時代における赤石遺跡の特徴としては、①船元式・春日式系土器や貼付突帯間に工具による沈線文・連続爪形文が施された縄文時代中期に位置する土器の出土、②後期に帰属する竪穴住居（SC 1）、③器種・石材ともに多様性に富む石器類の出土が挙げられる。

表4 土坑計測一覧表（＊は推定値である。）

SC No	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形状比	主な出土遺物	備考
SC 1	*2.70	1.24	1.90	2.18	深鉢	実測図 (1/20) 推載
SC 2	2.10	0.96	0.54	2.19	砥石・深鉢	実測図 (1/20) 推載
SC 3	1.39	1.18	0.24	1.18	深鉢	実測図 (1/20) 推載
SC 4	*2.20	*2.00	0.19	*1.10	剥片・石錘・深鉢	実測図 (1/20) 推載
SC 5	*0.80	*0.60	0.16	*1.43	石核	自然凹み可能性もあり
SC 6	*0.60	*0.50	0.15	*1.20		自然凹み可能性もあり
SC 7	*0.90	*0.70	0.15	*1.29	剥片	自然凹み可能性もあり
SC 8	0.38	0.36	0.10	1.29		自然凹み可能性もあり
SC 9	1.78	*1.66	0.24	*1.07	石錘・磨石・深鉢	実測図 (1/20) 推載
SC 10	1.84	1.50	0.30	1.23	深鉢	実測図 (1/20) 推載
SC 11	1.58	*1.50	0.34	*1.05	石錘・台石・深鉢	実測図 (1/20) 推載

(＊は推定値である。)

①については、縄文時代中期に帰属する堅穴住居など集落本体を形成する明確な遺構は検出されていないが、中期の土器が比較的集中している土坑（SC3など）が存在することから当該期に人々の生活がこの調査区内で展開されていた可能性が考えられる。また、遺物包含層から出土した他の縄文時代中期の土器片は非常に小片ではあったが、激しく表面の摩耗を受けていないことから、本調査区近くに集落本体が存在していたことの可能性も伺わせる。今後は、本調査区周辺だけでなく、近隣の遺跡や船元・春日式土器を多く出土して、縄文時代中期の集落として評価された下耳切第3遺跡（高鍋町）などと関連をさらに考えて必要がある。

②については、堅穴式住居跡（SA1）1軒を検出したが、縄文時代後期・晚期の堅穴住居を検出している近隣の赤石・天神本遺跡との関連を考え、川南町内に広がる丘陵辺縁部での縄文人の生活ぶりを総括していく必要がある。

③については、本調査区から出土した石器は約500点であった。製品と剥片・碎片との接合が認められなかつたため製品製作作業の直接的な復元はできていない。最も多く出土した石器類は剥片（315点）であり、その剥片除く石器を器種別に分類すると、漁労具としての石錐（33点）、狩猟具や武器としての打製石鎌（16点）、土木農耕具としての打製石斧（28点）、食材や道具等の加工工具としての蔽石・磨石類（37点）・台石（10点）・石匙（3点）・凹石（2点）・石皿（1点）などであった。（図61参照）また、すべての石器類を石材別に分類すると、ホルンフェルス（約49.7%）、尾鈴山酸性岩類（約12.2%）、砂岩（12.1%）の順であった。（図62参照）次いで、本遺跡近隣では採取できない黒曜石（8.5%）・ガラス質安山岩（11.9%）が出土した。特に、姫島産黒曜石については、石錐・剥片・チップなど多様な形態で出土した。他の針尾産・腰岳産黒曜石と比較しても高い出土率であった。

以上のように本調査区から出土した石器については、器種・石材とともに多様性に富むという特徴が見られた。これらのことにより、平田川と篠原川という2つの河川に挟まれた南東向きに派生した丘陵辺

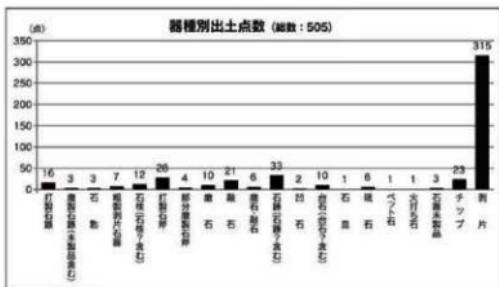


図61 石器類器種別出土点数

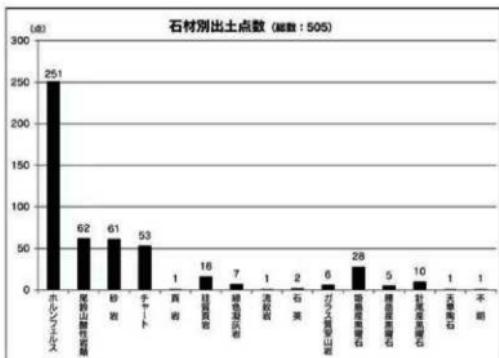


図62 石器類石材別出土点数

縁部に立地した赤石遺跡では、縄文時代から近くの露頭や川原などから比較的容易に採取できるホルンフェルスや尾鈴山酸性岩、砂岩などを巧みに利用した石器を用い、ドングリなどの植物性食材や獸や魚などの動物タンパク質の獲得を営む多様な食生活が送られていたと推測できる。また、遠方にある各石材産地からの石材や製品の搬入等といった直接的な交流だけに限定することはできないが、何らかの交流があった可能性は十分に推し量ることができる。

## 2 弥生時代

弥生時代では、竪穴住居（S A 2）1軒と不明遺構（S Z 1）1基を検出し、各遺構埋土や遺物包含層から弥中期の土器、石器が出土した。竪穴式住居跡 S A 2 は、調査区外に広がる遺構で、すべてを検出することはできなかったが、おそらく床面全周にベッド状の段（幅0.8~1.0m、床面からの高さ0.2m）を伴う長方形プラン（約6m×7m）をもつと考える。不明遺構 S Z 1 は、ほぼ円形プラン（約4.0m×4.5m）を検出することができたが、その性質は最終的に判断することはできなかった。どちらとも遺構埋土から出土した土器に下城式系土器などを比較的多く含むことから、中期に帰属する遺構であると考えた。さらに、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果（S A 2 の炭化材では $2165 \pm 25$ 年BP（BC 360~270, 260~150, 140~110年）、S Z 1 の炭化種実では $2220 \pm 25$ 年BP（BC 390~340, 330~200年）の年代値）によると、2つの遺構は比較的近い時期に利用されていた可能性が高い。遺物包含層（Ⅱ~Ⅲ層）から出土した弥生土器を見ると、中期に位置する下城式系土器・口縁部に断面三角形貼付突帯を有する土器が比較的多く、わずかに後期初頭に位置する在地系の中溝式系土器などが含まれていた。なお、石器については、緑色凝灰岩製の磨製石鎌2点と天草産の陶石製で大陸系磨製石斧を転用したであろうと考える砥石1点が出土した。

以上のことにより、弥生時代の赤石遺跡は、竹笠類をはじめ、スキ属やチガヤ属なども生育する比較的開かれた環境下にあり、瀬戸内地方をはじめ、他地域の文化の影響を何らかの形で受けながら、近隣に分布する照葉樹林から豊かな植物性食材や動物タンパク質などを獲得していた人々の生活が推測できる。

今後は下城式や逆L字口縁をもつ壺を検出した大内原遺跡、後期の竪穴住居と下城式土器を検出した赤石・天神本第1遺跡や中ノ迫第1遺跡など近隣の遺跡との関係を分析し、弥生時代における尾鈴山系から派生する丘陵辺縁地で展開されていた人々の生活の広がりの復元をしていく必要がある。

## 引 用 ・ 参 考 文 献

- 石川悦雄1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（M k. II）」『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会
- 大阪府弥生文化博物館2007「日向・薩摩・大隅の原像－南九州の弥生文化」大阪府立弥生文化博物館図録87
- 金丸武司2004「宮崎における純文時代早期前半期の土器群－別府原式土器の設定－」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
- 川南町教育委員会1983『川南町史』
- 1983『川南町の埋蔵文化財 道路詳細分布調査報告書』
- 鹿児島県埋蔵文化財センター 2007『上木瀬遺跡 純文時代中期後半から弥生時代編』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
第113集
- 本崎康弘1998「中原式土器について」『九州純文土器編年の諸問題』九州純文研究会貿易陶磁研究会
- 柴畠光博1997「春日式土器二例」『宮崎考古』第15号 宮崎考古学会
- 2000「中瀬式土器の再検討－宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて－」『第39回宮崎考古  
学会例会資料』
- 新東見一1989「早期九州貝殻文土器」『純文土器大観1』小学館
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000『右賀ケ追道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第21集
- 2002『鹿屋市道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第53集
- 2005『東九州自動車道（都農～西都間）関流埋蔵文化財発掘調査概要報告書V』宮崎県埋蔵文化財センター  
報告書第111集
- 2006『虚空蔵免道路 赤石・天神本道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第122集
- 2006『天神本第2道路 大内原道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第123集
- 2006『下耳切道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第125集
- 2006『中ノ迫第3道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第144集
- 2007『中ノ迫第1道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第142集
- 2008『中ノ迫第2道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第167集
- 2008『市納上第2道路』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第170集

表5 繩文土器観察表(1)

河内 流域	遺物 記号	種類	器種	部位	出土層 と場	剖面法 (mm)	手形・調節・支輪等の特徴			色 調	焼成	胎土中に含まれる粒の粒度	備考
							内面	外面	内面				
100 6 2	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1	粗土	*	ナデ(新・横底)	直角底+四脚の 追加脚、追加輪	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	2m以下の灰白・浅黃 褐色	内面: 扇ナデ キヤリバー状口縁
101 9 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1a	粗土	*	ナデ(横底)	U字状の沈縫文	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	2m以下の灰白・明褐色 黒褐色	内面: 扇ナデ キヤリバー状口縁(後述 38)
102 6 1	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1b	粗土	*	ナデ(横底)	ナデ(新位)	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	2m以下の灰白・浅黄色 褐色	内面: 扇ナデ キヤリバー状口縁
103 5 1	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1b	粗土	*	ナデ(横底)	ナデ(新位)	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	1m以下の墨・灰・乳白色 褐色	内面: 扇ナデ キヤリバー状口縁
104 7 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1a	粗土	*	ナデ(新・横底)	ナデ(新位)	にない・滑	黒褐色	良好	3m以下の墨・灰・茶・ 乳白色	内面: 扇ナデ キヤリバー状口縁
105 4 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1a	粗土	*	ナデ	ナデ(新・横底)	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	2m以下の灰白・灰褐色	内面: 沈縫(1巻) 外面: 優
106 2 8	縄文 土器	深鉢	口縁部~ 側面部	SA1	粗土	27.2	ナデ	ナデ(新位・横底)	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	3m以下の灰白・明褐色 褐色・光沢無明瞭	内面: 扇ナデ 外面: 黑色化
107 11 1	縄文 土器	深鉢	口縁部~ 側面部	SA1	粗土	30.2	ナデ(風化)	ナデ(新・横底)	にない・滑	黒褐色	良好	0.5~2mの灰白・浅黃 褐色・褐色化	内面: 扇ナデ 外面: 優
108 3 20	縄文 土器	深鉢	口縁部~ 側面部	SA1	粗土	*	ナデ	ナデ(新・横底)	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	3m以下の灰白・浅黃褐色 褐色・光澤無明瞭	内面: 扇ナデ 外面: 優
109 10 -	縄文 土器	浅鉢	口縁部	SA1d	粗土	*	ミガキ(横底)	ミガキ(横底)→北 陸縫文(3巻・横底)	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	1m以下の灰白・灰褐色 褐色	内面: 扇ナデ 外面: 優
110 104 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC1	粗土	*	丁字なナデ(新・ 横底)	丁字なナデ(新・ 横底)	にない・滑	にない・黄 褐色	良好	2m以上の灰白・灰褐色 褐色	内面: 沈縫(1巻) 外面: 優
115 106 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC2	粗土	*	ナデ(横底)・工具に よる沈縫文	沈縫文+ナデ(横底)	滑	滑	良好	3m以下の灰白・2m以下の 褐色	内面: 斜肩縫有帶(1 巻)
117 107 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC3	粗土	*	縄文	縄文+形状工具に よる沈縫文	にない・滑	浅黃褐色	良好	1m以下の乳白・灰褐色	内面: 扇ナデ 外面: 優
118 109 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC3	粗土	*	縄文	縄文+形状工具に よる沈縫文(2~3 段・横・横底)	にない・滑	滑	良好	1m以下の乳白・灰褐色	内面: 扇ナデ 外面: 黑茶?
119 110 7	縄文 土器	深鉢	側面部	SC3	粗土	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	滑	滑	良好	1mの白・褐・暗褐色	内面: 扇ナデ 外面: 優
120 111 8	縄文 土器	深鉢	側面部	SC3	粗土	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	滑	赤褐色	良好	1mの乳白・褐・暗褐色	内面: 扇ナデ 外面: 優
121 112 4	縄文 土器	深鉢	側面部	SC3	粗土	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	滑	明褐色	良好	1mの白・褐・暗褐色	内面: 扇ナデ 外面: 優
122 113 2~3~ 5~6	縄文 土器	深鉢	側面部	SC3	粗土	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	滑	滑	良好	3mの灰・白・褐色柱	内面: 扇ナデ 外面: 優
123 115 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC4	粗土	*	赤灰文?	赤灰文?(風化)	にない・滑	にない・滑	良好	2m以下の灰白・浅黃褐色 褐色	内面: 扇ナデ 外面: 優
124 114 5~6	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC4	粗土	*	三月によるナデ?	三月によるナデ?	明褐色	明褐色	良好	4m以下の灰白・灰褐色	内面: 扇ナデ 外面: 優
125 116 7	縄文 土器	深鉢	側面部	SC4	粗土	*	ナデ(横底)?	ナデ(横底)?	滑	滑	良好	3m以下の灰白・灰褐色	内面: 優
126 211 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC4	粗土	*	ナデ	組織板	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	3m以下の灰白・灰褐色	内面: 優
129 229 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC9	粗土	*	ナデ	沈縫文(3巻)	にない・滑	にない・滑	良好	4mの灰白・褐色・1m以下 の墨・光澤無明瞭	内面: 扇ナデ キヤリバー状口縁
130 119 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC9	粗土	*	ナデ	形状工具による成 形狀文	にない・滑	にない・黄 褐色・黒褐色	良好	1m以下の各相・灰褐色	内面: 優
131 121 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC9	粗土	*	ナデ	縄文	滑	暗灰褐色	良好	3mの灰褐色・3m以下の 褐色・乳白・赤褐色柱	内面: 優
132 122 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC10	粗土	*	工具によるナデ?	ナデナデ?	明褐色	滑	良好	1mの灰白・光澤無明瞭	内面: 外面: 優 外縫口外: 優
133 123 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC10	粗土	*	工具によるナデ?	ナデナデ?	滑	滑	良好	1m以下の白・光澤無明瞭	内縫口外: 優
134 124 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC10	粗土	*	滑ナデ? 振押しき	縄文	暗褐色	暗褐色	良好	1m以下の白・光澤無明瞭	章孔(1巻)真通? あり
135 222 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC10	粗土	*	ナ	組織板	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	4m以下の灰白・2m 以下の淡褐色柱	内面: 優
136 125 -	縄文 土器	深鉢	底部	SC10	粗土	底壁 6.5	不明(風化)	鶴ナデ?	滑	滑	良好	3m以下の灰白柱	摩耗大
137 127 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC11	粗土	*	ナデ	柱付非形文に工具によ る沈縫文・追加脚形	にない・滑	滑	良好	2m以下の乳白色柱	内面: 優?
138 126 -	縄文 土器	深鉢	側面部	SC11	粗土	*	ナデ(横底)	組織文(縫合)	にない・滑	滑	良好	1m以下の乳白色柱	内面: 優?
139 128 3~5	縄文 土器	深鉢	側面部	SC11	粗土	*	形状工具? による成 形狀文	然立文	にない・黄 褐色・灰褐色	にない・黄 褐色	良好	2m以下の白・乳白色柱 褐色を有する柱	内面: 優
140 142 -M	縄文 土器	深鉢	口縁部	C8	■	14.2	ナデ(横底)	沈縫文・沈縫文(3巻・ 横底)	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	0.5mm以下の乳白色柱	キヤリバー状口縁
151 148 29	縄文 土器	深鉢	口縁部~ 側面部	C8	■	*	ナデ	沈縫文? →沈縫文	にない・黑 褐色	にない・黄 褐色	良好	4m以下の灰白・褐色・1m 以下の各相・灰褐色	キヤリバー状口縁
152 152 -	縄文 土器	深鉢	側面部	B3	■	*	ナデ	縄文・沈縫文	滑	滑	良好	3m以下の灰白柱	内面: 優?
153 155 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	T1	■	*	ナデ	沈縫文(縫合)→押打 縫合	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	2m以下の白・乳白色柱 褐色を有する柱	内面: 優
154 131 59~60	縄文 土器	深鉢	口縁部	E2	II	16.4	ナデ(風化)	柱付非形文による沈 縫文? →追加脚形	暗褐色	明赤褐色	良好	1m以下の灰白柱	内面: 優
155 132 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	T8	-	*	ナデ	沈縫文(2巻)	明赤褐色	明赤褐色	良好	3m以下の白・乳白色柱	内面: 優
156 138 -	縄文 土器	深鉢	口縁部	T3	II	*	ハケナ? →(斜縫)	沈縫文(3巻)	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	3m以下の白・乳白色柱 褐色を有する柱	内面: 優
157 138 30	縄文 土器	深鉢	口縁部	D0	■	*	ナデ	沈縫文(2巻)	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	1m以下の灰白柱	内面: 優
158 139 -H	縄文 土器	深鉢	口縁部	D3	■	*	ナデ	沈縫文(2巻)	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	1m以下の灰白柱	内面: 黑・内面: 黄褐色
159 149 -H	縄文 土器	深鉢	口縁部	C3	■	*	ナデ	沈縫文(1巻+追加 横底)	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	1m以下の灰白柱	内面: 黑・内面: 黄褐色
160 143 37	縄文 土器	深鉢	口縁部	C3	■	*	ナデ(横底)	平行沈縫文(4巻) ナデ	にない・黄 褐色	にない・黄 褐色	良好	2m以下の淡黃・灰・灰 褐色柱	内面: 優
161 141 -H	縄文 土器	深鉢	口縁部	T14E	-	15.1	ナデ(横底)	管状工具による追 加脚形文	にない・滑	滑	良好	1m以下の乳白色柱	内面: 優

表 6 繩文土器觀察表 (2)

河内流域	遺物名	種類	器種	部位	出土層	地質	剖面法 (mm)	手造・調製・支輪等の特徴	色 調	焼成	胎土中に含まれる粒の割合	備考	
								内面 外面	内面 外面				
162	135	26	縄文 土器	深鉢	口縁部	B3	II	*	ナデ (横状)	押引文 (横位)	黒	黒好	2mm以下の茶褐色・黑色化色
163	145	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	C3	II	*	縄文による漁獲荷 住文 (斜位) ナデ	波綱文 (II系) (風化 後)	にぶい 黄 褐	黒好	1~3mmの茶褐色・黒・白色 光沢金色化
164	137	29	縄文 土器	深鉢	口縁部	C4	III	*	ナデ (横状)	波綱文 (3系・複位)	にぶい 黄 褐	黒好	2mm以下の茶褐色・黑色化色 光沢金色化
165	167	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	D4	II	*	ナデ	波綱文 (2系)	にぶい 黄 褐	黒好	1~3mmの茶褐色・黒・白色 光沢金色化
166	133	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	B2	II	*	ナデ	波綱文 (山形狀)	明黄褐	明黄褐	1mm以下の茶褐色・1mm 以下の白色
167	134	3	縄文 土器	深鉢	口縁部	D3	II	*	当ナデ	ミガキ・波綱文	にぶい 黄 褐	黒好	2mm以下の茶褐色・灰褐色 乳白色化
168	165	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	D3	III	*	波綱文 (1系) ナデ	波綱文 (2系)	にぶい 黄 褐	黒好	3mm以下の茶褐色 1mm以下の白色化
169	151	一紙	縄文 土器	深鉢	脚部	C3	II	*	ナデ	波綱文	にぶい 黄 褐	黒好	1mm以下の茶褐色・灰褐色 灰褐色化
170	153	75	縄文 上器	深鉢	脚部	D4	III	*	ナデ	ナデ割れによる特徴 工具による特徴	にぶい 黄 褐	黒好	4mm以下の茶褐色
171	165	39	縄文 土器	深鉢	口縁～ 脚部	C4	III	口縁 25.4	ナデ	ナデ ミガキ?	橙	淡黄	2mm以下の乳白色化
172	159	35	縄文 土器	深鉢	口縁部	D3	II	*	丁寧なナデ	ミガキ (風化気味)	にぶい 黄 褐	黒好	1mm以下の茶褐色 (1系) 2mm以下の茶褐色 (2系)
173	160	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	T10W	-	*	工具によるナデ→ナデ	工具によるナデ→ナデ	にぶい 黄 褐	黒好	2mm以下の茶褐色化 乳白色化
174	161	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	T10E	-	*	ナデ	ナデ (横状) 工具によ るナデ (斜位) ?	にぶい 黄 褐	明黄	1mm以下の茶褐色・黒・乳 白色化
175	162	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	C4	II	*	ナデ	ナデ	赤	良好	2mm以下の淡黄色
176	163	58	縄文 土器	深鉢	口縁部	B2	II	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	橙色	橙色	2mm以下の浅黄色化
177	190	85	縄文 土器	深鉢	口縁部	C2	II	*	器ナデ	器ナデ	橙	橙	2mm以下の茶褐色化 乳白色化
178	191	22	縄文 土器	深鉢	口縁部	C1	III	*	ミガキ (風化気味)	ミガキ	にぶい 黄 褐	良好	細かな淡黄色・褐・透明感 草木 (真道) あり
179	178	一紙	縄文 上器	深鉢	口縁部	C3	III	*	貝殻骨灰文	貝殻骨灰文	にぶい 黄 褐	良好	1~2mmの茶褐色・黒・乳 白色化
180	195	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	T5	III	*	当ナデ	ナデナデ (末貫通) 明黄褐	橙	良好	3mm以下の茶褐色化
181	158	一紙	縄文 上器	深鉢	脚部	C3	II	*	ナデ	ナデ・剪支文? ハカリ等?	にぶい 黄 褐	良好	3mm以下の半透明感 輪辺青帯 (1系)
182	144	一紙	縄文 上器	深鉢	口縁部	T10W	-	*	貝殻骨灰文	ナデ+縄文による 波綱文	にぶい 黄 褐	良好	3mm以下の茶褐色化 輪辺青帯 (2系)
183	168	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	B3	II	*	貝殻骨灰文	ナデ	波綱文	にぶい 黄 褐	2mm以下の茶褐色化 乳白色化
184	183	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	B3.1 15.4 C1	II	*	丁寧なナデ ミガキ?	セラフ文	にぶい 黄 褐	良好	3mm以下の茶褐色化 乳白色化
185	196	一紙	縄文 上器	深鉢	口縁部	D4	III	*	ナデ	ナデ (風化気味)	にぶい 黄 褐	良好	1mm以下の茶褐色化
186	203	一紙	縄文 土器	深鉢	脚部	T2E	II	*	貝殻骨灰文	貝殻骨灰文	にぶい 黄 褐	良好	3mm以下の茶褐色化 乳白色化
187	169	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	C2	-	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	オリーブ 黒	良好	3mm以下の茶褐色化 乳白色化
188	170	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	T2E II	*	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	にぶい 黄 褐	良好	3mm以下の茶褐色化 乳白色化
189	164	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	D3	III	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	赤	赤褐色	良好
190	187	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	C2	III	*	ナデ	ナデ 工具痕?	黒褐	黒褐	1mm以下の茶褐色・乳白色化
191	174	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	T14W	-	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	黒褐	黒褐	3mm以下の淡黄色化
192	175	175	一紙	縄文 土器	深鉢	C4	III	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	暗赤褐	赤褐	3mm以下の褐色化
193	175	39	縄文 土器	深鉢	口縁部	B2	II	*	ナデ 指捺え?	工具によるナデ?	明黄褐	橙	2mm以下の灰白色
194	179	5	縄文 土器	深鉢	口縁部	C4	II	*	ナデ (横状)	板状工具によるナ デ (横位)	にぶい 黄 褐	良好	3mm以下の茶褐色・黒・乳 白色的化
195	182	28	縄文 土器	深鉢	口縁部	D3	II	*	ナデ? (風化50%)	工具によるナデ (斜位)	赤	赤	1mm以下の灰白・光沢通 明化
196	181	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	T2E II	*	*	工具によるナデ?	工具によるナデ?	暗赤褐	暗赤褐	1mm以下の茶褐色・乳白色化
197	180	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	C3	II~III	口縁 20.0	工具によるナデ?	工具によるナデ?	にぶい 黄 褐	良好	2mm以下の灰白色
198	157	一紙	縄文 上器	深鉢	脚部	C1	盛上	*	工具によるナデ?	山形押文	赤褐	良好	2mmの茶褐色
199	206	一紙	縄文 土器	深鉢	脚部	B1	II	*	当ナデ	波綱文	にぶい 黄 褐	良好	3mm以下の茶褐色化
200	207	一紙	縄文 土器	深鉢	脚部	T14W	-	*	ナデ (横状)	波綱文	黄褐	黄褐	1mm以下の茶褐色・乳白色化 乳白色化
201	204	54	縄文 土器	深鉢	脚部	C3	III	*	当ナデ	波綱文?	暗赤褐	明赤褐	4mm以下の茶褐色化
202	208	14	縄文 土器	深鉢	脚部	C3	II	*	当ナデ	波綱文?	暗赤褐	明赤褐	2mm以下の茶褐色化
203	166	3	縄文 土器	深鉢	口縁部	B2	II	*	ナデ	ナデ	にぶい 黄 褐	良好	2mm以下の茶褐色化
204	184	一紙	縄文 土器	深鉢	口縁部	D4	III	口縁 19.8	ナデ (横状)	ナデ (横位)	にぶい 黄 褐	良好	2mm以下の茶褐色化

表7 繩文土器觀察表(3)

河内	流域	遺物名	種類	器種	部位	出土層	標定法 (cm)	手造・調製・支輪等の特徴 内面	色調 外面	焼成	胎土中に含まれる粒の割合	備考			
205	185	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	T8	* 丁寧なナガエ 1.ギモキ	丁寧なナガエ 1.ギモキ?	に高い樹脂	良好	3mm以下の砂粒、に高い樹脂色、微細な光沢感	内・外面部：黒化色		
206	199	35	縄文	土器	深鉢	D4	Ⅲ	* ミガキ(黒皮)→ナ ギモキ	ミガキ(黒皮)→ナ ギモキ	灰黄褐色	良好	2mmの乳白色粒、3mmの白い砂粒、乳白・光沢感、白色粒	外面部：塗		
207	201	68	縄文	土器	深鉢	D4	Ⅲ	* ミガキ(黒皮)	ミガキ(黒皮)	灰黄褐色	良好	1mmの淡褐色・褐色粒			
208	200	一括	縄文	土器	深鉢	胴部	T11S	* 丁寧なナガエ	丁寧なナガエ(黒皮) →ナギモキ(黒皮)	に高い樹脂 樹脂	良好	1~2mmの灰・黒・淡黄・乳白色粒			
209	189	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	T8	* 竹管状工具による 通続刺突文 ナギモキ	ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	陶器上にによるナギモキ →ナギモキ(黒皮)	陶器上にによるナギモキ →ナギモキ(黒皮)		
210	190	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	C2	Ⅱ	* ナギモキ	ナギモキ	明黄褐色	良好	5mmの黒・灰・乳白・光沢 黒化色粒、4mmの白色粒	13回上端部：竹管状工具 による通続刺突文	
211	146	1	縄文	土器	深鉢	口縁部	C4	Ⅲ	* ナギモキ	ナギモキ	灰黃褐色	良好	2mm以下の乳白色粒		
212	156	一括	縄文	土器	深鉢	胴部	B2	Ⅲ	* 板状工具によるナ ギモキ	板状工具によるナ ギモキ	褐色	良好	1mm以下の乳白色粒		
213	209	一括	縄文	土器	深鉢	底部	C3	Ⅱ	* ナギモキ	ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	5mmの底部色絵、2mm以下 の淡褐色	外面部：塗	
214	220	一括	縄文	土器	深鉢	胴部	C3	Ⅱ	* ナギモキ	ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	3mm以下の乳白色粒、2mm 以下の淡褐色		
215	223	一括	縄文	土器	深鉢	底部	T14W	* ナギモキ	ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	4mm以下の乳白色粒、2mm 以下の乳白色粒			
216	262 61-55	縄文	土器	深鉢	側面	D3	Ⅲ	底模 具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	明赤褐色、黑褐色 →ナギモキ	良好	2mm以下の灰・黒・に高い 樹脂、乳白・光沢感	上げ底		
217	271	一括	縄文	土器	深鉢	底部	D4~ D3	7.5	* ナギモキ	ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	1mm以下の浅褐色・灰・白 色	上げ底	
218	280	38	縄文	土器	深鉢	底部	C4	Ⅲ	底模 具設 5.6	ナギモキ(風化気味)	丁寧なナギモキ	後赤褐色・灰 に高い樹脂 樹脂	良好	4mm以下の乳白色粒、2mm 以下の乳白色粒	上げ底
219	277	61	縄文	土器	深鉢	底部	B2	Ⅲ	* ナギモキ	ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	3mm以下の灰・白・黒・現 淡褐色、光沢感	上げ底 多角形底部?	
220	279	一括	縄文	土器	深鉢	底部	C2	Ⅲ	* ナギモキ	ナギモキ(黒位)	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・黒・現 淡褐色、後赤褐色		
221	172	21	縄文	土器	深鉢	底部	B3	Ⅲ	口徑 15.9	不明(風化)	不明(風化)	良好	3mm以下の浅褐色・灰・白 色	内面部：塗	
222	123	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部 側面	D3	Ⅲ	ナギモキ(黒位)	ナギモキ	橙	良好	3mm以下の灰・白・現 淡褐色	外面部：塗	
223	197	縄文	土器	浅鉢	口縁部	C1	底土	*	ナギモキ	ナギモキ	赤褐色	良好	2mm以下の赤褐色・白・現 淡褐色		
224	202	一括	縄文	土器	深鉢	B2	Ⅲ~Ⅳ	* ナギモキ(風化)	ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	1mmの灰・白・黒・現 淡褐色			
225	226	一括	縄文	土器	片持	-	C2	Ⅲ	* ナギモキ(風化)	縄文	橙	良好	1mmの灰・白・黒・現 淡褐色		
281	22~31	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	*	ナギモキ	ナギモキ(底部) →ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	4mm以下の灰・白・黒・現 淡褐色、後赤褐色	キャリパー状口縁	
282	29	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* 具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	ナギモキ(鉄鉢)	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・に高い 樹脂		
283	36	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* 具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	ナギモキ(鉄鉢)	に高い樹脂 樹脂	良好	1.5mm以上の現・暗・灰 色		
284	30	23	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* 沈縄文(鉄鉢) 具設各 痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	3mm以下の灰・白・現 淡褐色		
285	31	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2x	粗土	* 具設各痕灰(鉄 鉢) →ナギモキ	具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	微細な通明・光沢感	
286	33	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* 具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	細出し帯帶	
287	177	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2b	粗土	* 具設各痕灰によるナ ギモキ(鉄鉢) →ナギモ キ	具設各痕灰(鉄鉢) →ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	底部口縁状	
288	28	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2d	粗土	* ナギモキ(底部)	ナギモキ(底部)	に高い樹脂 樹脂	良好	3mm以下の灰・白・に高い 樹脂		
289	166	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* 沈縄文(鉄鉢) →ナギモ キ	ナギモキ(鉄鉢) →ナギモ キ	に高い樹脂 樹脂	良好	1mm以下の灰・白・現 淡褐色	口縁上端部：鉄目	
290	149	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* ナギモキ	沈縄文	橙	良好	4mm以下の沈縄文	胎身突起	
291	27	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2d	粗土	* ナギモキ(鉄鉢)	ナギモキ(鉄鉢)	灰褐色 灰褐色	良好	2.5mm以下の灰・白・現 淡褐色		
292	37	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* ナギモキ(鉄鉢)	ナギモキ(鉄鉢)	灰褐色 灰褐色	良好	2mm以下の明褐色・灰・白 色	外面部：塗・黒化色	
293	35	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2b	粗土	* ナギモキ	ナギモキ(鉄鉢)	に高い樹脂 樹脂	良好	1.5mm以下の灰・白・現 淡褐色		
294	194	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	Sa2a	粗土	* ナギモキ	ナギモキ	明赤褐色	良好	4mm以下の明褐色		
295	23	一括	縄文	土器	深鉢?	口縁部?	Sa2a	粗土	* ナギモキ(鉄鉢) →ナギモキ	ナギモキ(鉄鉢) →ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	微細な光沢感	
296	24	一括	縄文	土器	深鉢?	口縁部? ペッカ	Sa2c	粗土	* 背光模(深・鉄鉢) ナギモキ	背光模(深・鉄鉢) ナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	1.5mm以下の灰・白・現 淡褐色		
297	25	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部 底部	Sa2b	粗土	* ナギモキ(鉄鉢) →ナギモキ(風化)	ナギモキ(鉄鉢) →ナギモキ(風化)	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色		
298	65	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	S21b	粗土	* ナギモキ(底部)	明赤褐色	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	内面部：沈縄(1条・鉄鉢)		
299	85	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	S21b	粗土	* ナギモキ(底部)	美帶	灰褐色	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	口縁部：四凸 口縁部：扁帶	
300	87	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	S21c	粗土	* ナギモキ	然赤文	に高い樹脂 樹脂	良好	4mm以下の灰・白・現 淡褐色		
301	89	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	S21b	粗土	* ナギモキ	ナギモキによるナギモキ によるナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	胎身飛出帶(縦・横)	
302	88	一括	縄文	土器	深鉢	口縁部	S21c	粗土	* ナギモキ	ナギモキによるナギモキ によるナギモキ	に高い樹脂 樹脂	良好	2mm以下の灰・白・現 淡褐色	胎身隆起帶(縦・横)	

表 8 弥生土器觀察表 (1)

河内 3m 上27m	遺物 件数	種類	部位	出土層 位置	被定名 式(?)	手造・調滑・支輪等の特徴		色 調	焼成	胎土に含まれる粒の割合	備考		
						内面	外面						
296 57 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2c ペッド 粗土	＊ ナデ (調・横位)	ナデ (調・横位)	明治局 横	灰好 灰・白色粒	4mm以下の灰黄・灰白・灰 褐色・米沢透明粒	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)			
299 56 66	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ	ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	4.5mm以下の灰白・灰 褐色・米沢透明粒	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)				
300 61 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa3c 粗土	＊ ナデ	ナデ (調・横位)	灰 粒	灰好	2mm以下の灰・白・灰・灰 白色粒、無鉛光沢透明粒	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)			
301 62 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ	ナデ (調・横位)	灰 粒	灰好	4mm以下の灰白・灰 白色粒	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)			
302 64 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa3d 粗土	＊ ナデ	丁寧なナデ (横位) ミガキ (斜位)	灰 粒	灰好	2.5mm以下の灰白・灰 褐色・光沢透明粒	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)			
303 65 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ	ナデ (横位)	灰 粒	灰好	2mm以下の灰・白・灰 褐色	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)			
304 63 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ	ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	2mm以下の灰・灰・灰 褐色・光沢のある透明粒	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)				
305 40 32	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	B2 II	口縁 23.0	押さえ ナデ	ハケ目 (縫位)	粒	に赤い粒 灰好	4mm以下の灰白・灰褐色 3mmの光沢灰・灰黄・透明 外面: 灰	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻) 外面: 灰		
306 28 7	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2c ペッド 粗土	＊ 押さえ ナデ	ハケ目 (縫位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)		
307 25 一括	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2c ペッド 粗土	＊ ナデ	ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	2mm以下の灰・白・灰 褐色・無鉛光沢透明	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)		
308 55 16	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2c 粗土	＊ ナデ (調・斜位)	ハケ目 (斜・横位)	に赤い粒 灰好	4mm以下の灰白・灰褐色 2mmの光沢灰・灰黄・透明 外面: 灰	4mm以下の光沢透明・灰 褐色	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)			
309 59 一括	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2b 粗土	＊ ハケ目 (縫位) ナデ (横位)	ハケ目 (縫位) ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)		
310 49 一括	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2c ペッド 粗土	＊ ナデ (横位) ナデ	ナデ (横位) ナデ	明治局 横	粒	良好	L字型口縁 胎土削り突帯 (1巻)			
311 54 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ (横位) ナデ	ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰・灰 褐色・無鉛光沢透明	L字型口縁 胎土削り突帯 (1巻) 内: 灰		
312 51 23- 一括	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2d 粗土	＊ ナデ	ハケ目 (縫位) ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	L字型口縁 胎土削り突帯 (1巻)		
313 52 一括	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2b 粗土	＊ ナデ (横位) ナデ (風)	ナデ (横位) ナデ (風)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (1巻)	に赤い粒 灰好	2mm以下の灰・白・灰 褐色・無鉛光沢透明	胎土削り突帯 (1巻)		
314 53 57	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ	ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	L字型口縁		
315 58 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2c 粗土	＊ ナデ	ナデ (横位) ナデ (縫位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	L字型口縁		
316 60 5	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2c ペッド 粗土	＊ ハケ目 (調・横位)	ナデ (横位) ナデ (縫位)	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	L字型口縁		
317 50 一括	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2c 粗土	＊ ナデ	ナデ (縫位) ハケ 目 (縫位) ナデ	に赤い粒 灰好	2段目: 灰好 胎土削り突帯 (2巻)	に赤い粒 灰好	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	胎土削り突帯 (2巻)		
1-2	50	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	SA2c ペッド 粗土	口縁 粗土 23.0	ナデ	横方向のナデ	粒	粒	良好 乳白色粒	凹みのあるS字状口縁 胎土削り突帯 (2巻)	
318 41 50 53-9 94-95	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	C2	ナデ	横方向のナデ	粒	粒	粒	3mm以下の灰・灰・灰 褐色	凹みのあるS字状口縁 胎土削り突帯 (2巻)		
319 266 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ (横位) 押 さえ	ナデ (横位)	浅黄	浅黄	良好	3mm以下の赤褐色	L字型口縁 胎土削り突帯 (1巻)		
320 67 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2b 粗土	＊ ナデ (横位)	ナデ (横位)	に赤い粒 灰好	に赤い粒 灰好	6mm以下の灰白・灰 褐色・白・灰褐色・金銀粒	凹みのあるS字状口縁			
321 66 一括	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2a 粗土	＊ ナデ (横位)	ナデ (横位)	粒	粒	6mm以下の灰・灰・灰 褐色・灰・灰褐色	L字型口縁			
322 68 4	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2a 粗土	＊ イガキ+ナデ (風化 跡)	不明 (風化) 風化 跡	灰褐色・明 青	灰褐色・明 青	5mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	5mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色・灰褐色 褐色・無鉛光沢透明			
323 43 6 44 14-61	50	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	SA2b 粗土 I C2 II	口縁 粗土 25.4	押 さえ ナデ	ナデ	粒	粒	3.5mm以上の赤褐色・灰 褐色・白・灰褐色	Y字型口縁 同一個体 外面: 灰	
324 79 55	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2a 粗土	口縁 粗土 36.8	ナデ (横位) ナデ ナデ (縫位) ハケ 目	に赤い粒 粒	に赤い粒 粒	6mm以下の灰・灰・灰 褐色・灰褐色	6mm以下の灰・灰・灰 褐色・灰褐色	Y字型口縁 同一個体 外面: 灰		
325 71 一括	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2b 粗土	＊ ナデ (横位)	ナデ (横位) ナデ	に赤い粒 粒	に赤い粒 粒	2mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	2mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	外面: 灰		
326 42 3-1	弥生 土器	甕	口縁部 側縁	Sa2c ペッド 粗土	＊ ナデ	ナデ (横位)	ハケ目 (縫位) ナデ (横位)	に赤い粒 粒	に赤い粒 粒	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	胎土削り突帯 (1巻)		
327 74 8	弥生 土器	甕	口縁部	Sa2c ペッド 粗土	＊ ナデ	ハケ目 (縫位)	灰黄	に赤い粒 粒	3mm以下の灰白・灰 褐色・無鉛光沢透明	外面: 灰			
328 39 25 13-16	50	弥生 土器	甕	SA2c ペッド 粗土	底径 8.3	ナデ	ハケ目 (縫位)	に赤い粒 粒	に赤い粒 粒	7mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	平底		
329 77 5-13	弥生 土器	甕	底部	Sa2d 粗土	底径 6.2	ナデ	ナデ	底	に赤い粒 粒	5mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	平底		
330 76 65	弥生 土器	甕	底部	Sa2d 粗土	底径 7.1	ナデ	ナデ	底	底	5mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	平底 成外輪: 相撲軌 SZ1-41+と接合		
331 81 1	弥生 土器	甕	底部	Sa3d 粗土	底径 6.0	ナデ	ナデ	底	に赤い粒 粒	5mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	上D底		
332 82 17	弥生 土器	甕	底部	Sa3d 粗土	底径 7.3	不明 (欠損)	イガキ (横位)	—	粒	5mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	平底		
333 75 3 30	50	弥生 土器	甕	SA2c ペッド 粗土	口縁 6.0	ハケ目+ナデ消し	ナデ (縫位)	に赤い粒 粒	に赤い粒 粒	5mm以下の灰白・灰 褐色・灰褐色	平底		

表9 弐生土器觀察表(2)

河内 3m 3m 上27m	流域	層位	出土層 目・場	剖面法 式	手造・調節・支輪等の特徴		色 調 内面 外面	焼成	胎土中に含まれる粒の割合	備考
					内面	外面				
334 78 60	共生 土器	底部	SA2b 程上	底径 6.2 C2 II	ハケ目→ナデ	ナデ	褐灰	に赤い 板・粒	良好	5mm以下の粗粒・褐灰・ 褐・乳白色粒
					底径 5.6	ハケ目→出ナデ	ナデ	褐灰	に赤い 板・粒	良好
335 79 46	共生 土器	底部	SA2b 程上	底径 7.1	ナデ	ナデ 雷紋模	に赤い 板	に赤い 板	良好	5mm以下の粗粒・白灰・ 乳白色粒
					ナデ	ナデ	黒	に赤い 板・粒	良好	5mm以下の粗粒・白灰・ 乳白色粒
337 45 58	共生 土器	鉢 腹～ 底部	SA2b 程上	* ハケ目(斜・幅段)→ 出ナデ	ナデ	黒	に赤い 板・粒	良好	5mm以下の粗粒・褐・明 神・板	内面: 黒色化 外面: 僧
					C2 II					
338 47 1~6 +9~9	共生 土器	盤	圓底部	SA2b 程上	* ハケ目(斜・幅段) 押さえ込・出ナデ	ハケ目(斜・幅段)	に赤い 板・粒	良好	3mm以下の粗粒・褐・明 神・板	外面: 僧
339 72 16~21	共生 土器	盤	口縁部	SA2d 程上	* 不明(風化)	不明(風化)	に赤い 板	に赤い 板	良好	2.5mm以下の粗粒・ 白灰・乳白色粒
340 69 一括	共生 土器	盤	口縁部	SA2c ハード	* ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	に赤い 板	に赤い 板	良好	1mm以下の粗粒・白灰・ 乳白色粒
341 73 61	共生 土器	鉢	口縁部	SA2b 程上	* ナデ(斜・横旋)	ナデ(横旋)	ナデ	に赤い 板	良好	1mm以下の粗粒・褐・白 灰・板
342 83 一括	共生 土器	不明	SA2c 程上	*	音皆文	不明	に赤い 板	に赤い 板	良好	1mm以下の粗粒・明 神灰・乳白色粒
371 96 一括	共生 土器	盤	口縁部	SA2c II	* ナデ	ナデ(横旋) ハケ目(斜)	に赤い 板	に赤い 板	良好	2mm以下の浅盤・褐灰 板
372 94 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ2c II	* ナデ(横旋)	ナデ(横旋) ハケ目(斜)	に赤い 板	に赤い 板	良好	5mm以下の粗粒・白 灰・乳白色粒
373 95 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ2b II	* ナデ ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	褐灰	に赤い 板	良好	2mm以下の粗粒・ 白灰・板
374 242 46	共生 土器	盤	口縁部	SZ1 程上	* ハケ目	ナデ(横旋) ハケ目 衛須頭	に赤い 板	に赤い 板	良好	3mm以下の乳白・褐・ 板
375 243 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1 程上	* ナデ(横旋) ハケ目	ハケ目 ナデ(横 旋)	板	板	良好	3mm以下の乳白・褐・ 板
376 253 34	共生 土器	盤	口縁部	SZ1 程上	口徑 19.9	ナデ(横旋) 押さえ込?	ナデ(横旋)	板	良好	3mm以下の乳白・褐・ 板
377 100 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1d 程上	口徑 13.0	ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	褐・灰	良好	2.5mm以下の乳白灰・ 褐・板
378 98 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1c 程上	* ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	褐灰	に赤い 板	良好	1mm以下の粗粒・白 灰・板
379 97 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1c 程上	* ナデ	ナデ(横旋)	浅黄	に赤い 板	良好	1mm以下の粗粒・褐・ 板
380 93 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1d 程上	口徑 12.6	ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	に赤い 板	良好	2mm以下の粗粒・白 灰・板
381 90 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1c 程上	* ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	に赤い 板	に赤い 板	良好	6mm以下の灰褐色・ 透明・板
382 91 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1b 程上	* ナデ ナデ(横 旋)	ナデ(横旋) 押さえ込?	浅黄	に赤い 板	良好	3mm以下の灰褐色・ 透明・板
383 92 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1b 程上	* ナデ	ナデ	に赤い 板	に赤い 板	良好	2mm以下の乳白・褐・ 板
384 99 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1d 程上	* ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	板	板	良好	1mm以下の光沢黒・ 褐・板
385 101 一括	共生 土器	盤	口縁部	SZ1c 程上	* ナデ(横旋)	ナデ	に赤い 板	に赤い 板	良好	3.5mm以下の白陶在 に赤い 板
386 103 39	共生 土器	盤	底部	SZ1 程上	底径 4.4	ナデ 指押さえ	ミガキ(斜・横)	に赤い 板	良好	7mm以下の白・板・ 白灰・板
387 102 27	共生 土器	盤	底部	SZ1 程上	底径 6.2	不明(風化)	ナデ	浅黄・灰 没	良好	5mm以下の粗粒・白・ 板
401 12 4	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ナデ(横旋)	丁寧なナデ(横 旋)	明神頭	に赤い 板	良好	0.5~4mmの灰褐色・ 板
402 19 1	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ナデ	ナデ(横旋) ナデ(不明瞭)	に赤い 板	に赤い 板	良好	2mm以下の白・板・ 白灰・板
403 11 5	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	明神	明神頭	良好	陶粒・明神頭・乳白色 板
404 13 10	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ナデ(横旋) 押さえ込?	ナデ(横旋)	明神頭	板	良好	0.5~1mmの灰白・ 浅黄・板
405 15 6	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ナデ(横旋)	ナデ(横旋)	板	板	良好	2mm以下の灰・板・ 白灰・板
406 19 13	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ハケ目(斜)	ナデ(横旋)	に赤い 板	に赤い 板	良好	2mm以下の灰・板・ 白灰・板
407 20 2	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ナデ	ナデ(横旋) 指 押さえ	に赤い 板	に赤い 板	良好	0.5~2mmの灰白・ 浅黄・板
408 213 一括	共生 土器	盤	口縁部	D4 II	口徑 32.5	ナデ 指押さえ	ナデ(横旋)	に赤い 板	良好	3mm以下の灰褐色・ 2mm以下の乳白板
410 228 一括	共生 土器	盤	口縁部	T5 II	* ナデ 指押さえ	ナデ(横旋) 指 押さえ	褐灰	に赤い 板	良好	1mmの乳白・板
411 228 61	共生 土器	盤	口縁部	D4 III	* ナデ 指押さえ	ナデ(横旋) ハケ 目 指押さえ	に赤い 板	に赤い 板	良好	2mm以下の灰・板・ 白灰・板
412 229 一括	共生 土器	盤	口縁部	C2 III	* ナデ 指押さえ	ナデ(横旋) ハケ 目	に赤い 板	に赤い 板	良好	1.5mm以下の灰白・ 板
413 256 58	共生 土器	盤	口縁部	D4 III	丁家なナデ 工具使?	ナデ(横旋) 斜・横	に赤い 板	に赤い 板	良好	1mmの褐色・ 2mm以下の灰褐色
414 258 1	共生 土器	盤	口縁部	SA1Y 9.5cm	* ナデ	ナデ(横旋) ハケ 目 衛須頭	板	板	良好	1mmの褐色
415 255 7	共生 土器	盤	口縁部	D3 II	* ナデ	ナデ ハケ目	に赤い 板	に赤い 板	良好	1mm以下の灰褐色・ 板
416 221 一括	共生 土器	盤	口縁部	T10E -	* ナデ 指押抜	ナデ(横)	板	板	良好	1mmの褐色・ 2mm以下の灰褐色

表10 弥生土器觀察表(3)

河内 3m 上段	遺物 数	種別	器種	部位	出土状 況	剖面法 (mm)	手造・調節・支輪等の特徴		色 調	焼成	胎土中に含まれる石の割合	備考
							内面	外面				
417 229	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	B3 ■	■	* ナデ(横段) 指押 さえた	ナデ(横段)	に赤い黄 褐色	良好	1mm以下の乳白色粒、2mm の他色粒	馬村突脊(1鉢)
418 226	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C3 ■	■	* ナデ(横段)	ナデ(横段)	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の褐灰色粒	口縫部; 馬村突脊表帶(1鉢) 外縁; 黒
419 223	11	弥生 土器	蓋	口縁部	3.89	-	* ナデ	ナデ(横段) 指押 さえた	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の灰青色粒、 黒褐色	口縫部; 馬村突脊表帶(1鉢) 外縁; 黑
420 198	1	弥生 土器	蓋	口縁部	SC3 瓦上	19.8	ナデ(横段)	ナデ(風化気味)	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の乳白色粒、 乳白色	口縫部; 馬村突脊表帶(1鉢) 外縁; 黑
421 229	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C2 E - ■	■	* ナデ	ナデ(横段) 指押 さえた	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の乳白色粒、1mm以下の 乳白色	口縫部; 馬村突脊表帶(1鉢) 外縁; 黑
422 222	36	弥生 土器	蓋	口縁部	C3 ■	■	* ナデ ハケ目?	ナデ(横段)	に赤い黄 褐色	良好	3mm以上の褐色粒、2mm以下の 黒褐色、1mm以上の乳白色	口縫部; 馬村突脊表帶(1鉢) 外縁; 黑
423 226	31	弥生 土器	蓋	口縁部	B3 B	■	* ナデ(横段) ?	ナデ(横段) 工具 擦押さえた	暗赤褐色	良好	2mm以下の灰青色粒	口縫部; 上部; 黑
424 232	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C2 T3	25.4	ナデ ナデ(横段) ?	ハケ目	に赤い黄 褐色	良好	3-4mmの褐色粒、2mmの乳 白色	口縫部; 脈目; 馬村突脊 表帶(1鉢); 外縁; 黑
425 224	2	弥生 土器	蓋	口縁部	C1 E	■	* ナデの上・下ハケ目?	ナデ(横段) 工具 擦押	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の灰青色粒	馬村突脊表帶(2鉢) 外縁; 黑
86 101	弥生 土器	蓋	口縁 ~ 斜面	B2 B	口縁 19.4	ナデ(横段) 指押	ナデ(横段) ハケ目	黒褐色	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の乳白色、 黒褐色	黒部; 馬村突脊表帶
427 230	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	T7 E	■	* ナデ 指押さえた ハケ目(横段)	に赤い黄 褐色	に赤い黄 褐色	良好	1mm以下の乳白色粒	駒形突脊(1鉢)
428 231	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	D3 B	■	* ナデ(横段)	ナデ(横段) ハケ目(横段) ナデ(横段) ナデ	に赤い黄 褐色	良好	1-2mmのに赤い黄 褐色粒、黒褐色 な乳白色(1鉢)	駒形突脊; 馬村突脊 表帶(1鉢); 外縁; 黑
429 227	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	T3 D	■	* ナデ	ナデ(横段) 工具 擦押	黒褐色	良好	2mm以下の褐色粒、1mm 以下の乳白色	口縫部; 馬村突 脊表帶(1鉢)
430 233	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C4 ■	■	* ナデ ハケ目(横段)	工具によるナデ(横 段) ハケ目(横段)	に赤い黄 褐色	良好	1-2mmの場所: 黄褐色 ・灰褐色	口縫部; 駒形突 脊(1鉢)
431 226	16	弥生 土器	蓋	口縁部	B2 E	■	* ナデ(横段)	指押さえた ナデ(横段)	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の褐色粒、1mm 以下の乳白色	口縫部; 駒形突 脊; 指押付日向背 表帶(1鉢)
432 225	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	-	■	* ナデ(横段) ナデ ハケ目?	黄褐色	黄褐色	良好	3mm以下の褐色粒、2mm 以下の乳白色	口縫部; 駒形突 脊; 指押付日向背 表帶(1鉢)
433 254	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C2 ■	■	22.2 指押さえた	ナデ(横段)	明赤褐色	良好	3mm以下の場所: 光沢黒褐色 ・乳白色	口縫部; 四隅; 宇治江口縫
434 249	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C2 ■	■	* ナデ 指押	ナデ(横段)	桺	良好	2mm以下の基盤、黒褐色 ・乳白色	口縫部; 四隅; 乳白色
435 251	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C4 ■	■	* ナデ(横段)	ナデ(横段)	明赤褐色	良好	2mm以下の褐色粒、1mm 以下の乳白色	口縫部; 四隅; 宇治江口縫
436 14-15	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁 +TII	粗上	26.8	ナデ	ナデ(横・直位)	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の褐色粒、に赤い 乳白色	口縫部; 駒形突 脊; 指押付日向背 表帶(2鉢)
437 247	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C2 E ■	34.1	ナデ(横段) 指押さえた	ナデ(横段)	黒褐色	良好	2mm以下の褐色粒、1mm 以下の乳白色	口縫部; 駒形突 脊; 指押付日向背 表帶(1鉢)
438 252	4	弥生 土器	蓋	口縁部	B3 D	27.3	ナデ(横段)	ナデ(横段)	明赤褐色	良好	1mmの大穴の褐色	口縫部; 四隅; 宇治江口縫
439 248	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	T7 D	22.5	ハケ目	明赤褐色	に赤い黄 褐色	良好	1mm以下の中孔: 黄褐色 ・赤褐色	口縫部; 四隅; 乳白色
440 264	2	弥生 土器	蓋	口縁部	B3 E	20.4	ナデ(横段)	ナデ(横段)	明赤褐色	良好	3mm以下に赤い褐色 ・光沢黒褐色	口縫部; 四隅; 宇治江口縫
441 254	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	C2 ■	22.7	ナデ(横段) ハケ目(横段)	ナデ(横段) 工具板 擦押	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の褐色粒、1.5mm 以下の赤褐色	口縫部; 駒形突 脊; 指押
2 3	弥生 土器	蓋	口縁部	D4 E	口縁 24.8	ミギタ 指押	ナデ(横段) ハケ目 (横・直位)	明赤褐色 ・黒褐色	明赤褐色 ・黒褐色	良好	2mm以下の赤褐色、 黒褐色	口縫部; 駒形突 脊; L字口縫
443 261	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	T5 E	■	ハケ目 ナデ(横段)	ハケ目 ナデ(横 段) 指押	明赤褐色	良好	3mm以下の赤褐色、白 色	口縫部; 駒形突 脊; L字口縫
444 260	16	弥生 土器	蓋	口縁部	D4 ■	■	* ナデ-ハケ目	ナデ	に赤い黄 褐色	良好	3mm以下に赤い褐色 ・光沢黒褐色	口縫部; 四隅; L字口縫
445 250	一鉢	弥生 土器	蓋	口縁部	T5 E	■	* ナデ	ナデ(横段)	桺	良好	2mm以下の赤褐色、乳白 色	口縫部; 駒形突 脊; L字口縫
446 224	11-12 12-13	弥生 土器	蓋	口縁 - 瓶	B1 D	45.0	ハケ目 指押	ハケ目 (斜・横位)	桺	良好	5mm以下に赤い褐色、2 mm以下に乳白色	口縫部; 駒形突 脊; L字口縫
447 217	1-2	弥生 土器	蓋	口縁 - 瓶	SC4 瓦上	24.8	ナデ(横段)	ナデ(横段) ハケ目(横位)	桺	良好	3mm以下の褐色粒、1mm 以下の乳白色	馬村突脊表帶(1鉢)
448 265	42-43	弥生 土器	蓋	口縁部	B3 D	16.0	ナデ(横段)	ナデ(横段)	明赤褐色	良好	1mm以下の赤褐色	外縁; 黒
449 259	4	弥生 土器	蓋	瓶頭 - 瓶底	C3 2.3	追跡	(風化により不明)	に赤い黄 褐色	に赤い黄 褐色	良好	4mm以下の赤褐色、1.5mm 以下の赤褐色	外縁; 黒
450 270	20	弥生 土器	蓋	底部	B1 ■	4.5	ナデ(風化)	ナデ(風化)	浅黃褐色 ・黒褐色	良好	4mm以下の赤褐色、1.5mm 以下の赤褐色	外縁; 黑
451 229	一鉢	弥生 土器	蓋	底部	T5 E	7.1	ナデ	ナデ	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の赤褐色、赤 褐色	外縁; 黑
452 274	6	弥生 土器	蓋	底部	B1 E	■	ナデ	ハケ目 (斜・横位)	に赤い黄 褐色	良好	2mm以下の赤褐色、赤 褐色	外縁; 黑
453 273	一鉢	弥生 土器	蓋	瓶頭	T4 ■	11.2	ナデ	ナデ(横段)	桺	良好	5mm以下に赤い褐色、赤 褐色	外縁; 黑
454 281	一鉢	弥生 土器	蓋	瓶頭	B1 ■	11.2	ナデ	ナデ(横段)	桺	良好	4mm以下の赤褐色、赤 褐色	外縁; 黑
455 21	16	弥生 土器	蓋	底部	SA1 瓦上	8.4	ナデ(風化)	ナデ(風化)	浅黃褐色 ・黒褐色	良好	2mm以下の赤褐色、赤 褐色	外縁; 黑
456 222	113	弥生 土器	蓋	底部	B2 ■	9.1	ナデ	ナデ(横段)	乳白	良好	3mm以下の乳白色、乳 白色	外縁; 黑
457 269	7-9	弥生 土器	蓋	瓶頭	C2 E	4.6	ハケ目+ナデ消し 指押	ナデ+ナデ消し 指押	ナデ+ナデ消し 指押	良好	3mm以下の白褐色、乳 白色	内面; 黑色化
458 267	48	弥生 土器	蓋	瓶頭	D3 ■	■	* ナデ	ナデ	に赤い黄 褐色	良好	5mm以下の乳白色、乳 白色	外縁; 帯乳化あり(横位)
459 268	25	弥生 土器	蓋	瓶頭	D3 E	3.6	ナデ	ナデ	瓶頭	良好	5mm以下の乳白色、乳 白色	上部; 外縁; 物体遮蔽 内面; 帯乳化

表11 弥生土器観察表（4）

測量点番号 3m 5m 12.7m	遺物名	種別	器種	部位	出土位置・層	測定法 量(cm)	手形・調節・支柱等の特徴	内面 外面	色調	焼成	粘土中に含まれる砂の割合	備考
								内面 外面	内面 外面			
460-275	19	弥生	土器	直	底部	B1 ■	直径 1.7 ハケ目・ナデ	ナデ	灰褐色・ 土褐色	に高い 黄	良好	4m以下の小範囲に高い 含金量・濃度・鉄鉱化地帯 上げ底
461-105	-	弥生	土器	直	底部	SC1 粗土 6.0	直径 0.0 ハケ目?	ナデ	灰褐色・ 土褐色	に高い 黄	良好	4m以下の小範囲に高い 含金量・濃度・鉄鉱化地帯 上げ底
462-255	-	弥生	土器	直	底部	T2E ■	* 指押さえ	ナデ	灰褐色・ 土褐色	に高い 黄	良好	1~2mmの灰黄・黄・灰 乳白色粒
463-256	-	弥生	土器	直	底部	C2 ■	*	ナデ	灰褐色	灰	良好	2mm以下の灰褐色 粒
464-257	-	弥生	土器	高环	环部	T2E ■	* ナデ(横穴)?	ナデ(横穴)?	浅黄	浅黄	良好	1~2mmの赤褐色粒
465-84	-	弥生	土器	不明	不明	T1W -	* 不明	不明	に高い 黄	に高い 黄	良好	3m以下の浅黄色に高い 含金量・灰白色・光沢透明粒 種子压痕あり

表12 土師器観察表

473-260	-	土師器	直	底部	C1 直土	直径 6.0	回転ナデ	回転ナデ	に高い 黄	明黄色	良好	1m以下の砂粒
474-259	-	土師器	直	底部	C2 直	直径 7.4	回転ナデ	回転ナデ	に高い 黄	橙	良好	1~2mmの砂粒
475-261	-	土師器	直	底部	B2 ■	直径 8.4	回転ナデ	回転ナデ	に高い 黄	橙	良好	1mの砂粒
476-262	-	土師器	直	底部	B2 直	直径 7.3	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	良好	1m以下の砂粒

表13 石器観察表(1)

編號	元標	遺物記 上記	器種	石材	色調	出土位置	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
110	60	21	打制石器	黑曜石(鹿島産)	灰白色	S A1	埋土	2.0	0.9	3.5	0.6	-87536.5616	46064.0191	154.2137	二等辯三角形 四基式
111	58	12	石核	黒曜石(鹿尾産)?	黑色	S A1	埋土	2.5	1.5	1.4	6.1	実測回記入	実測回記入	154.29	
112	33	14	刮片	ホルンフェルス	黒褐色/サビ	S A1	埋土	9.6	5.7	1.6	61.5	実測回記入	実測回記入	154.279	
113	32	7	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	S A1	埋土	10.5	6.1	2.8	160.0	実測回記入	実測回記入	154.69	
116	1	1	砾石	砂岩	褐褐色	S C2	埋土	7.3	7.5	1.5	113.8	-87536.1173	46063.859	154.254	片面:削痕あり
127	22	4	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	S C4	埋土	8.6	5.5	2.8	175.5	-87541.0569	46064.9221	154.1065	
128	60	9	石核	砂岩	灰白色	S C4	埋土	4.8	3.9	1.2	31.3	-87543.0654	46065.0098	153.8679	短幅方向の打ち欠き
140	42	8	打制石器	黒曜石(鹿尾産)?	暗灰色	S C11	埋土	2.6	1.3	0.3	0.6	-87541.9990	46061.8558	153.7127	二等辯三角形 四基式
141	54	一括	刮片	黒曜石(鹿島産)	灰白色	S C7	埋土	3.6	2.6	1.3	11.2	*	*	*	●
142	62	一括	石核	ホルンフェルス	黒褐色	S C11	埋土	3.9	2.0	0.7	11.5	*	*	*	長幅方向の打ち欠き
143	61	一括	石核	ホルンフェルス	うすい茶色	S C11	埋土	3.9	2.4	1.0	16.5	*	*	*	長幅方向の打ち欠き
144	67	一括	石核	ホルンフェルス	黒褐色	S C9	埋土	4.4	3.9	1.1	28.1	*	*	*	短幅方向の打ち欠き(片側のみ)
145	45	一括	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	S C10	埋土	6.4	3.9	2.8	61.0	*	*	*	ババ形 一部欠損
146	68	一括	石核	砂岩	にじみ黄色	S C11	埋土	6.6	3.0	1.5	89.2	*	*	*	短幅方向の打ち欠き
147	16	2	砾石	尾崎山酸性岩脈	淡黄色	S C9	埋土	9.3	9.7	4.5	664.5	-87546.9974	46066.9518	153.289	表面面:削痕あり
148	7	9	石核	尾崎山酸性岩脈	淡黄色	S C11	埋土	31.6	31.5	10.4	1886.0	-87542.3841	46062.0678	153.8372	片面:削痕あり
149	55	1	石核	ホルンフェルス	にいし青褐色	S C5	埋土	8.3	7.7	2.7	200.2	*	*	*	● デーラタ形
226	102	4	打制石器	チャート	黒灰色	C2	II	1.8	1.4	0.4	0.9	*	*	*	二等辯三角形 平底式
227	99	104	打制石器	チャート	黒灰色	B2	II	1.5	1.3	0.3	0.4	-87335.0305	46061.993	154.7152	二等辯三角形 四基式
228	101	25	打制石器	チャート	炭化灰	B1	II	1.5	1.3	0.2	0.3	-87335.2382	46063.746	154.5668	正三角形 四基式
229	100	33	打制石器	ガラス質安山岩	黒褐色	B3	II	1.4	1.3	0.3	0.3	-87543.1869	46064.1109	154.3307	正三角形 四基式
230	89	4	石核	ガラス質安山岩	黒褐色	C1	II	3.2	4.2	0.6	87.5	-87530.6182	46055.0044	154.6579	傾斜
231	88	一括	石核	石英	白色	B3	II	4.7	3.7	1.5	15.6	*	*	*	● 傾斜
232	107	2	粗面面石核	ホルンフェルス	黒褐色	1MBP(41)	II~III	6.1	9.1	1.7	91.4	-87540.6772	46066.2258	154.2086	刃削調整あり 円錐洞穴
233	115	63	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	C2	II	6.8	3.5	1.1	22.9	-87539.8555	46066.1958	154.4913	刃削調整あり
234	117	62	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	D4	II	6.8	5.0	1.5	26.5	-87546.1047	46074.8405	153.4130	
235	132	一括	石核	ホルンフェルス	青灰褐色	T r 3	—	7.3	7.3	2.8	155.9	*	*	*	
236	133	66	石核	ホルンフェルス	黒褐色	B3	II	7.5	7.6	3.3	180.6	-87542.0547	46061.9513	154.1426	
237	134	70	石核	ホルンフェルス	黒褐色	B2	II	13.9	5.2	5.3	67.02	-87538.0518	46062.9557	154.556	
238	77	17	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	B2	II	7.4	4.3	2.1	90.5	-87538.6819	46064.0013	154.6787	一部傾斜
239	80	81	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	T r 10 S	—	7.0	4.5	2.0	83.0	*	*	*	ババ形 唐松大
240	85	一括	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	T r 5	II~III	6.2	3.8	2.3	72.9	*	*	*	ババ形
241	78	11	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色/サビ	D4	II	10.1	4.7	3.2	182.8	-87547.7197	46073.2574	153.5706	ババ形 一部欠損
242	71	42	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	C3	II	12.5	5.1	2.6	160.1	-87541.0665	46065.4262	154.2896	ババ形
243	79	一括	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	T r 8	II~III	10.6	4.6	2.1	133.1	*	*	*	ババ形
244	89	40	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	D4	II	11.4	4.8	2.8	188.6	-87545.5308	46071.4847	153.7934	ババ形
245	82	71	打制石器	ホルンフェルス	周色	B3	II	10.8	8.1	3.8	366.3	-87540.3862	46062.7288	154.2356	ババ形
246	81	5	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色/サビ	B2	II	9.8	6.1	3.0	199.3	-87538.7422	46060.1062	154.7263	ババ形
247	75	6	打制石器	ホルンフェルス	周色	B2	II	10.1	7.2	2.4	115.2	-87538.9678	46000.4423	154.8867	有肩形
248	76	39	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	B3	II	7.6	6.2	3.2	204.6	-87541.0546	46064.7753	154.1063	有肩形
249	75	一括	打制石器	ホルンフェルス	黒褐色	T r 6	II~III	10.9	5.8	3.5	264.7	*	*	*	短幅形
250	72	一括	打制石器	ホルンフェルス	周色	C1	II~III	10.4	5.8	2.7	216.4	*	*	*	短幅形
251	83	23	打制石器	ホルンフェルス	周色	C4	II	8.2	7.5	3.3	228.8	-87545.7267	46063.7118	153.852	短幅形
252	67	67	部分巣石器	ホルンフェルス	淡黄色	B2	II	6.4	6.0	2.5	82.5	-87538.2588	46061.9503	154.7677	
253	47	67	部分巣石器	ホルンフェルス	淡黄色	B2	II	6.4	6.0	2.5	92.5	-87536.2588	46061.9503	154.7677	
254	123	42	磨石-敲石	尾崎山酸性岩脈	周色	B2	II	6.9	6.3	3.3	225.2	-87538.4361	46061.9515	154.8033	全周經:敲打痕 ソロバン連続
255	128	25	磨石	尾崎山酸性岩脈	にいし青褐色	C2	II	6.7	6.7	2.2	213.2	-87540.7247	46068.2960	154.2063	全周經:敲打痕 ソロバン連続
256	121	21	磨石	尾崎山酸性岩脈	にいし青褐色	C3	II	10.1	7.6	3.9	493.2	-87540.5862	46065.0909	154.4983	長周縦:敲打痕
257	122	32	磨石	砂岩	周色	D4	II	7.1	6.9	2.7	203.5	-87547.4562	46070.9503	153.7286	全周經:敲打痕
258	129	32	磨石	尾崎山酸性岩脈	淡黄色	C4	II	8.6	8.0	4.0	422.3	-87549.1337	46069.9572	153.3655	全周經:敲打痕 ソロバン連続
259	118	一括	磨石	尾崎山酸性岩脈	周色	T r 6	II~III	13.0	10.3	4.8	845.2	*	*	*	全周縦に敲打痕
260	127	33	磨石	尾崎山酸性岩脈	にいし青褐色	C4	II	7.6	6.7	3.2	265.3	-87549.5305	46068.3481	153.4972	全周縦:敲打痕 ソロバン連続
261	129	39	磨石	尾崎山酸性岩脈	にいし青褐色	C3	II	10.1	7.6	3.9	493.2	-87540.5862	46065.0909	154.4983	長周縦:敲打痕
262	119	6	磨石	尾崎山酸性岩脈	周色	C1	II	8.4	7.5	3.4	307.5	-87538.4995	46066.9503	154.8033	長周縦:敲打痕
263	124	55	磨石	砂岩	にいし青褐色	D3	II	15.2	7.4	3.9	640.5	-87541.6712	46072.9462	153.9902	
264	130	1	磨石	砂岩	周色	T r 3	II	6.2	5.9	2.8	140.0	*	*	*	表面面:凹み
265	125	4	磨石	尾崎山酸性岩脈	周色	C4	II	7.4	6.8	3.0	221.6	-87545.7149	46069.9809	153.8064	表面中央部:敲打痕
266	125	52	磨石-敲打石	尾崎山酸性岩脈	周色	D4	II	10.0	7.6	4.4	493.2	-87546.5903	46072.0511	153.5609	

表14 石器観察表(2)

編號	測定 50 上部	測定 50 下部	器種	石材	色調	出土位置	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
267	96	36	石錐	頁岩	赤褐色	B3	B	4.5	4.4	1.0	28.1	-87543.454	46054.3483	154.2208	長軸方向の打ち欠き
268	96	一括	石錐	ホルンフェルス	黒灰色	C1	B~III	6.4	3.9	1.1	3.7	*	*	*	短軸方向の打ち欠き
269	97	35	石錐	砂岩	に bei 黄褐色	C3	III	7.1	5.5	1.6	76.6	-87543.2009	46057.6697	154.0704	短軸方向の打ち欠き 一部破損
270	94	74	石錐	砂岩	黄褐色	C2	B	4.0	3.4	6.7	13.3	-87537.6994	46055.5962	154.5966	長軸方向の打ち欠き
271	95	一括	石錐	ホルンフェルス	黒褐色	T+4	III	5.0	5.0	0.8	29.7	*	*	*	長軸方向の打ち欠き
272	93	65	石錐	尾崎山礫岩類	灰白色	B3	III	6.0	5.4	1.7	90.0	-87543.3895	46053.4951	154.0474	長軸方向の打ち欠き
273	90	1	石錐	砂岩	灰色	A2	B	8.1	8.1	2.4	254.7	-87538.2741	46059.5912	154.8335	長軸方向の打ち欠き
274	91	16	石錐	砂岩	に bei 黄褐色	C4	III	9.7	3.9	1.8	96.6	-87546.0203	46068.4747	154.0539	長軸方向の打ち欠き
275	94	74	石錐	砂岩	灰白色	D4	III	6.7	4.1	1.1	42.1	-87548.0629	46070.9952	153.4485	長軸方向の打ち欠き
276	135	19	バット石	チャート	黒褐色	C3	III	3.0	2.1	0.9	8.4	-87542.6933	46098.5342	154.2107	
277	102	72	石斧多翼品	チャート	黒褐色	D4	III	2.3	1.4	0.7	24.7	-87548.0045	46071.0475	153.3891	
278	105	75	石斧多翼品	黒岩山(葛島山)	灰白色	C2	II	2.0	1.8	0.7	1.8	-87536.75	46096.0311	154.6862	石錐?
279	36	一括	鐵道不明石器	ホルンフェルス	黒褐色	S H13	—	7.1	3.0	1.0	25.2	*	*	*	
280	74	7	尾崎不明石器	ホルンフェルス	黒褐色	B2	II	10.2	5.1	1.4	77.1	-87537.1052	46051.4238	154.9963	刃部調整あり
343	37	一括	打削石器	ホルンフェルス	浅黄色	S A2 a	III	2.5	1.7	0.6	1.9	*	*	*	二等辯三角形 四式
344	39	38	打削石器	ガラス質安山岩	黒褐色	S A2 b	III	1.9	1.6	0.3	0.7	-87532.2698	46057.5496	154.3788	二等辯三角形 四式
345	36	36	打削石器	ガラス質安山岩	黒褐色	S A2 b	III	1.7	1.4	0.4	0.5	-87535.6692	46098.7294	154.1033	二等辯三角形 四式
346	43	24	削削石器	綠色凝灰岩	青灰色	S A2 c	III	4.3	1.7	0.3	2.8	-87535.02	46098.1187	153.8356	一部頃損
347	34	1	鐵道不明石器	チャート	黒褐色	S A3 b (v)	III	2.0	1.6	0.7	2.0	-87335.1903	46094.3315	154.4869	
348	31	13	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	S A2 a	III	7.2	4.5	1.0	23.7	-87334.5591	46095.1485	154.3569	
349	25	53	刮片	尾崎山(葛島山)	灰白色	S A3 b (v)	III	3.6	2.0	0.7	3.0	-87506.827	46065.4262	154.4017	
350	50	5	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	S A2 a	III	5.6	4.5	2.4	88.3	-87532.8597	46095.7337	154.3894	刃部加工あり? 表面: 自然面
351	56	9	石核	ホルンフェルス	黒褐色/ヤビ	S A2 c	III	9.0	7.1	5.5	437.1	-87538.7046	46096.6936	154.1826	
352	57	67	石核	チャート	青灰色	S A2 b	III	9.0	5.5	5.5	322.6	*	*	*	表端部: 斧端直 データ矢
353	13	8	石核	砂岩	に bei 黄褐色	S A2 a	III	10.2	7.9	3.7	22.9	-87336.5326	46065.992	154.2632	長端部: 斧端直
354	66	10	石核	砂岩	浅黄色	S A2 a	III	6.1	4.2	1.1	45.8	-87333.3598	46096.4414	154.2130	長軸方向の打ち欠き
355	65	26	石錐	ホルンフェルス	褐色	S A2 a	III	5.2	3.7	0.7	18.7	-87332.2848	46067.0741	154.4369	長軸方向の打ち欠き
356	63	4	石錐	砂岩	に bei 黄褐色	S A2 d	III	4.3	4.0	1.1	26.5	-87535.6295	46094.5174	154.2995	長軸方向の打ち欠き 一部破損
357	64	11	石錐	ホルンフェルス	黒褐色	S A2 a	III	4.8	3.3	0.9	22.5	-87334.16	46096.3736	154.3541	短軸方向の打ち欠き
358	131	28	打削石器	ホルンフェルス	黒褐色	S A2 a	III	7.2	5.1	1.5	87.1	-87332.3566	46094.7477	154.6319	鋸歯形 一部欠損
359	65	13	打削石器	ホルンフェルス	黒褐色	S A2 c	III	9.4	5.6	2.7	87336.0598	-8957.6267	154.0576	バッハ形 一部欠損	
360	52	2	混合巣巣石器	ホルンフェルス	黒褐色	S A2 d	III	7.7	5.3	2.9	122.3	-87335.4491	46094.6932	154.3425	月脚は滑らか研磨 面板なし
361	10	17	石核	砂岩	に bei 黄褐色	S A2 c	III	18.0	12.4	7.7	181.7	-87336.2873	46098.7675	154.0550	表面: 裂隙あり
362	9	23	四石	砂岩	褐色	S A2 e	III	12.6	8.1	5.2	715.5	-87334.9588	46098.1266	153.8626	表面: 斧端直による凹みあり
363	3	1	石核	尾崎山礫岩類	に bei 黄褐色	S A2 d	III	17.8	8.4	3.7	758.0	-87335.5714	46094.9221	154.2986	片面: 滑擦
364	137	44	石核	尾崎山礫岩類	に bei 黄褐色	S A2 b	III	27.0	31.1	5.1	69.6	-87333.7462	46096.1093	154.1874	53の山面上出土。
365	8	12	石核	尾崎山礫岩類	に bei 黄褐色	S A2 c	III	17.0	14.3	6.5	236.1	-87337.4215	46096.2863	154.2555	
366	41	39	尾崎不明石器	ガラス質安山岩	黒褐色	S Z1	III	2.2	1.3	0.4	0.6	-87545.6300	46096.017	153.8302	二等辯三角形 四式 一部欠損
367	44	55	石核多翼品	チャート	黒褐色	S Z1	III	2.0	1.5	0.7	1.5	-87545.0025	46097.8595	153.6379	
368	53	48	石核	チャート	黒褐色	S Z1	III	2.4	5.8	0.9	8.5	-87543.1436	46096.0036	153.6952	傾倒
369	19	19	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	S Z1	III	6.4	5.1	1.5	46.4	-87545.133	46098.5996	154.0280	刃部加工? あり
370	18	14	刮片	ホルンフェルス	黒褐色	S Z1	III	5.7	8.2	2.2	89.9	-87541.7045	46070.2607	153.6579	刃部加工? あり
371	12	15	鐵石	尾崎山礫岩類	に bei 黄褐色	S Z1	III	8.0	9.4	4.4	225.3	-87542.2799	46099.0479	153.9308	全周縁: 斧端直
372	14	32	刮片	尾崎山礫岩類	白褐色	S Z1	III	6.4	7.3	2.4	177.2	-87542.6035	46070.7928	153.7923	表面: 裂隙あり
373	15	45	磨石	砂岩	白褐色	S Z1	III	10.6	14.4	5.6	194.6	-87543.5457	46070.6472	153.5695	片面: 剥離あり
374	59	38	石錐	砂岩	白褐色	S Z2	III	6.9	5.5	1.9	93.8	-87541.3142	46099.6584	153.8909	長軸方向の打ち欠き
375	6	54	石核	尾崎山礫岩類	浅黄色	S Z1	III	21.1	18.7	8.6	433.4	-87545.0741	46077.9285	153.8894	
376	4	56	石核	尾崎山礫岩類	白褐色	S Z1	III	31.8	26.0	8.2	138.0	-87542.24	46070.0000	153.7129	片面: 剥離あり S2 未底上出土
377	5	4	石核	尾崎山礫岩類	に bei 黄褐色	S Z1	III	23.3	13.2	6.9	361.4	-87543.5338	46070.3283	153.8719	表面に多くの剥離? あり
378	2	49	砾石	砂岩	白褐色	S Z1	III	22.3	10.2	8.2	294.7	-87544.0933	46070.164	153.5596	表面面に剥離あり
379	28	12	刮片	尾崎山礫岩類	浅黄色	S A1 Y	—	10.7	5.6	2.0	114.7	-87508.8331	46066.4692	154.3732	
380	103	一括	削削石器	綠色凝灰岩	黒褐色	T + 2	B ~ III	3.5	2.2	0.2	1.7	*	*	*	
381	104	一括	削削石器	尾崎山礫岩類	白褐色	B1	II	3.1	2.8	0.6	5.4	*	*	*	
382	119	38	砾石	尾崎山礫岩類	白褐色	C3	II	12.9	2.3	1.2	65.5	-87544.2849	46098.2186	153.9744	大掛差有り
383	113	46	刮片	ホルンフェルス	白褐色	D4	II	8.4	2.3	1.8	85.5	-87545.2127	46070.9725	153.4769	刮削直時代帰属
384	116	43	刮片	ホルンフェルス	白褐色	C3	II	5.0	2.7	1.3	13.8	-87541.1956	46065.4809	154.3044	刮削直時代帰属
385	111	一括	刮片	珪質砂岩	黒褐色	T + 6	II ~ III	5.6	2.6	1.2	10.0	*	*	*	刮削直時代帰属
386	114	20	刮片	流紋岩	白褐色	D4	II	7.8	2.3	1.2	17.9	-87515.3041	46071.9321	153.8665	刮削直時代帰属

## 第V章 赤石遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

平成20年7月に堅穴住居SA2の床直上埋土の一部(乾燥重量14.8kg)でフローテーション作業を行い、獲得した浮遊物の中から炭化種実等を選別検出した。このSA2の炭化種実を始め、SA1・SZ1・SC1及び遺物包包含層から出土した炭化種実や炭化材、遺構埋土を検体とした種実同定・放射性炭素年代測定・樹種同定・植物珪酸体分析・花粉分析を(株)古環境研究所に、当時の環境や各遺構の詳細な時期、性格的位置づけ等を行う目的で委託して実施した。以下にその分析結果報告を掲載する。(谷口)

### 第1節 放射性炭素年代測定

#### 1はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(<sup>14</sup>C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

#### 2 試料と方法

試料No	地点・層準	種類	前処理	測定法
No 1	S A 1 堅穴住居	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 2	S A 2 堅穴住居	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 3	S C 1 土坑	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 4	S Z 1 不明遺構	炭化種実	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

#### 3 測定結果

試料No	測定No (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	<sup>14</sup> C年代 (年B P)	暦年代 (較正年代)	
				1 $\sigma$ (68.2%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
No 1	11215	-28.48 ± 0.26	750 ± 25	A D 1255-1285 (68.2%)	A D 1220-1285 (95.4%)
No 2	11216	-27.90 ± 0.26	2165 ± 25	B C 350-300 (39.9%) B C 210-170 (28.3%)	B C 360-270 (49.1%) B C 260-150 (44.2%) B C 140-110 (2.1%)
No 3	11217	-27.01 ± 0.27	755 ± 20	A D 1250-1280 (68.2%)	A D 1225-1285 (95.4%)
No 4	11218	-25.07 ± 0.27	2220 ± 25	B C 370-340 (8.3%) B C 310-200 (59.9%)	B C 390-340 (19.1%) B C 330-200 (76.3%)

i)  $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質(PDB)

の同位体比からの千分偏差(%)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

### ii) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。BPはBefore Physics(Present)を示す。

### iii) 历年代(Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを校正することで、より実際の年代値に近づけることができる。歴年校正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}\text{C}$ 測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。校正曲線データはIntCal 04、校正プログラムはOxCal 3.1である。

歴年代(校正年代)は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した歴年代の幅で表し、OxCalの確率法により $1\sigma$ (68.2%確率)と $2\sigma$ (95.4%確率)で示した。校正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。( )内の%表示は、その範囲内に歴年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布、二重曲線は歴年校正曲線を示す。

## 4 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では $750 \pm 25$ 年BP(2 $\sigma$ )の歴年代でAD1220~1285年)、No.2の炭化材では $2165 \pm 25$ 年BP(BC360~270, 260~150, 140~110年)、No.3の炭化材では $755 \pm 20$ 年BP(AD1225~1285年)、No.4の炭化種実では $2220 \pm 25$ 年BP(BC390~340, 330~200年)の年代値が得られた。

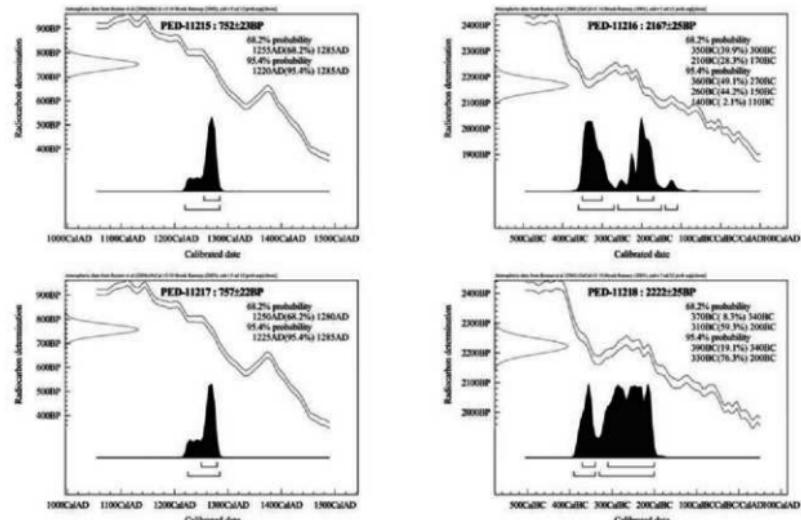


図63 歴年校正結果

## 第2節 樹種同定

### 1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2 試料

試料は、S A 1 堅穴住居、S A 2 堅穴住居、S C 1 土坑の埋土から採取された炭化材 3 点である。

### 3 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4 結果

調査区内からの複数の炭化種実の出現と併せ、表15に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表15 樹種同定結果

遺構	層位	種類	結果（和名／学名）
S A 1	埋土	炭化材	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>
S A 2	埋土	炭化材	イスノキ <i>Distylium racemosum Sieb. et Zucc.</i>
S C 1	埋土	炭化材	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>

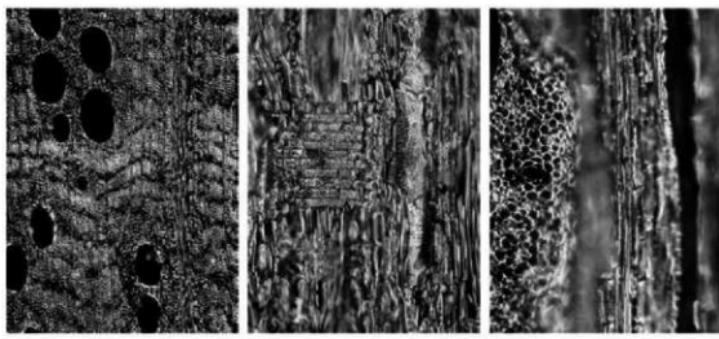
コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科（写真5）

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

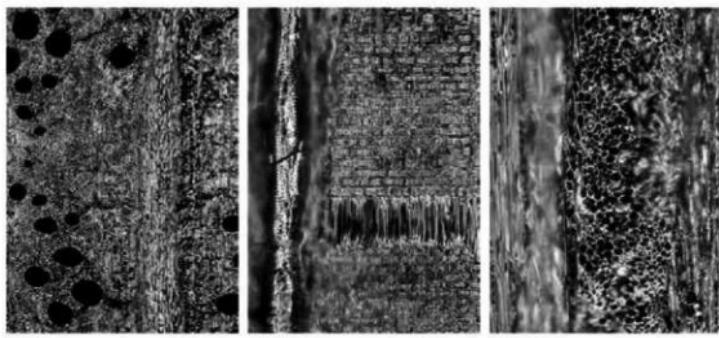
以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

イスノキ *Distylium racemosum Sieb. et Zucc.* マンサク科（写真5）

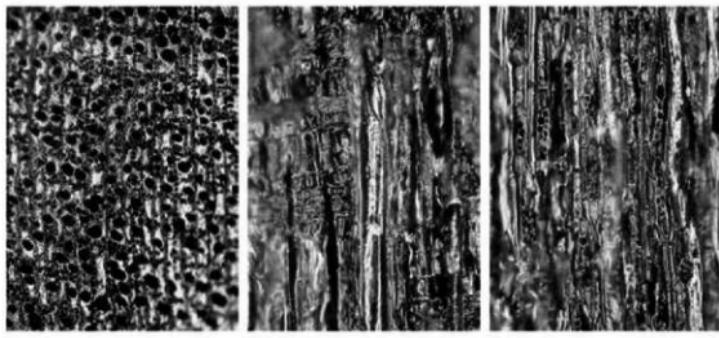
横断面：小型でやや角張った道管がほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的小なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。



横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.2mm : 0.2mm  
1. S A 1 埋土 一括 炭化材 コナラ属アカガシ炬属



横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.2mm : 0.2mm  
2. S C 1 埋土 一括 炭化材 コナラ属アカガシ炬属



横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.2mm : 0.2mm  
3. S A 2 埋土 一括 炭化材 イスノキ

写真5 炭化材

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

## 5 考察

樹種同定の結果、S A 1 竪穴住居と S C 1 土坑の炭化材はコナラ属アカガシ亜属、S A 2 竪穴住居の炭化材はイスノキと同定された。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称され、イチイガシ、アラカシなど多くの種がある。イスノキは暖地の山中に自生する常緑広葉樹である。いずれも照葉樹林の主要な要素であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

## 第3節 炭化種実同定

### 1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

### 2 試料

試料は、S A 1 竪穴住居と S A 2 竪穴住居の埋土および各グリッドのⅡ層とⅢ層から採取・選別された炭化物である。試料の詳細を表16に示す。

### 3 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定した。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### 4 結果

#### i) 分類群

分析の結果、樹木1、草本1の計2分類群が同定された。表15に結果を示し、主要な分類群について写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

#### [樹木]

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉（半形・破片）ブナ科

炭化して黒色で楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

#### [草本]

ニシキソウ亜属 *Euphorbia* Subgen. *Chamaesyce* 種子 トウダイグサ科

種子は茶褐色で卵状4鈍稜体を呈す。基部はやや尖り、背面と左右の3稜は隆条状で稜間の面はそれぞれ数条の横ひだがある。炭化していない。

表16 種実同定結果

No	遺構・ グリッド	層 位	取上げ No	分類群		部位	個 数	備 考
				学名	和名			
1	C 4	Ⅲ	31	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(破片)	6	
2	C 4	Ⅲ	36	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(半形)	1	
3	D 2	Ⅲ	一括	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(破片)	3	
4	D 3	II	一括	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(破片)	2	
5	S A 1	埋 土	9	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(破片)	1	
6	S A 2	埋 土	一括	<i>Euphorbia</i> Subgen. <i>Chamaesyce</i>	ニシキソウ 亜属	種子	3	炭化物42、炭化材6 昆虫片9

## ii) 種実群集の特徴

**S A 1** 堅穴住居の埋土および各グリッドのII層とIII層から採取された種実13点は、いずれも炭化したイチイガシの子葉(半形・破片)と同定された。

**S A 2** 堅穴住居から採取された種実3点は、いずれもニシキソウ亜属と同定された。これらは未炭化である。また、種実ではない炭化物42点、炭化材6点、昆虫片9点が認められた。

## 5 考察

種実同定の結果、イチイガシおよびニシキソウ亜属が同定された。イチイガシは、西南日本の照葉樹林を構成する主要高木であり、カシ類の中でアカ抜きなしに食べられる唯一の種類である。ニシキソウ亜属は、路傍や田畑に地面を被うように繁茂する雑草であり、有用植物ではない。

## 第4節 植物珪酸体分析

## 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO<sub>2</sub>)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。

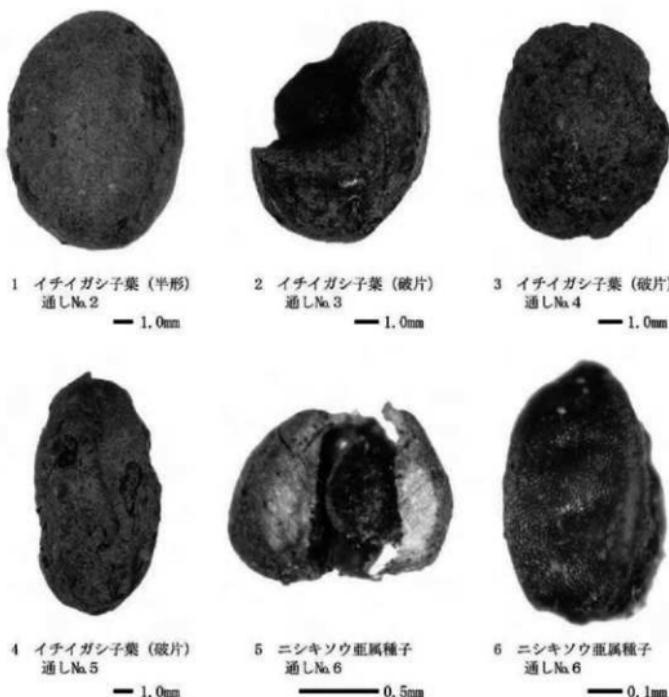


写真6 種実

## 2 試料

分析試料は、弥生時代中期とされるSA2堅穴住居の埋土から採取された1点である。

## 3 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- ①試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- ②試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- ③電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- ④超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- ⑤沈底法による20μm以下の微粒子除去
- ⑥封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作製
- ⑦検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ

個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10~5 g)をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### 4 分析結果

##### i) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

###### 〔イネ科〕

ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

###### 〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節・ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

###### 〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

###### 〔樹木〕

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

##### ii) 植物珪酸体の検出状況

分析の結果、ネザサ節型やミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型なども認められた。また、樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある(杉山, 1999)。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い(近藤・佐瀬, 1986)。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型およびミヤコザサ節型が優勢となっている。

#### 5 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

弥生時代中期とされるSA2堅穴住居の埋土の堆積当時は、メダケ属(おもにネザサ節)やササ属(おもにミヤコザサ節)などの竹籠類をはじめ、ススキ属やチガヤ属なども生育する比較的開かれた環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。ササ属については、照葉樹林の林床に生育していた可能性も考えられる。

表17 植物珪酸体分析結果 検出密度 (単位: ×100 個/g)

分類群	学名	地点・試料 SA2 埋土
イネ科	Gramineae	
スキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae</i> A type	36
タケ亜科	Bambusoideae	
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocal	22
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nezasa	153
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Sasa etc.	7
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Crassinodi	255
未分類等	Others	73
その他のイネ科	Others	
表皮毛起源	Husk hair origin	15
棒状珪酸体	Rod-shaped	87
未分類等	Others	269
樹木起源	Arboreal	
ブナ科 (シイ属)	<i>Castanopsis</i>	15
クスノキ科	Lauraceae	29
マンサク科 (イスノキ属)	<i>Distylium</i>	58
その他	Others	22
植物珪酸体総数	Total	1049

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>·cm)

スキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocal	0.25
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nezasa	0.73
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Sasa etc.	0.05
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Crassinodi	0.76

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocal	14
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nezasa	41
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Sasa etc.	3
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Crassinodi	42

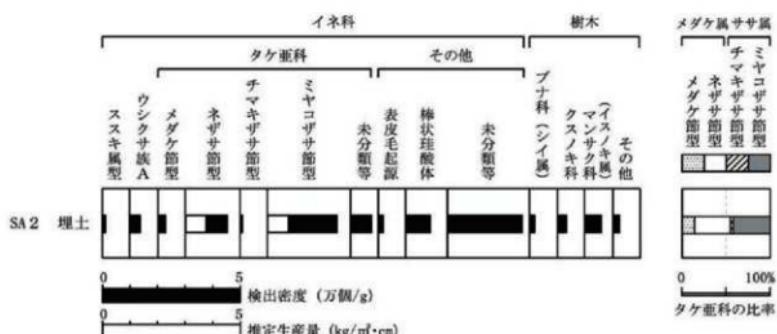


図64 植物珪酸体分析結果

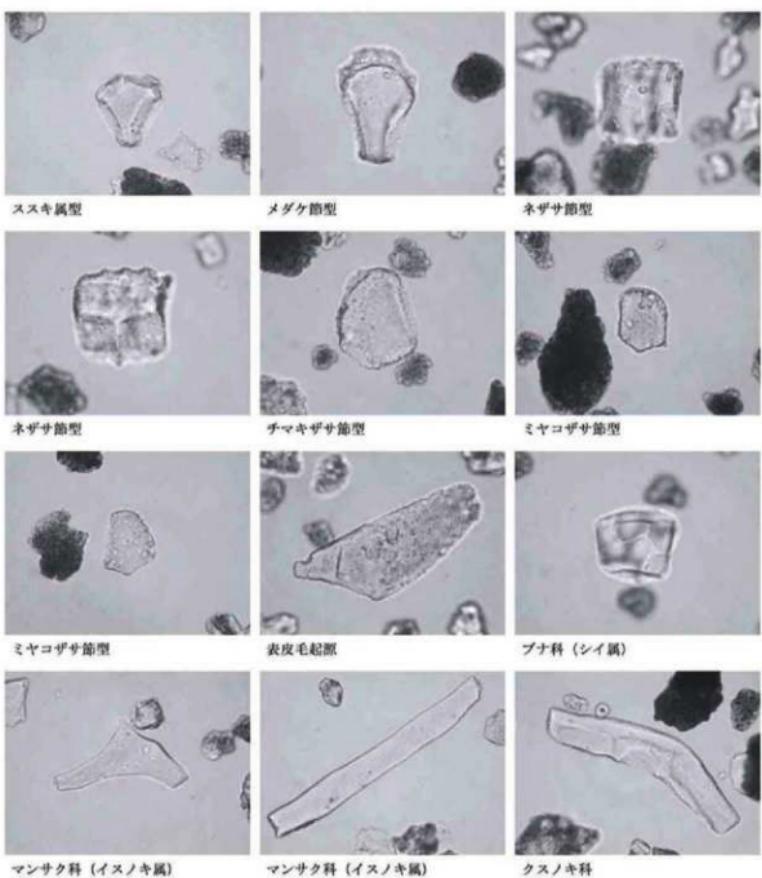


写真7 植物珪酸体

— 50  $\mu$  m

## 第5節 花粉分析

### 1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

## 2 試料

分析試料は、弥生時代中期とされる S A 2 塊穴住居の埋土から採取された 1 点である。これは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

## 3 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- ①試料から 1 cm を秤量する。
- ②0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて 15 分間湯煎する。
- ③水洗処理の後、0.5 mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去する。
- ④25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。
- ⑤水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
- ⑥再び氷酢酸を加えて水洗処理を行う。
- ⑦沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製する。
- ⑧検鏡を生物顕微鏡によって 300~1000 倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。

## 4 結果

### i) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 2、草本花粉 1、シダ植物胞子 2 形態の計 5 個である。分析結果を表 1 に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

#### 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属

#### 〔草本花粉〕

イネ科

#### 〔シダ植物胞子〕

單溝胞子、三条溝胞子

### ii) 花粉群集の特徴

分析の結果、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科、およびシダ植物胞子が検出されたが、いずれも少量である。

## 5 花粉分析から推定される植生と環境

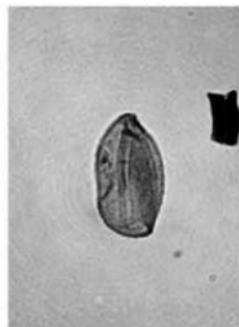
弥生時代中期とされる S A 2 塼穴住居の埋土では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、周辺にマツ類やナラ類などの樹木、およびイネ科などの草本類が分布していた可能性が考えられる。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが想定される。

表18 花粉分析結果

分類群	和名	S A 2 埋土
学名		
Arboreal pollen	樹木花粉	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	1
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	單条溝胞子	3
Trilate type spore	三条溝胞子	11
Arboreal pollen	樹木花粉	4
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木 · 草本花粉	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	1
Total pollen	花粉総数	5
Pollen frequencies of 1 cm <sup>2</sup>	試料1 cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	2.4 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	2
Fern spore	シダ植物胞子	14
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	



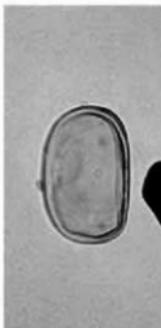
1 マツ属複維管束亞属



2 コナラ属コナラ亞属



3 イネ科



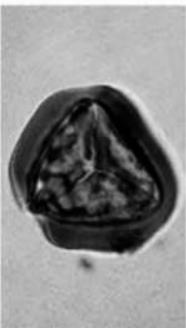
4 シダ植物单条溝胞子



5 シダ植物单条溝胞子



6 シダ植物三条溝胞子



7 シダ植物三条溝胞子

— 10 μm

写真 8 花粉 · 胚子

## 引用・参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP, Radiocarbon 46, p.1029-1058.
- 笠原安夫 (1985) 日本雜草図説, 義賢堂, 494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および田畠雜草種類, 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-252.
- 近藤錦三・佐藤隆 (1986) 植物珪酸体, その特性と応用, 第四紀研究, 25, p.31-63.
- 鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造, 文永堂出版, 290p.
- 島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定-古環境推定の基礎資料として一, 考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史, 第四紀研究, 38(2), p.109-123.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オバール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.
- 中村純 (1980) 日本產花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代, p.3-20.
- 南木龍彦 (1993) 葉・果実・種子, 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版社, p.276-283.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史, 植生史研究特別1号, 植生史研究会, 242p.
- 吉崎昌一 (1992) 古代雜穀の検出, 月刊考古学ジャーナルNo355, ニューサイエンス社, p.2-14.
- 渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食, 雄山閣, 187p.

# 図 版

図版一 住吉B遺跡 調査地遠景



遺跡東側上空から住吉B遺跡および上面木山方面を望む（2005（平成16）年10月撮影）



遺跡上空から東側日向灘方面を望む

図版二 住吉B遺跡  
南壁地層断面および縄文時代早期の遺構  
(一)



南壁地層断面（北東から）



縄文時代早期遺構面全景（南から）

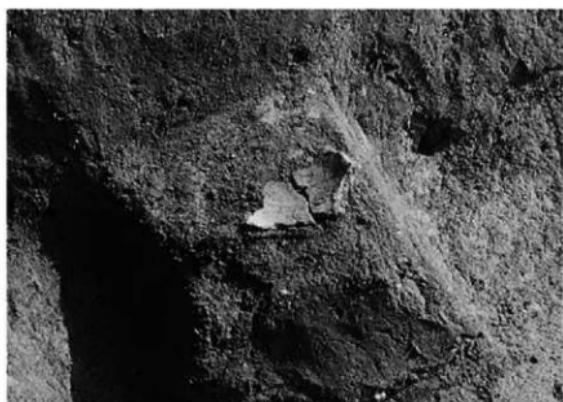
南西部縄集中部（北西から）



S C 2 検出状況（南東から）



S C 2 繩文土器出土状況  
(南西から)



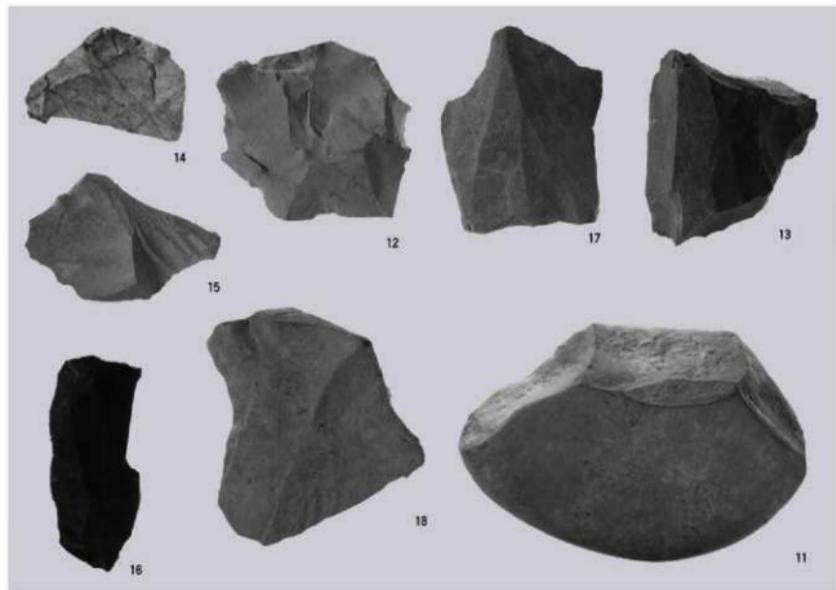
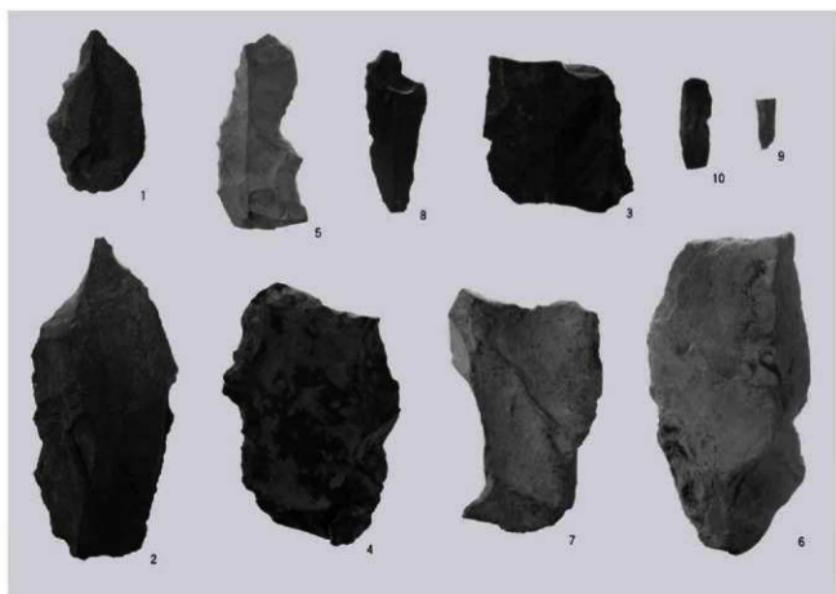


S I 1 検出状況（北東から）



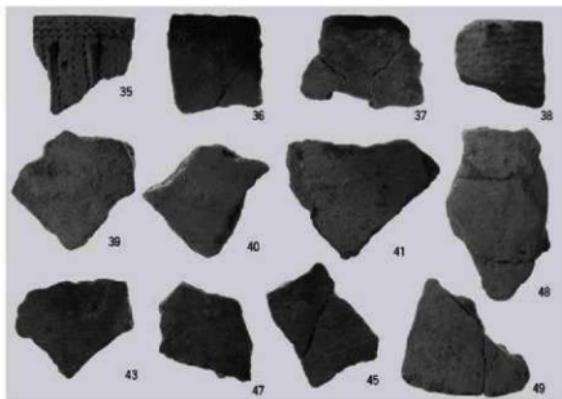
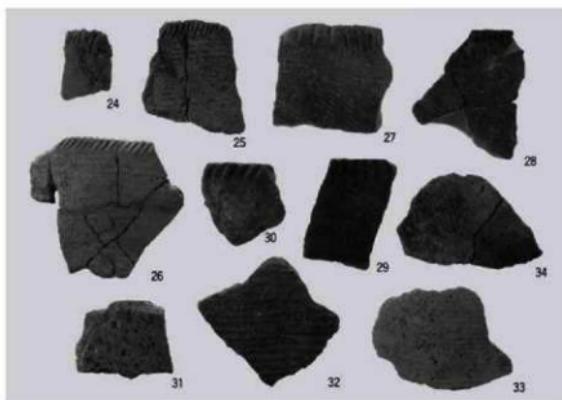
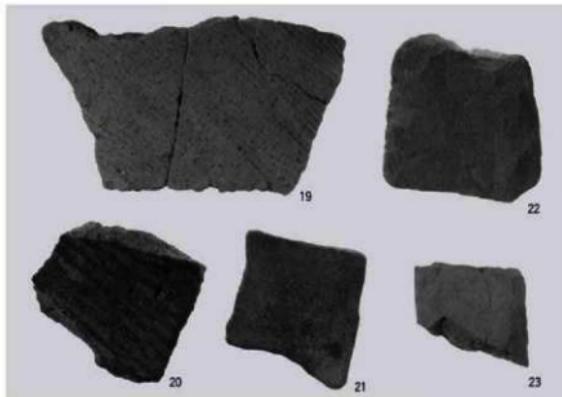
S I 1 検出状況（南から）

図版五 住吉B遺跡 旧石器時代の遺物

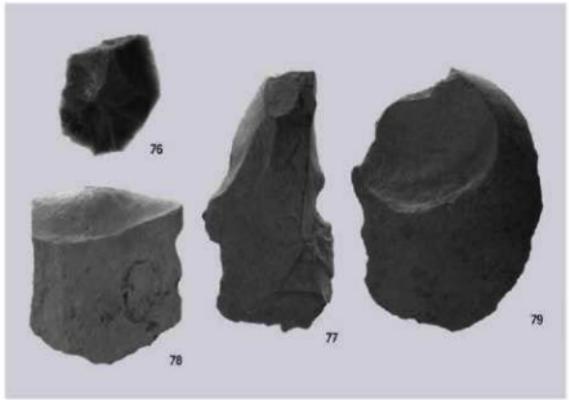
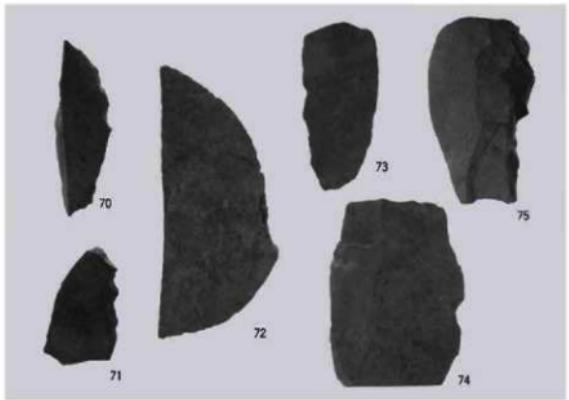
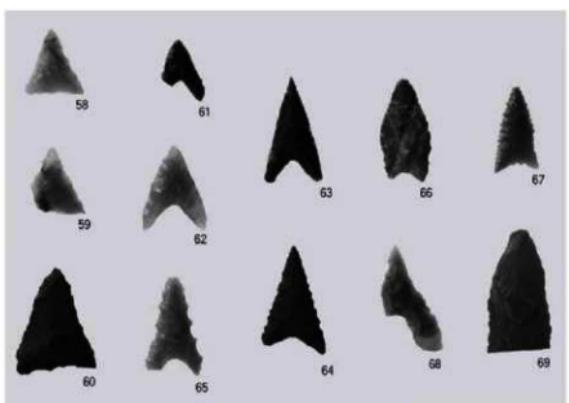


図版六 住吉B遺跡

SC2・SI1出土および縄文時代早期の遺物（二）

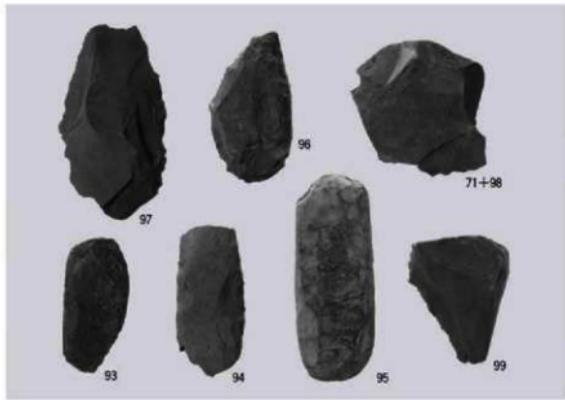
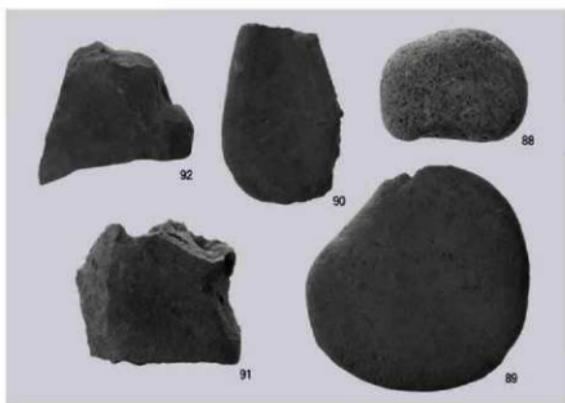
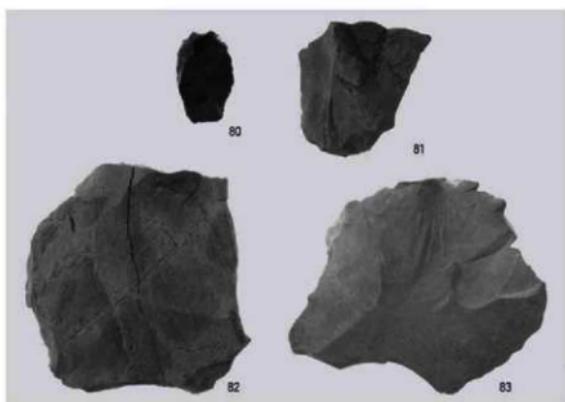


図版七 住吉B遺跡 繩文時代早期の遺物（二二）



図版八 住吉B遺跡

縄文時代早期の遺物（三）



図版九 赤石遺跡 調査区

調査地遠景  
(遺跡北西上空から)



調査区全景  
(上が北東)



調査区西壁土層断面  
(東から)



図版十 赤石遺跡 遺物包含層および縄文時代の遺構（二）



III層（B 2区）出土遺物  
No426（北から）



S A 1 遺物出土状況  
(西から)



S A 1 出土遺物  
No106（北から）

図版十一 赤石遺跡 繩文時代の遺構（二）

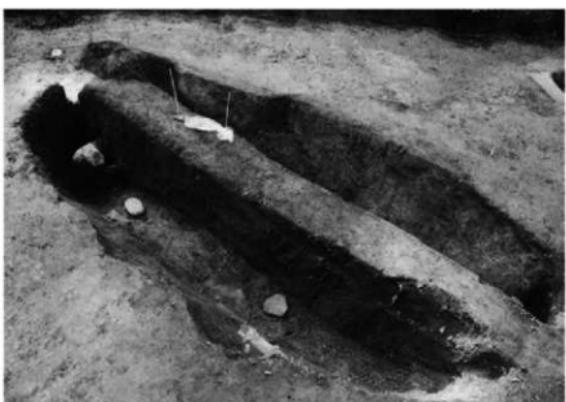
S C 1 検出状況  
(北西から)



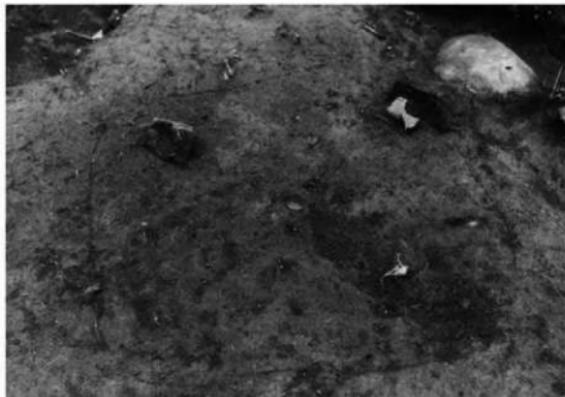
S C 1 土層観察ベルト  
断面 (北から)



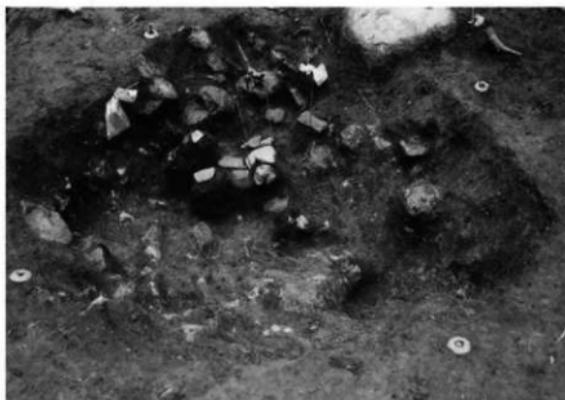
S C 2 土層観察ベルト  
断面 (北東から)



図版十二 赤石遺跡 繩文時代の遺構（三）



S C 3 検出状況  
(北東から)



S C 3 遺物出土状況  
(北東から)



S C 4 検出状況  
(東から)

図版十三 赤石遺跡 繩文時代の遺構（四）

S C 10埋土土壙断面  
(北東から)



S C 11遺物出土状況  
(北から)



S C 11埋土土壙断面  
(北東から)



図版十四 赤石遺跡 弥生時代の遺構（二）



S A 2 遺物出土状況  
(北西から)



S A 2 床面検出状況  
(南東から)



S A 2 完掘状況  
(北西から)